

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
元治元年七月ノ三

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数七三枚)の記載あり〕

目録

舊邦秘録本藩戦功御褒賞

〔小松帯刀ヨリ大久一蔵へ書翰〕

〔小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ戦況報告〕

〔小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ戦況概況〕

〔七月二十日小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ書状〕

〔大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ京師戦況概報〕

〔甲子七月廿日在京御兵具方肝煎職足輕頭席、川路正之進良戦

争事実家族へ通信書牘〕

〔内田氏宿許へノ書状写〕

〔薩藩天龍寺討伐ノ概況〕

〔薩州之手ニ分取品ノ内軍令状〕

川上助八郎接戦

長賊山崎天王山敗走之時捨置タル書

四藩連署建言

大山格之助書翰

御軍役奉行伊地知正治書状写

長藩征討ノ発令

舊邦秘録

薩州京師屋敷留守居ヨリ江戸留守居江之書状写

薩州分捕届書

仙臺留守居ヨリ廻達写

小松帯刀大久保一蔵へ送ル書牘

舊邦秘録

島津備後同圖書某詩歌

三七一 舊邦秘録本藩戦功御褒賞

七月廿日御達

鳳闕之下不慮紛攘之処、一同出勢抽丹誠候段、

叡感不斜大義

思食候事、

此御達書伝奏衆ヨリ各藩重役御喚出シ被達、本藩ニハ小松帯刀拜承、而シテ同人乾門御警衛場ニ於テ各隊長へ被達、而隊長朗誦シテ隊員へ拜承セシメタリ、此時本藩ハ嵯峨天龍寺へ出軍ノ帰路ニシテ勝誇リタル際、褒賞ヲ蒙リ一層勇ミ振ヒタリ、此時ヨリシテ本藩兵ハ直チニ追躡シテ長州ニ攻入り、大膳父子ヲ誅シ、國司・益田カ輩カ首ヲ梟セントス、国老等ニ向テ論スルコト甚タ盛ナリ、国老等モ是トシ、一橋殿ニ就テ上陳スト雖モ、朝幕ノ議因循ニ流レ、列藩ノ気嚮モ定マラス、或ハ堂上方ノ間ニ於テモ正邪判然セス、加之

禁闕ノ衛兵モ乏シキカ故、先ツ内ヲ治メ、然シテ後大兵ヲ挙テ堂々征討シテ、遅シトセストノ議ナリシト云フ、編者曰、嗚呼此機ニ乘シ、直チニ追躡西下セハ、長州ニ討入ルヤ尤モ容易ナルヤ論ナシ、況ンヤ勝チ誇リタル官軍ナルヲヤ、敢テ多数ノ兵ヲ以ルニ及ハサルナリ、若シ本藩一手ノ兵ヲ以テスルモ、大膳父子ノ首ヲ見ルヲ得サルモ、萩・山口ノ兩所ヲ屠リ、再ヒ官軍ヲ動カ

サスシテ、根拠スル所ナキニ至ラシムルヤ、鏡ニ照シテ見ルカ如シ、古人ノ言ノ如ク、兵ハ拙速ヲ尊フト宜哉、然ルニ

朝議幕論因循ニ流レタル、実ニ群議服ニ充チ、衆難胸ニ塞リ、徒ニ内治不整ノ点ニ拘泥シ、勝敗利鈍ヲ主論トシ、機会ヲ誤リ、而シテ禍根ヲ断ツコト能ハサルニ至レリ、長藩機運未タ尽キサルトモ云フヘシ、此時一橋殿ハ總督ノ命ヲ拜シ進退ノ權アリ、何ソ他ヲ顧ルニ及フヘケンヤ、本藩ノ建言ヲ容レ、断然自ラ督シテ西下スルトキハ、列藩挙テ奮進勇闘スルヤ論ナシ、又洛中不虞ノ憂アルコトナシ、然ルニ長袖堂上方井蛙、区々ノ却説ヲ吐クコト能ハサルヤ疑ナシ、

三七二 小松帯刀ヨリ大久保一藏へ書翰

此節之一左右御承知ノ上ハ、直様 御出京之 思召守太フ云 莫不被計奉存候得共、未タ今日迄之所ニテハ何事モ能ク相分リ不申候間、今一左右ハ御見合相成候様ニテ可然ト奉存候、不日翔鳳丸汽船ヲ以別段御届可申上候、人数御差出等之儀モ、今一左右之上ニ可被成下候、併奈良原寺五郎・両高崎左太郎等之所ハ、思召次第御繁旧名

差出被下可然奉存候、

一此節ハ此方守衛人数不殘余程決心ニテ相働、他藩ニ替
リ別段相働キ、薩兵ナクンバ此節ギリトノ事ノ由ト、
今ヨリ手ニ汗ヲ握リ申ス程ノ事ニ御座候、夫程丈ケノ
働ニ御座候間、願兼候得共、守衛方守衛方トハ在之所ヘハ
御手厚ク、御沙汰御沙汰トハ御申越相成候様有之候ハ、一
統難有、尚是上十分之働モ出来可申ト奉存候間、当座
ノ御沙汰相願度奉存候、大島・伊地知・吉井・内田
大島トハ西郷吉之助、伊地知
正治、吉井幸輔、内田仲ノ助等モ格別之働ニ御座候、大島モ足
ニ銃丸当り候得共、少シ之事ニテ、今日モ天龍寺へ出張
ニ相成仕合ニ御座候、税所長長蔵ヲモ余程相働キ申候、
小銃丸三ツ受手負ニ御座候、先ツ命ニハサシ支モ無御
座候間、仕合ニ御座候、其外一統ノ働モ格別ニ御座候、
一々不申上候間御推計可被下候、細事後便可申上候、
以上、

廿日七

帯刀小

一蔵様大久保

三七三 小松帯刀ヨリ大久保へ戦況報告

長州天龍寺等江出張之段は、此内より申上越候通御座

候て、

朝命も不奉既ニ違

勅ニ相成候付、追討之命昨十九日ニ御達相成候筋ニ
て御座候処、一昨夜より頻ニ不穩向ニテ、諸々所之人
数手配等も有之候処、一昨夜中ニ密々忍出居候よし、昨
未明ニ此方人数式ツニ分、天龍寺討手并乾御門御守衛
ニ被差出候処ニテ、既ニ天龍寺之方江向人数繰出シニ
取掛候処、俄ニ中立賣御門江炮声相聞江、直様乾御門
江人数も振向候処、中立御門ハ押破り、公家御門前迄
押寄余程炮発等いたし、勢ひ甚敷御座候処、此方大炮
并小銃隊押出シ戦ニ相及候処、引退日野家江逃入、又
々々天龍寺之方江逃行候を奈良原舊左組ニテ打取、四五
人ハ打洩らし申候、烏丸通ニテ大戦有之、是も総て打
取ニ相成候、大島・いち、其外皆々下知ニテ莫大之働
ニ御座候、鷹司氏江多人数立籠り居、諸軍勢を以打破色烽
火、過半は打取少しハ逃行申候、此戦ニは會・彦兩藩も
余程相働申候、明方より打込候炮火ニテ、鷹司より出
火、一方ハ室町より出火、余程大火ニ相成り、未兩方共
鎮火ニ相成不申候兵燹中ノ急報、然見ルカ如シ、洛中ハ不殘程、洛外ニ
も只今ともハ焼失と被存申候、両公子ニも島津凶書久治、島
津備後忠鑑ライフ

御出張御守衛御座候、宮公子陽明殿前、富公子ハ日御門内ニテ御警衛ニ御座候、早朝より之戦ニテ、四ツ時分ニは敵も逃去、しかし逃ニも十分逃られず、諸方市中江潜居いたし居候得共、炮火ニテ焼出され、皆々切捨打取相成申候、此方よりは数も不相分程ニ御座候、未拙者ニも能ク聞取不申程之事ニ御座候、今日ハ天龍寺討手被仰付、未明ニ人数繰出し、拙者出張いたし候処、昨夜落行候跡ニテ、老人残居召捕申候、左候て天龍寺は火起り焼失ニ相成申候、右火嵐山之松ニ付、法輪寺并山中只今盛火ニ御座候、未鎮火之程合も不相分候、

一朝廷ニても昨日は余程御恐怖ニテ、

朝議も既ニ相動き候模様ニ相成、暴論之堂上方、勢ひ甚敷候由、尹・常・内公尹宮・常陸宮・近衛三公ヲイフ等余程御心配、橋公も余程之心配ニ御座候、併一橋公余程振はまりニテ御動揺も無之、誠ニ難有事ニ御座候、橋公も参内守護、戦之折ハ日御門前江出張ニテ自下知も有之、余程之尽力ニテ仕合ニ御座候、御推計可被成候、
一此方人数ニテ打取候首数廿ニ、召捕七人ニ御座候、実見ニ備候数ニ御座候、其外炮火起り候上ニ切捨打取候ハ

数相分不申、多分ニ御座候、未取調も出来不申候戦後次日大砲調査モ精シカラサル、無論ナリ、
寺進軍等ノ事ニテ、首級生捕等ノ

一此方戦死も有之誠ニ残念ニ御座候得共、皆々相働候故ニテ、右之仕合誠ニ感涙ニ御座候、表向人数等は申上候、何れ何と軟被成下事候得共、今日迄ハ逆も右之吟味迄も出来不申候間、追て吟味之形行ハ可申上候間、其上ニ御沙汰ニ相成度、乍恐奉存候、

一山階宮御住居御焼失ニ相成申候、併外御借用ニ相成候よし、今日ハ藤井良節之長屋江しはし御入ニテ御座候、誠ニ御高配旁恐入候、

一先日より形勢御届申上候善御座候処、少々相分候上と見合候処、か様之大変ニ相成、昨日ハ逆も申上候間も無之、其上往來も出来兼、甚遅延仕候、誰ぞ差下シ細々申上度奉存候得共、只今之形勢要路之人乏敷御座候間、其義も相叶不申、乍併大変之事ニテ、奥掛書役政行筆吏ノ通稱、
皇山吉次郎江細々申含差下申候間、当人より御聞取言上相成候義、宜敷御取計可被成候、大抵機密之事も申聞置申候間、御質問被成候ハ、相分可申候間、左様御含可被成候、
一先賊追討も出来、

朝威も相立、難有事ニ御座候、此末第一ニ御座候（此末第一云々）
戦功ノ第一ト云フ義ナ間、如何様之 御趣意（御趣意トハ、國父公今春リ、実ニ御言ニアラス間、御退京ノ節命令ヲ云フナ）ヲを根本ニいたし尽力可仕候間、左様御承知可被成候、此旨早々御届申上候、以上、

右外追々申上候、一昨夜より昨日も終日戦争、今日も未明より天龍寺江出張にて、只今一寸と罷帰候処ニ御座候、兩三日も不寝旁故、文面等不連続之義も可有之候間、可然様達 貴聞候義共御取計可被成候、以上、

七月廿日申之剋認

（島津忠承氏所藏本にて校訂）

帶刀小松

一藏殿大久保

御内用

三七四 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ戦況概報

兩公子（兩公子トハ忠盛・久治ノ二公子ヲ云フ）余程御振ハマリニテ、御警衛等十分御勤被遊、誠ニ〳〵感心落涙之次第ニ御座候、実ニ御兩殿様ニ御替リ御成リ、御趣意十分被遊御勤、実ニ難有奉存候、形行言上被成置度奉存候、何モ難有奉存候、其故惣勢モ相進申候、何モ御推計細事申上兼候、以上、

廿日 七月

一藏様大久保

帶刀小松

三七五 七月二十日小松帶刀ヨリ大久保一藏へ書状

於其御地

上々様御機嫌克被為入、恐悅奉存候、於爰元兩公子御安康、昨今共ニ御警衛御勤何も御別条無之、御安泰被為成候間、

御安心被遊度奉存候、嘸此方之變事御承知之上は、御兩殿様御高配之程何共奉恐入候、折角御遵奉之道相立候様ニは、精々尽力仕候含ニ御座候間、左様御承知可被成候、

御機嫌相同度奉存候間、可然様御執成可被成候、貴様ニも御安泰被成御勤奉珍重候、拙者ニも無異罷在候間、御休意可被下候、先は此段如斯御座候、以上、

七月廿日

小松帶刀

（島津忠承氏所藏本にて校訂）

三七六 大島吉之助ヨリ大久保一藏へ京師戦況概報

報

尚々 鳳輦を奉奪候謀計にて、実ニ薩兵あらずんハ危き次第ニテ御座候、此度ハ 御所江向ひ炮発いたし候付てハ、天下之人望を失ひ候而已ならず、大逆之罪を得、其上異人と和議を結び、旁是迄之詐謀一時ニ相頭、 天罰を蒙り候事共ニ御座候、

先度より申上越置候長州之一条ニ付、堂上方荷担之御方々も多く、色々と議論紛々之事にて、追討之

勅命相下り候処六ヶ敷、殊ニ長州違 勅之事ニ付てハ罪状明白之訳にて、色々手を尽し、已ニ

勅命相下ル一段ニ罷成居候処、もふハ致方無之迎相起り候哉、一昨晚より人数繰出し、中立賣より攻登未明

より戦争相始候処、諸藩之御固場所も打破、公卿御門迄攻入候処、此御方様本藩ヲ一手を以打破追退、

烏丸通より一手押出し、大砲を以互ニ打合、室町よりも一手繰出し攻打候処、無程退散いたし、鷹司家内江

逃込、炮戦有之、又々崩かたく、此御方より炮隊并二組之人数を以打挫、火攻ニ及候処、たまり兼早々退去

候由、國司信濃・益田〔親施〕右衛門介等之面々罷居たる由御座候得共、打洩したる事残念之至ニ御座候、乍然國司

儀ハ旗并具足等打捨逃去候付てハ、首級同様之訳ニ御

座候、伏見之義ハ福原〔元圃〕越後主宰ニテ御座候処、大垣之手勢を以打破候由御座候、今日ハ又々天龍山江攻懸候様御達相成、御人数被差向候処、不残退散跡ニテ一人之生捕有之候計ニテ御座候処、巢穴を破置賦ニテ火を懸焼崩申候、山崎之方も皆崩立逃去候故、今日之合戦ハ何事も無之引返し候事共ニテ御座候、此度之薩勢之鋒、衆人之耳目を驚し候事共ニテ、大慶之儀ニ御座候、

備後〔忠〕様ニハ 日の御門内、圖書〔久治〕君 様ニハ乾御門御堅御出張相成、勝たる御都合

ニテ、難有事共ニ御座候、此旨急々申上候間、吉次郎、當時政庁筆吏 方より細事御聞取可被下候、後便委細可申上

候、恐々謹言、

大島吉之助〔西郷隆盛旧名〕

七月廿日

大久保一蔵様

追啓上、烏丸通之大炮攻合ニ、長方より散弾をつるべて打込候処、怪俄人も段々有之、長蔵〔税所長蔵〕儀足ニ少々疵を蒙候得共、決て御念遣之義ニハ無御座候、疵を蒙りながら少しもひるまず、矢種之尽る迄打込候次第、恐る計ニ御座候、

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

三七七 甲子七月廿日在京御兵具方肝煎職足輕ノ頭席

川路正之進良戰爭事実家族へ通信書牘

前文略ス、七月十九日長賊都テ押入り、彈丸雨下之地ニテ相働キ、味方ハ前後左右即死・深手・薄手等モ有之候得共、如何神ノ加護ニモ有之候哉、私ニモ薄手一ヶ所モ負不申候間、御安心可被下候、深ク君恩ヲ奉蒙、是非打死ノ覚悟ニテ、折角致拝借候鐵拜借トハ具ヲモ、態ト着用不仕、籠手計リ相掛ケ打死ト致血戰候得トモ、不思議ニ助命仕候、其後烏丸醍醐御所之前ニテ太刀打イタシ太刀打致候云々、長賊篠原秀太郎ト云ヘ申候、此働キハ人様ヨリ御聞キ被下候得ハ相分リ可申候、打留候者ハ長賊誠意隊ノ篠原秀太郎ト申ス者ニ御座候、右鎧ハ私頂戴之賦ニテ、血シホノ鎧ヲ取りカヘリ置申候、誠ニカタキヨロヒニテ、長信ノ刀ニテ切レ不申、四本氏カマ刀ニテ心ミラレ試候得共通リ不申、案ミニ罷在候、且又其後七ツ時分足輕十人計召連、鉄砲其外敵ノ武器取揃方トシテ差越候処、又々醍醐御所へ敵数多残り居候、何分屋籠ニテ太刀打不相叶、乍残念火ヲ掛ケ候処、追々大砲隊等集、生捕或ハ焼

死又ハ逃ケ去リ申候、

一十九日出陣ノ節ハ、既ニ最後之状迄モ認メ置、源七郎源七郎トハ川内郎力美弟ナ、可氣事ヲ云フ殿へ残シ置申候、残念ハ今ニ頭ノ重サ取レ不申候、足ノヒキモ脚氣病後ノ事ヲ云フ十分ニ無之、戰場ニノソムニハ打死ノ覚悟ニ御座候、半町計リモハシリ候得ハ足ヒキ叶ヒ不申、其故川上助八郎殿へ切掛リ候敵ヲ、半丁計之所ヨリ掛行キシコロヲ切候処、敵私股ノ間へ倒レカ、リ、私モ共ニタオレ、手早クヲキ上リ又胸ヲ切り申候、身サカンニ御座候得ハ、タル、ニ不及候得共、残念ニ御座候、其日終日ノ炎天ニテ頭痛致発熱御屋敷へ休息、廿日之軍ハ御用有之出陣不仕候、天龍寺出張ヲ承リ、唯打洩シタル殘賊ノミニテ、サマテノ事モ無之ト相考申候、

一此節ノ戦ハ、此御方様第一之戦功ニ御座候、実ニ筑前ハ中立賣御門ヲ破ラレ、此方ハ公家御門ヨリコトククライオトシ、烏丸・室町・新町此方ヨリ打崩シ申候、打留之數等ハ相分リ不申候、残り大小銃相分リ不申、御兵具所・御座并庭へ取入レ、昨日ヨリ今日迄モ兵火今ニキヘ不申、私共ヨリ付ケ候川内等カ火セシ醜聞境所ヨリ焼キ立候火、今昼時分兩本願寺ヲ

モヤキ申候、

一 今目御所へ入り申候処、何レモ甲冑何万人ト申儀相
分り不申、実ニメツラシキ世フリニ御座候、何レ引
ツ、キ長州征伐之風聞ニ御座候、今夜モ六ツ時過拾
發官軍旗ノ音アリト云テ計リ鉄砲之音聞申候得共、最早此方ヨリ
器械ヲ取ラレ候ニ付、敵働キ出来不申候、

一 鷹司殿へ賊押入候得共、會津并此方ノ人数ニテ打留
メ、又ハ御殿モ焼失致候、

一 打死ハ武士之ノソム処ニ御座候ヘドモ、アレ程之戰
ニ、太刀打勝負ハ私ドモ式人ニテ式人トハ川上助八郎
川内ナリシヲ云フ御座

候外ハ、皆鉄砲ノミニニ御座候云云略ス、

七月廿日

三七八 内田氏宿許へノ書状写

任幸便一筆啓上仕候、以下略ス、然ハ先日ヨリ度々申
上候通、長藩土福原越後・國司信濃ト申重役共へ人数
引取候様、寛大ノ仰渡奉承知ナカラ色々申立、埒明キ
不申所ヨリ、一昨十七日大目付永井主水正殿(尚志)・御目付
小出五郎(有礼)左衛門殿外一人伏見御役所へ出張、福原御呼
出、十八日限引取候様、不引取候ハ、嚴重ノ所置可有

之旨、屹度被仰渡候由、尤両様ノ間別段御答ニ不及引
取候ハ、其時儲モ承服致シタト存候、又不引取候ハ
、右申通可相心得被申達候処、流石ノ福原モ声振候
哉ト申触シ候、然処昨朝依

朝命、此御方ハ、天龍寺ノ方國司信濃大将トシテ出張(親指)

居候間、右討手被仰付未明ニ張出シ、総大将備後殿(島津重豪)・

御家老小松帶刀(清應)・吉井(友忠)・私ニモ被召附段々備、六ツ過

頃出張ノ手都合ニ候処、長人逆寄ニイタシ、中立賣御

門へ六ツ過頃押寄候ニ付、御固メ黒田様ヨリ及砲発、

夫ヨリ頻リニ鉄砲打合、終ニ黒田敗走ニ及ビ、公家

御門迄長人四五人押入、其砌此方御備、前以逆寄ノ儀

ハ致承知候央、砲声近く相聞へ候ニ付段々繰出シ、烏

丸通りヲ下へ押出シ、作備モ有之、乾御門へ押出備モ

有之、然処乾御門内一條様・近衛殿角合所へ備付候、

公卿御門ノ長人扣場ヨリ、頻リニ砲発、私ニハ同所へ

出張ノ処、頭上ブン／＼ト玉声致シ、幾計共ナク通候

故、氣味悪ク候得共、爰ゾ究竟ノ処ト皆々粉骨、砲玉

ヲ不恐大砲ヲ押出シ、都合三十二三替々打出シ、小砲

モ銘々同様打出シ、其勢ニ時ノ声ヲ何レモ不思発シ、

急ニ駈出申候処、其勢ニ辟易シ、長人日根様御門内へ(野)

逃入申候ニ付、則チ 公家御門前取返シ備ヲ立、嚴重御守衛申候、其場此御方即死隈ノ城物主野村勘兵衛、手負土師吉兵衛、口ノ脇ヨリ耳ノ下へ砲玉通り候共、存命ニテ引取相成養生出来申由ニ候、私ニモ込合ノ砌半首・揚卷ノシンク一ツ打切ラレ申候、運ノ強キ事ニテ御喜悅可被下候、 公家御門辺御築地砲丸ノ跡數ヶ所有之、御門辺段死骸打重リ、長人多ク、官軍ノ方會津隊將軍ニテモ可有之哉、黒田ノ固メ被破候節、床几ニ乍懸居被倒居候、會津人五六人即死、御場柄何モ恐入仕合ニ御座候、烏丸通中立賣御門外ニテ大島・吉井其外平田平六杯大難戰、中原松助大砲ヲ室町へ押返シ、中立賣長人ノ備跡ヨリ葡萄丸七ツ入一ツ八十目位有之由、夫ヲ打カケ候処、一発ニテ散々ニ相成リ大ニ敗軍、此場大島鉄砲疵、税所長蔵股へ二ツ向スネへ一ツ、是ハ重疵、命ニハ差支無之、赤井兵之助真向命ハ不定、阿久根様一人即死、深手二人、薄手四人、平田平六組ニテ一番ノ働ト申候、此内外ノ働必死無之候テハ 公家御門被打破、悉々ク布テ朝敵ト名ツケラレ可申候処、

天罰無相違、右通敗軍御高連ノ次第ニテ、未日月地ニ

落サセ給ハサル儀ト奉存候、夫ヨリ境町御門側ノ鷹司様御門内へ長人打入、去年八月通小楯トシテ鉄砲打出シ、大キニ邪魔仕候処、無抛燒玉打掛候処則火燃上リ、是以テ同様敗軍ニテ、追々長人無殘惣敗軍ニ相及申候、然処諸所へ潜伏致シ、段々此御方へ召捕相成リ都合四人、打取り首一ツ、切捨ハ不數知、実、薩ナカリセハ鳳輦ハ西セラレ可申ト世評ニ御座候、七ツ過近衛様御門前ニテ、圓書殿・備後殿御出、首実檢ノ法有之候、勝吐氣ヲ揚ゲ、二隊ハ乾御門へ御堅メ、殘ハ惣テ引取りニ相成申候、

一 今日本天龍寺へ押出候様被相違、六ツ時繰出、御家老小松殿・私ニモ罷出、同所へ九ツ時分參着ノ処、是以テ惣テ夜前逃出シ、山崎へ曳取候由、天龍寺内見分探索候処、長足輕老人殘居候、是以召捕相成申候、夥數火器類貯へ居、実ニ奸敵肝ヲ禿シ申候、直ニ火ヲ掛ケ燒崩シ候処、百千万ノ雷ノ落カケ様ノ音致シ、悉灰燼ト相成申候、嵐山近辺風林寺杯燒失、桜ノ場所ハ無難ニ御座候、風雅衆ノ喜ハ勿論、兵火ノ為名山燒、末代ノ恨ミニ候処、是以テ

天恩ノ厚ヨリト奉存候、夫ヨリ退軍、御屋敷へハツ時

分罷帰リ申候、山崎・天王山辺モ惣テ敗軍一人モ居残り不申候、落去相成候へ共市中不残致焼失、北ハ丸太町ヨリ南六條辺、東ハ川原町、西ハ堀川迄ニ御座候得共、未鎮火トハ難申上御座候、右ノ通ノ仕合ニテ此方ヨリ押出シ、天龍寺・山崎辺改立可申候、彼ヨリ逆寄致シ、逆賊トハ乍申軍ノ仕様ハ感心、実必死ノ働ニハ候へ共、天ニ逆フノ大賊忽右ノ仕合、実ニ御高運ノ御儀奉恐悦候、是ヨリ長ノ御所置モ相始リ可申、先ツ今日迄ハ右ノ仕合ニテ存命罷在候、御喜悦可被下候、唯今御始ニ御座候ニ付、如何罷成ル事歎見留付不申、当御代ハ如何仕候テ加様ノ儀度々ニテ九門ノ内ニ戦争、実ニ保元・應仁ノ乱モ此節如キハ有之間敷哉ト申コトニ御座候、恐惶謹言、

子七月廿日

内田仲之助

静風様「仲之助ノ実兄」

三七九 薩藩天龍寺討伐ノ概況

三七九ノ一

七月廿日、我カ藩兵ハ天龍寺屯在ノ賊ヲ討ント、昧爽ニ本松邸ヲ進發ス、案内者ニハ今熊野ノ伴左衛門ト云ヘル者ニシ此者常ニ藩邸出入ノモノナリ、此日ニ公子先鋒タラント争ハ

ル、国老小松帯刀中裁シテ自ラ先鋒ニ進ム、而シテ双ヒカ岡ヲ越シ、廣澤ノ池辺ニ沿フテ嵯峨ニ出、天龍寺ニ押寄せタリ、然ルニ豈凶ラン、賊軍ハ昨洛中ノ敗戦ニカナハシトヤ思ヒケン、早ヤ落チ去リテ一人ノ老卒落チ残り、糧米・軍器悉ク捨置キ、這々落チ行キタル形状ナリ、這卒ヲ生捕リ火ヲ放チ、鬨ヲ揚ケ、徐々シテ凱旋セリ、此時取乱シアル書類多シ、中ニハ宮及ヒ堂上方或ハ因・備・對・加其他ノ藩々ト密謀、往復ノ書類モ多ク、悖逆ノ確正ニ拱拱セント悉ク収メタリ、此日出軍本藩ノ人名左ノ如シ、

三七九ノ二

別紙

一 此手人数

税所容八

散玉足へ二ツ当リ込ル

大島吉之介

右モ同断少々、則出陣モ相調申候、

川上助八郎

右中途ニテ長藩へ出会、数十合相戦申シタ、カ切候へ共、一向不切候ニ付危相見得候処ヲ、肝煎川路何某走リカ、リ、横洞ヲ払ヒ打取候、其外町家へ潜リ候ヲ探

出シ、打取、或ハ生捕十三四人ニテ、皆此御方之一手働キニテ、一橋公杯一言半句モ無之由、夫ヨリシテ諸藩弥仰慕致候事、

〔有栖川熾仁親王〕

一 帥宮正議之御方ニ数十人御召連ニテ御参

内之上、直ニ時勢切迫被仰上、

皇国之御為強テ御諫争被為在候事、

一 右御参相成候ハ、相凶ニ長ヨリ哀訴、第一鷹司様并ニ

幽居之御方々様へ差上候事、

但同时ニ正議之御方々様并ニ列藩へモ右之書通達、

右御幽居之御方々様御覽被遊候テ、

皇国之御浮沈此一举ニテ断然御推察ニテ、帥宮様へ

逐一被 仰付候事、

此処ニテ宮始テ御聞ニ達シ、直様四門御守衛之儀加・

因・備へ被仰付候事、

三藩人数相集迄之処、有宮様へ兼テ差出置、因州人数

四門内御守衛被仰付候事、

九門ハ諸藩へ嚴重ニ守衛被仰付候事、

右ハ引統尹宮御参

内御差止、逐會之

勅命相下候事、

長州ヨリ

天・幕へ計會之書ハ鷹司殿御参

内ヲ相凶ニ差出候事、

引統會賊へ戦書ヲ送候事、

右之次第ニ候旨、委細ハ直チニ石川兄へ御聞取可被下候、

七月

右書状ハ福原越後ヨリ國司信濃へ上封宛名有之、嵯峨之木屋福田治兵衛トカ申有福之町人、兼テ長州出入ニテ何篇世話イタシ、新番格迄モ被仰付居候テ、此節之儀モ別テ世話イタシ候処、右人ハ逃去跡居宅へ此書面ハ残居候由ニテ、差出候ヲ一見イタシ写置、尤武器類長州目印之提灯等多ク為有之由、

三八〇 薩州之手ニ分取品ノ内軍令状

薩州之手ニ分取長州藩士懷中致シ候書付、則軍令条ト申候ハ此事ナリ、

右各藩へ被仰付候次第ニ候、宰相父子黒印所持、叛逆明白ニ候、

申聞之条々

一 今度其方事京都ニ上リ候事申付候、数々備者ヲ預ケ置候ニ付、ユルカセナク其方一人ニテ惣世話致候事、

一 二十五人組ハ其長之令ヲ受、又二十五人組之頭ハ一備之長ノ令ヲ受、一備之頭ハ惣大将之差図ヲ請、諸備和ラカニ睦マシク可為肝要ノ事、

一 陣中喧嘩之者ハ申ニ不及、其外立居振舞猥リニ動、大事ヲ誤リ候者、尤キビシク禁シ候事、

一 惣シテ非礼非義之振舞有之間敷事、

一 国々之ソゴニアラソヒ、猥ニ他ニ洩シ申間敷事、

一 奸婦・大酒等堅禁止之事、

一 其身ニ応セヌウソイツワリ (マ)

一 惣テ諸士匹夫又貴賤之分限不亂事、

右之条々違背之者於有之ハ、以軍法相札、品ニ奇切腹可申付者也、

判定廣長門守事

判定廣親大膳大夫事

國司信濃殿

三八一 川上助八郎接戦

川上助八郎カ元治元年七月京師ニ長州人乱入ノトキ、

長人篠原某ト接戦シテ、終ニ討取ラレタリ、其刀鏹ノ如クナリシヲ其後久光公見玉ヒテ、川上ヲ召サレ賜リシ歌ナリトテ、川上氏秘蔵セラレタリ、

太刀の刃のかけたる見ればそのかみの

高きいさをのいちしるき哉

又川上所蔵久光公之書

大人於否之時守其正節不雜乱、小人群類玩古翁書トアリ、

三八二 長賊山崎天王山敗走之時捨置タル書

皇室失権殆一千年矣、元弘嘗一収之、而復失之今距元弘五百余年矣、

聖主出焉而有夷狄之禍、天荐降災警之、

上大懼下詔攘之、霸府畏夷不奉詔反議廢立、於是天下

始背霸府、壬戌之春関西義徒相招聚入京、先欲糺霸

府之罪而後攘夷、先是有諸侯勸霸府奉詔攘夷者、特ニ

我長之相公大膳大夫、在江戸復陳其宜奉詔、復不聽、相

公以為義宜絶之、乃使世子入衛京師、壬戌四月長崎守備國ノ途次入京ヲ云フ乎此

時國父公御上洛御滞京ノ勅ヲ奉セラレタル、霸府且因循無絶夷之

十余日ノ後ナリ、詳ニ壬戌年第三卷ニ記ス。

意

上遣三條公督促之、相公遂躬入衛壬戌十二月間、諸侯傲之
相繼入衛、癸亥之春霸府入朝親受

教旨、而猶因循不決

上怒之直命攘斥之期癸亥五月十日、公奮而奉之伐夷船之過

其封內馬關者五焉皆克之皆克ノ字源、言モ亦甚シ、

上遣使賞之、霸府則遣使難之、相公不受長人殺之、相
公遣其族吉川氏其大夫益田氏入衛、且奏曰、霸府與
諸侯苟且優遊不足恃也、親征以褫其胆且悚動乎天下
也、

上聽之、幸于大和拜 太祖陵及春日祠、大議軍事、尋
幸于伊勢拜 天祖廟期既刻時、命 中川王鎮撫九國
王、弁之愈強愈辭、更命帥王王受之、中川王夜遽入
大內、引會侯及薩人、劫

上停三條公以下十余人朝參、使會・薩之兵衛宮、銃砲狼
狼藉何ヲ以下スヤ、反顧セサルヲ甚シト云フヘシ藉士卒充斥狂怠甚矣、妾カ迺宜言長人
謀叛、長人大愕聚于 関、白鷹司公第、三條公率親兵七
百而奔走投于此、諸卿亦來奔、諸藩兵亦來聚兵凡三千
矣、議入而掃賊、子矢而宮門皆為賊拋所不可如何之也、
乃入大佛寺伏見方議、且退長國而再舉決焉、西下夷三
條公・三條西公・東久世公・四條公・錦小路公・澤公・

壬生公七人也、諸公館于三田尻、相公与世子更來弔
乃議再舉、嗚呼

神州禍難亦多、嘗有女真胡元之難皆拒之不納、寇則鏖
之、今洋夷之來始請和親交易許之、又請者不許、則
親兵以強之而其吞噬之機見矣、然天下泛然攘斥与和
親二說相雜、而 中川王悖逆又發、乃邪正相混是非
相淆禍實極矣、然而三條公与相公之執義、天下举婦
心而天下之正氣聚于此、相公之舉其成可知也、蓋相
公之舉非長國之舉也、

上之舉也上ノ舉云々、而

皇室恢復成与否之所判也、故其戰可必勝也不可負也、

此籌策之所宜以熟也、画三策

大会廟堂酌酒相盟世子帥軍、三條公以下皆俱其軍号
為五万五万ハ概言、一万ニモ充タサルナリ、相公居守此大事也、宜相公躬帥之也、而世子任者侯賜以爲此舉世子優

為之而出兵之不窮爲備之周密而慎之之術也支藩某侯云々、大夫某氏守東南北海

面、乃使猛將卒勇士、海上直進破華城華城ハ浪華城ヲ云フ、拋之以

断敵之糧道、別以二三隊南擣岸和田、進入河內撫其民
而往來為華城策心、又以二三隊陰入京火二條城及霸
吏之屯所、或叫于山或嘯于市出沒、隱見不可測擣乱踰
藉不可治、漸進火膳城膳所ヲ云フ、彦根城、而扼湖東以硬東

山北陸之道、又約 帥王帥王ハ有種川宮ヲ云乎 使之掘越羽之地擣會之虛霸府不得西也、乃世子長驅入京、依嵯峨之勝凝然不動、奏曰、中川王篡位其跡云々、請糺其罪先是窃授鷹公鷹公ハ鷹司殿ヲ云乎 秘策、使之与萬里・烏公諸公内応、則制賊之死命在我之掌握、為之上策、

大会廟堂酌酒相盟乃分軍為上中下、上軍千五百人、某侯為帥先發、五日進軍向日、中軍五千人世子世子ハ長門守ヲ 為帥陣嵯峨及嵐山下數所、下軍千百人拮据將為帥後發、五日退陣山崎、三條公以下皆在中軍、特久世公卒浪士年少而勇悍者在下軍陣定、依 関白鷹司公乞罪、其訟八月十八日前後邪正如何、因以請糺薩會之劫

上以誣賢之罪、又數遣使諸侯之陣、囑佑我軍而我之遣使則一人撰數陣彼各發一使、集我陣恒數十、而道路相接、會及霸吏見以為長与諸侯合從、則會勇而無謀必怒而起矣、我以上軍伐之如不得已者、而下軍分為三隊皆向華城、一隊直取城、一隊出其南蹂躪乎于諸侯番兵一隊出其東北、号呼村落間皆以火助勢、神速如殞于天不知所備之、復合為二隊、一隊守城一隊出沒于河・攝間、与城兵相策心、以絶糧食入京、又守

軍遣二將、各率兵千余、一將進陣三井寺伐賊之東掃者且阻東兵之入京、一將略丹之諸城丹ノ諸城云々丹波・丹後ヲ云フ 進屠若州且引俱兵共、上叡岳及愛宕山瞰賊于卑使之不得動也、闕其一方使之得生路而逃亦可也、為之中策、

部署既定勒而不出乃使支藩某侯入京、依関白鷹公正方 寬、且請八月十八日前後邪所在、其辭懇到深切、世間之如無不墜淚者、又發數使遣諸侯之陣囑為我雪冤、其辞公平質直人聞之如無不感義者、則関白必拮据矣、諸侯必周旋矣、縱不皆然二三侯二三侯トハ加・備ヲ云乎 之佑、我今日且有之、況我切求之乎、乃大舉徐々而進陣形勝、數所勒兵如待敵、乃備礼入朝、奏請糺會侯狂妄之罪、

此日從輕兵少許成、我陣如備不虞者皆内以待命還焉、遽引兵入大内而掘之如十八日、賊之所為以徵賊、來者縛之、不來者伐之、先是選浪士強悍而有謀者數人、各卒數十百人貸之戎器・金穀四散、遽襲霸地霸地云々江戶ヲ云乎 遽之以劫奪沿辺、又陰入京火宮焚糧蕩滌蹂躪又放反間、射書遣簡賊眩乎、所從惑乎、辨之 取合此可亦以為事、為之下策、

或人曰、上策奇則奇矣然世子長為謀叛今行此策則似踐其美如何、曰、果行此策則万々我事成矣、成而其

跡之不美何害于事、兵詭道此其當也、何傲宋襄而壞天下之大事乎、

或又曰、万有一不成如何、曰、速退而守也、今我之所為世之所不測、所謂動於九天之上者既統其胆烏得有、以兵加我者乎、此以攻為守也、而其跡之不美、我心光明正大天地鬼神知之非所恥也、

或曰、既停入朝強而入則以 勅停之必矣如何、曰、今日之 勅云者中川賊中川宮之所為也、偽也、非真也、若以之為真則我無可為者、假令有來奪我封則納之耶、不納之則為違 勅耶、特至其時為偽者非也、

或曰、八月十八日賊軍士卒既內銃砲既擬、而猶未發而我今以戰臨之似暴如何、曰、彼非憤也怯也、今日之事在干戰之勝負、能了此意者得志耳、

或曰、出軍千里日費千金、今千里外用數万之兵顧困用不給如何、曰、因糧于敵兵家之秘訣、浪華天下之泉府泉府ハ金銀、取之則百年可供、此華城之所以可必取也、

或曰、囑諸侯雪我冤似乞哀者如何、曰、有慶則告之賀之、有憂則告之弔之諸侯之常、今我之所患非一國一家之事而告之請之禮也、正辭而請之、義則不屈、何

謂乞哀也、

或曰、今我之有患無諸侯之間之者、雖囑之雪冤誰庇之乎、曰、諸侯不足恃其庇之与不庇之未可知也、此策之所以為下也、相公獨奮以防長、投

皇室偉矣、今求与国、此自背素志也、而來則彼為主我為客、客為主所使常也醜矣不如無囑也、然我如為彼所使而我反使、彼亦有術焉、今日之事術亦不可廢也、

或曰、浪士之來衆矣試与之語皆無才能、亦為刺客奸人未可知也、遂之可也、曰、其來者多、是曾游京師、而遭十八日之變、而逃者又有国者、此以正議之所在欣慕而來者耳、雖無他才能、雖父母棄妻子而欲報

皇室之意則切矣、此可取也、今視防長於天下為十分之一、而不依十而依一非正与不正者乎、此可憐也、周末五公子皆有食客三千、況我大国而執義者而可逐之乎哉、其志之可取亦非彼鷄鳴狗盜之比也、其為刺客奸人則所宜慮、然一面則其人可知防之自有術、

或曰、今我大举軍需甚多、貸客戎器、金穀可謂愚也、曰、我不可戰而使客戰術也、而彼客則自喜而戰者貸戎器、金穀雖少而為多若更雇人而使之戰則戎器金穀

而已而可哉、

或曰、大挙斯如何、曰、兵貴神速議決則勿猶予也、
或又曰、機會如何、曰、十八日以後皆機會矣、兵法
曰、形之敵必從之予之敵必取之、拓之則機會云者亦
主將為之、

或曰、今京師之兵殆十萬、我以數千臨之、勝敗如何、
曰、彼雖衆多烏合也、又有戰心者万之一、我一軍皆
熊羆且孤軍無死地者、所謂一人當千何傷寡哉、

或曰、中川賊可惡刺之一二力士之事耳如何、曰、予
始聞足下説、則為快而熟思之非、癸亥十月十九日作

平（平）計也、何則彼賊雖去之霸、則依然霸之不去恢復

不可、此間文字今賊与覇合斃之、則所以斃覇也、且彼因循

優柔、則我亦不可遽以果激、加之今幸而賊勢猛烈、用
兵有名不加置之而為資也、昔東照公救三成假之數年
之命故、有関原之事得以取天下也、今日亦可思之也、

七月

此書ハ天龍寺ニ棄アリシ書類ノ中ニアリシヲ、本藩ノ兵分取シタ
ル者ナリ、

三八三 四藩連署建言 (長州処分ニ就テ)

長門宰相父子ノ儀、去年八月以來被蒙

勅勸候条、其藩臣等歎願トハ乍申多人數兵器相携、近
畿諸所ニ屯集、奉要

天朝候姿ニ無紛候処、寛大ノ御仁恕ヲ以再応理非分明
ノ被為在 御沙汰候得共、今以抗言不引弘段甚如何ニ
奉存候テハ、譬申立候筋条理有之候トモ、決テ此俣御

許容被為在候義ニ有御座ト奉存候得共、自然右等ノ御
廟議ニモ被為在候テハ、堂々タル 天朝ノ御威光乍恐

相靡レ、実ニ以御大事ノ御場合ト奉存候、方今夷難相
迫リ不容易御時際、一旦 朝權地ニ落候テハ、後日何

ヲ以

皇威振興可仕哉、甚不可然義ニ付、速ニ断然ノ御所置
被為在候様伏テ奉懇願候、不肖ナカラ我々共

禁裏御警衛向相勸候義モ、全 朝威不廢替様尽力仕候
儀武門ノ当然、何分難默止奉存候故、三藩在京ノ重役
共一同申談、奉歎願候事、

松平修理大夫内

吉井幸輔

松平土佐守内

市郎平

有馬中務大輔

大塚敬介

同上

田中紋次郎

三八四 大山格之助書翰

一筆奉啓上候、尊公様弥御勇健被成御座奉恭賀候、
扱モ此節ハ御大事ノ御機會ニ相成、去ル十七日彼 宮
様方并ニ関白一橋公御參

内、有栖川宮外ニ五十四人之大中小公卿方大議論ニテ、
十八日夜明ケ乍漸一橋公彼ヲ打挫、弥々御追討之嚴命
相下候様御決議ニテ、十八日大監察永井主水伏見(尚志)へ被
差越、彼福原越後へ今日中ニ引取無之候ハ、否之返
事ニ不及、

朝廷ヨリ御所置可被遊ト云切り立歸リ相成候所、彼賊
等立籠リ之諸所軍張等被 仰出、然所色々トシテ遲對
談ニ相及、十八日暮ヨリ諸方へ手分、追手御差出之筈
候所、当日暮過ヨリ福原越後先手伏見表繰出シ、伏見
街道ヲ堂々ト押通り、警衛場へ大砲打掛、尤伏見表屋
敷ハ美濃・大垣・戸田侯速ニ打破リ乗落シ相成、福原

ニモ深手ヲ負ヒ乍漸逃去リ候ヨリ、扱長州へハ何之間
ニ押寄候カ、鷹司殿へ玉葉・兵糧等十分ニ相貯へ置、
又ハ日野殿へ同断兼テ致置、何分才略可哀者ニ御座候、
然所此御方ニモ御名代始半方ハ天龍寺并ニ釈迦堂へ罷
在候間、打手ニテ十九日未明繰出シ相成掛候所、不測
中立賣御門前ニ夜中ニ大砲等相備、未夜ホノノト明
ケヨリ長ヨリ逆打イタシ、初手越前勢ト暫ク大砲セリ
合、夫ヨリ會津警衛場蛤御門之大合戦ニテ、度々此御
方へ援兵ヲ乞候得共、此御方ニハ大一人ノ人数ハ嵐山ニ
相向ヒ、僅川上右膳組隈之城一組、水引・蒲生乾御門
ヨリ 陽明殿警衛ニテ、夫モ不調既ニ乾御門方へ相
向勢ニテ、中立賣御門前ヨリ如霰一條家・近衛家辺へ
玉飛来、然所ニ嵐山之打手砲声ヲ聞引返シ、乾御門ヨ
リ押来リ候ニ付、平田平六阿久根一組裏手ヨリ廻リ、
中立賣之横打被致候処、暫ク打合ニテ惣方手負戦死ニ、
樋脇・高岡モ相応シ十分ニ打込候所、瓦落シト打破、
家老國司信濃甲冑其外武器打捨、乍漸虎口之難ヲ遁レ、
何方へ逃去リ候半、又此人數ハ不殘、日野殿ハ兼テ余
程取込居候半、彼屋敷へ引取、此方ニ引合相成ニハ
朝廷へ奉向致発砲候儀、今更大逆無道、延頭御所へ向

ヒ皆合掌致居候間、兎角此上ハ貴藩ノ御生捕ニモ相成度ト申出候内、外ニハ大砲セリ合ニハ、就中會津固メ場ヘ打掛大接戦ナリ、右セリ合中此方人数公家門ヘ警衛致居候隈之城一組ヘ、日野家中門ヨリ大砲卒然ト押出シ打込ミ候ニ付、即時ニ物主野村勘兵衛打倒サレ戦死、外ニ即死・手負等有之、夫ヨリ 御所前通并陽明殿通ヘ數万之官兵異形異類之備立ニテ、 御所警衛致居候処、隈之城人数ト於公家御門前接戦、皆銃砲打合ニテ如雲霞官兵一時ニ崩掛リ、一人モ不殘引払候ニ付、既ニ日野家内ヨリ 御所ヘカ、ラントスル時、乾御門ヘ警衛罷在候御城下一組川上右膳組大砲四挺押出シ、御台所御門前ヨリ皆大声ヲ揚ケテ押懸リ、二封度ヲ以テ一時ニ打破リ、則時ニモリ返シ、小銃モ打掛候処速ニ引取り、夫ヨリ諸軍勢モ目ヲ覺シ申候、誠ニ薩兵ノ鋒先、此一戦ノ勢ヲ以テ天下ノ眼目モ開ケタルトイフベシ、亦當時流行之節制号令ナトノ、一橋始立派ニ備ヲ立候得共、何分ニクル事ノミ心掛居、中々筒先ニ向候事モ不致、只砲声ヲ畏ル、計ニ御座候、夫ヨリ暫時砲声相止候付、同 御門内ヘ 御名代始打合相成、降參ノ形行ヲ以テ夫々討チ討ヌノ場モ有之候テ、帯刀殿

一橋公ヘ伺相成、残兵打潰シ候様ニ相決シ、夫ヨリ軍配相定リ、鷹司内ヘ二三百人楯籠居候ヲ越前勢彦根ト取會、鷹司ヘ打掛、又中原猶介一隊兵庫修行人数其外寄人数、ポードヲ押掛、三藩ヨリ一時ニ打破リ、會藩・越藩此方人数打入、其内思々切テ出ルヲ伐取、直ニ火ヲ掛候処一時ニ災上、尤彼所ヘ兼テ慄シ合玉葉・兵糧等十分ニ貯ヘ有之、可畏者ニ御座候、尤玉葉ヲ焼立、榴彈之鳴動スル事夜ニ入テ不消、又中立賣辺町家ヘ每ニ潜伏イタシ、十三四人生捕又ハ打捨、皆戦兵ニテ終ニ八ツ時分ヨリ焼上リ、真上リニ焼捨、又中立賣御門前ヘ未潜居候ニ付、此所ヨリ火ヲ掛追々遁出、或ハ中ニ飛入モアリ、総勢ハ遁去候狀追討等有之、実ニ昔之保元ノ戦等思ヒ入ル計リ御座候、一昨日ハツ時分ヨリ燃上リ、昨夕方鎮火、錦御屋敷等之焼失、又昨日ハ嵐山天龍寺討手被仰付、未明行軍繰出シニテ、小松家大將ニテ出掛相成候処、最早引取候不相殘候ニ付、天龍寺・法輪寺ヲ焼払ヒ、御都合能皆々様御帰陣相成候、殊之外手負・戦死等相少ク、他ハ會津・桑名・越前等ハ戦死等十分ニ有之候半、未分明候、其外山崎辺ノ次第等不相分、左候テ日入時分迄分捕手負改等相濟、人

數ヲ引揚、陽明殿御門前ニテ首十三四級相備、勝吐氣ヲ揚各陣屋へ引取、明日ハ天龍寺寄手之手筭共ニ取掛候事、

一昨廿日公卿・堂上方不殘家内改トシテ、外ヨリ會津・桑名取會、此方御城下人数二十人被差出、為差引差越、宮中内淀辺へ甲冑ニテ皆々内外相改、何分伏見宮之処未此期ニ相成候テモ、十分平伏トモ不被伺候、備前モ大ニ恐怖イタシ、會藩へ引合、是迄之心底相改、何モ可随御凶段申出、一條殿へ差出候人数・姓名等不殘書付差出申候、未諸次第申上度山々御座候得共、今晚長藩又々五百人余押寄候ニ付、三組人数中立賣御門へ被差出、又大坂へ二組被差出、十八日ヨリ今晚迄ヤリ通シ候処、前後次第不同荒増奉申上候、今未明蒸氣船被差出候ニ付、乍退屈早々形行奉申上候間、外ニモ段々ト申越候半ト察候付、彼是御比較御覽被遊可被下候、誠恐謹言、

七月廿一日

大山格之助

未明認

綱良判

追テ、天下勢之是迄兵器相備、數十万之人数有之候ハ思モ不寄事ニ御座候、実於御所前之接戦前代未

聞ノ事、冥加至極ニ御座候、

三八五 御軍役奉行伊地知正治書状写

六月廿三日、長賊福原越後江戸へ差越候由偽称シ、多人数ニテ滯伏、長賊父子之儀ニ付歎願書差出、因州・對州ハ勿論、稻葉迄是ヲ周旋之様ニ承候、追々天龍寺方ニハ長并浮浪之輩賊徒數百人相集、夫等ヲ取鎮メ方ト偽称シ、伏見ヨリ二三百人位堂々ト山崎ニ掛リ、鳥羽街道ヨリ行軍ニテ天龍寺へ入込、初ヨリ山崎ニハ久坂元瑞頭取ニテ、寶寺・離宮・八幡之陣所ニテ數多之出張候模様ニテ、於茲

朝議・幕議動揺無之ニ非ス、或ハ御諭之可然、或ハ申立候事件御取用可然ナト論生シ候由、然処國司信濃・増田彈正追々上京、國司ハ天龍寺釈迦堂ヨリ山崎迄之間ニ陣所広メ、或ハ如意ガ獄其外之峯々ニ遠簿ヲ焚キ右ハ跡ニテ天竜寺ニテ分捕ノ上、彼等方手配候へ京中ヲ驚シ候テ、町中十、五日ヨリ六日迄惣テ長州へ御加勢可仕ト、起証文書ヲ遣可申許計ニ御座候、
ヲ兩日中長門守上京之風説盛シニ御座候、

右ハ跡ニテ天龍寺書翰ニ、長門守上京折角相待候事ニ候、兩日中ニ上京相成候トノ例ノ虚喝ニ御座候、然ハ市中上下ノ紛乱御推察可被下、然処一橋計ハ流石

所存モ有之様子ニ御座候処、七月初日ヨリ

天朝ニテノ寛仁大度ノ御所置ヲ以テ、主人父子ノ儀ニ付、臣子ノ情不被忍令歎願旨、左モ可有之事候へハ、相当至極之御裁決ニテ可有之候へ共、何分不容易出立ヲ以テ多人數上京、(幕)簾轂之下令騒動候テハ不相濟候ニ付、人數早々引取、福原一人罷残り御裁断可相待旨、再三御諭シ相成候へ共、事ヲ左右ニ譲リテ

勅命ヲ不奉、剩言語道断之再願書差出、益形勢ヲ張り、都下ヲ怖レサシムル様子ナリ、然処御国ヨリ之猛勢七月十五日浪花ノ着岸、遠近震動、数万之大軍上洛ノ世評、我ヲ愛スルモノハ魚ノ大海ニ出タルガ如ク、我ヲ惡ムモノハ虎ニ追ル、犬ニ似タリ、長人ノ振舞弥天朝ヲ蔑如スルヲ以、万一此俟ニ申出候事件御取用共相成候テハ、堂々タル

天朝、長人如キニ城下之盟被遊候モ同前之御恥、禁裏御警衛モ其任職如何ニ付、聊申上候趣有之、天朝ヨリ日ヲ割引取候様被仰渡候処、曾テ不奉勅命候ニ付、十九日ニハ未明ヨリ、在京之列候四方ニ手分ニテ、一時ニ賊徒御征伐、此御方ハ天龍寺一ノ先ニテ御出馬之賦ニ候処、早クモ是等ノ事ヲ賊徒ニ通ス

ル奸臣有テ、賊ノ叛計相決シ、十八日夜中ヨリ天龍寺・

山崎・伏見ヲ打立チ、無二無三ニ宮闕ニ犯入シ、會津侯ヲ打取、鷹司太閤・有栖川宮其外暴論輩之參

内ヲ願ヒ、長門・因州・備前・加賀之兵ニテ宮門ヲ堅メ、會津ノ兵ヲ攻メ打、志ヲ得候ハ、薩州ヲ攻打、

右何レモ天龍寺ヨリ分捕帳へ有之候説拾集ルナリ、奸計ニテ、國司信濃ハ上下六七百人ニテ下立賣・蛤・

中立賣三門へ寄セ、(幕)増田右衛門佐ハ、山崎ヨリ數百人ニテ、鷹司家へ早クヨリ入込居、福原越後ハ伏見ヨリ打チ立候欵、

鷹司焼打之節、數百之火藥箱前以ヨリ荷物等ヲ入付有之筋相見得候、

御屋敷ヨリハ十九日未明ヨリ、一方ハ(島津久徳)圖書公、惣大将町田民部殿ヲ始御城下諸卿

禁裏御警衛ニ繰出シ、一方ハ備後公、帶刀殿惣大将ニテ、其外御城下諸卿天龍寺へ可攻寄ト、既ニ

御所堅メヨリ繰出シ、天龍寺打手之先手大砲隊(阿久)繰出シ候節、長賊會人ヲ余多切捨、或ハ蛤御門辺へ(金津)寄候儀相知、評議ニ不及、近ク犯闕ノ賊ヲ一同ニ可打

挫ト押出セハ、國司カ國勢ハ日野裏門ヨリ門内ニ乱入、

中立賣ノ筑前勢臆病ドモ二心ヲ抱キ不用意、一橋手ヲ始ラルサキ迄ニ、蝟集セシ諸家ノ警衛人数惣崩レニテ逃去候ヲ、乾御門一堅ニ付候ニ封度三挺・小船・忽砲一挺御城下人数ニテ押出シ、慥ニ敵ヲ見付候ト、無透間来ル砲声ノ中ヨリ互ニ銃砲乱発、エイ声ニテ進ミ行、遂ニ賊徒ヲ追退ケ申候、

後ニ承付候、人舌ヲ卷キ薩州勢ノ強キヲ称セシハ、

此時ノ事ニ御座候、

(川内市)

然ハ初公家御門ニ備候隈之城人数、卒然ト敵ヘ出會、齒カミヲナシ下知ヲ加ヘ、野村勘兵衛并ニ戦兵野村藤七戦死、其余重手ノ者モ有之候得共、溝中・門脇ニ潜リ居発砲候故、公家御門ニ賊ノ不入ハ此手ノ働ナリ、賊等ハ日野家ノ内ニ逃入、哀ヲ乞、助命ヲ願出ル、

生捕之者ヨリ承候ヘハ、其日國司信濃ハ白キ衣ニ黒

色之立場ニテ、日野裏門ヨリ入候人数ニテ、

烏丸通りニテハ第一高岡人数、次ニ阿久根大砲隊押出

(宮崎県諸県郡)

候場ヘ、高岡ノ談合役本田次郎太郎長賊ト詞ヲ掛合候ヨシ、

此賊ハ國司信濃旗本ノ大勢ナリ、

阿久根勢ハ近々ト大砲ヲ并ヘ付、先備之高岡人数ニ開

ケノト声ヲカケ候故、施薬院ノ内ニ人数押開キ候ヘハ、能発節ヘ當リ候、然共賊徒茲ヲ第一トスル攻口ニ御座候得ハ、彼方ヨリモ死傷ヲ不厭大砲・小銃垣ノ内ヨリ横矢ニテ打立、手負死人モ御座候得共、高岡人数施薬院之内ヨリ横矢ニテ打立、正面之平田平六大砲ヲ込替々々打セ、後ニハ樋脇人数モ四挺ノ二封度ニテ加勢イタシ候、斯ル処室町辺ヨリ彼力後陣扣ヘシ中立賣通人数ニ、出水一組ニ中原猶介差引セシ兵庫遊撃人数モ大砲打立、綾・穆佐人数ハ新町ヲ押立、遂ニ賊徒不殘追散シ、大砲・銃砲・玉葉・國司カ具足・銃砲・毛利家紋付之旗四本分取、打取首三十七級、生捕十三人、味方ニハ当座ノ戦死四人、後ニ相果候者二人而已ニテ、先以美事御勝利御座候、

後ニ日野家ヨリ三十人計ニテ逃去候者有之節、物主

共不居合候得共、出水・綾・穆佐人数ニテ十人計取

(宮崎県諸県郡)

留、首切実檢ニ備候得共姓名記シ無之、然ルニ會津人中立賣通ノ骸衣類剩ヘ見候処、地半ハ國司信濃ト記シ有之由、内田仲之助モ會人相咄シ候ヨシ、

増田右衛門佐・久坂元瑞扣タル鷹司家ニテ、彦根・越前其外諸家之人数押寄、此方勝軍ノ後モ無絶聞砲声聞

へ候故、三四与被差向候へハ、都合克鉄砲之敵人打留候ハ水引人数ニテ、其余ハ敵ニ不出会候、越前之手美事之血戦ニテ勝利ノ由、後ニハ放火ニテ焼立申候、

長賊一隊寺町御門ヨリ逃出候ヲ、細川ノ堅メ手サシ不相成由御座候、

伏見賊徒ハ福原越後大将ニテ、十八日夜本街道ヲ上リ候処、大垣之人数モ六十人ノ手負・死人アリ、越後モ疵ヲ蒙リ、十九日朝再ヒ竹田街道ニ出候処、會津・彦根ノ手ニテ打退ケ候故、山崎ニ掛リ残徒落行候由御座候、

候、

〔鳥津久治〕

〔鳥津忠盛〕

一官之城公ハ陽明殿、重富公ハ日野御門警衛ニ候処、其日七ツ時陽明殿御門前ニ御旗合ニテ首実檢、勝吐氣ニテ御屋敷へ御帰陣、両公子御初陣之処目出度御勝利、難有事ニ御座候、

諸所召捕等有之場所々々ヨリ放火イタシ、其夜火不静、十二七八焼失仕候、

明ル七月二十日早天ヨリ、帯刀殿惣大将ニテ今熊野へ伴右衛門案内トシテ、双岡ヨリ廣澤之池ヲ通り、天龍寺へ押寄候所、早クモ賊ハ落去リ、只足輕一人ヲ生捕計ナレ共、甲冑・鉄砲・火薬之得物数不知、剩諸所ヨ

リ得来ルノ書翰夥數分捕仕候、

打敵は一さゝへたにあらし山

紅葉ちらしてけふハ帰りつ

季晴

御笑可被下候、

終日天龍寺辺探索間無之、征長之

勅相発シ兵庫出張有之候、首級ハ御実檢之上、或ハ引

導首塚御立、生捕ハ御丁寧ニ御囲置、

一戰場之衆モ 御賞賜如法相濟、

朝廷ノ御褒

勅一橋之感状旁之御威勢、鳥渡步行サへ御困勢ハ烈火

ノ如ク、難有次第御座候、

一昨廿一日ニハ御勝利御祝トシテ、御屋敷稻荷社へ御神

楽、守衛方ハ勿論、一同ニ御酒頂戴被仰付、御目出度

次第ニ御座候、

是ヨリハ又征長ノ役ニ及ヒ、追々面白キ咄シ可申上候

へ共、先ツ任幸便右次第得貴意度如斯御座候、尚期後

便候、

七月廿三日

伊地知正治

三八六 七月廿三日ヲ以テ長藩征討ノ発令

松平修理大夫

松平大膳大夫儀、兼テ禁入京之処陪臣福原越後ヲ以テ、
名ハ歎願ニ託シ其実強訴、國司信濃・益田右衛門介等
追々指出候処、以寛大仁恕雖扱之、更ニ無悔悟之意、
言ヲ左右に寄セ、不容易意趣ヲ含、既ニ自ラ兵端ヲ開
キ、对

禁闕発砲候条其罪不軽、加之父子黒印之軍令条授國司
信濃由、全軍謀顯然候、旁防・長ニ押寄、速ニ追討可
有之事、
(島津久光公美紀にて校訂)

七月廿三日

右之通從

御所被 仰出候ニ付、御追討可有之候間、速ニ軍勢固
許へ相揃置、差図相待可被申候、尤從彼妄動致候ハ、
不待差図口々ヨリ撃入り、誅滅可被致候、

但寄手・攻口并攻掛り日限ハ、御決議次第可相達候

事、

右七月廿四日閣老稻葉美濃様ヨリ留守居呼出御直達、
(正邦)
大目附永井主水正出席、

○右ニ付兵庫御固并大坂其外各藩御固へ左之通り、前
文同シ、只今ヨリ人数差出、軍備嚴重相立、大膳以
下罷登候者有之候ハ、速ニ誅伐可被致候事、

七月廿三日

右達シニ依リ、翌廿四日町田民部成久ヲ総宰トシテ、城
下士兵一隊及ヒ出水・阿久根・隈之城・蒲生四ヶ郷ノ
勢、及ヒ大砲一隊其人員上下二百余名ヲ兵庫ニ派遣シ、
長門守カ上京ニ備ヘシム、各隊長其他人員左ノ如シ、
○同シク征討奉命ノ各藩左ノ如シ、

三八七 舊邦秘録

三八七ノ一

七月廿二日

天龍寺長賊陣宮ニ於テ分捕米施与ノ掲示

真米五百俵

右長賊天龍寺江貯置候処、致分捕候ニ付、此節兵火
ニテ致類焼候洛中難洪之者共江乍聊遣候間、明早朝
錦屋敷我藩江罷越、掛役々江引合可請取者也、

七月廿二日

薩州

右板札ニ記シ、三條・四條・五條等ノ橋詰其他数ヶ所
ニ掲示シタリ、依テ洛中・洛外ノ男女老若当日朝ヨリ

元治元年 (1864)

錦街藩邸ニ来集シ、各拜戴セリ、其形況実ニ盛ニシテ、
各雀躍恩旨ヲ謝シタリ、

三八七ノ二

元治元年七月十九日長賊ト戦争ノ節、薩兵戦死・

手負人名

一薄手 川上助八郎
 一全 永山彌一郎
 一全 中野松之助
 一全 高岡談合役（高岡昇預）
 一全 本田次郎五郎
 一全 高岡昇預
 一全 海老原爲右衛門
 一全 藤元彌太郎（源五郎九右同所）
 一全 志岐小左衛門下人
 一全 喜六（兼備持九）
 一全 高岡小蔵下人
 一深手 庄太
 一戰死 松下矢七郎（阿久根）
 一深手 河南武右衛門
 一全 平岡源四郎
 一全 福永傳太郎
 一全 遠矢平左衛門

一全 福永助左衛門
 一薄手 小木原庄兵衛
 一全 松山藤助
 一全 福永喜右衛門
 一全 久木田傳五郎
 一全 梁瀬次郎助
 一全 神川源兵衛
 一全 大迫太郎左衛門
 一全 楠田助左衛門
 一全 湯田十蔵
 一全 濱田藤太郎
 一深手後日死去
 一戰死 野村勤兵衛
 一全 野村藤七郎（隈之城）
 一全 道岡恕兵衛
 一全 長野圓右衛門
 一全 橋口伊右衛門
 一全 濱田曾右衛門
 一全 井上直之進
 右野村勤兵衛組隊

一戰死 宮内彦二

一薄手 税所長藏

一企 土師吉兵衛

一深手後日死去 赤井兵之助

右之通御座候也、

三八八 薩州京師屋敷留守居ヨリ江戸留守居江之

書状写

長州歎願之件段々御延引相成、彼是寛大之御諭ニモ相成候得共、種々様々策略ヲ致シ、兵ヲ不引ノミナラズ、去ル十八日夜中ヨリ無勿休モ奉迫

禁闕ニ、妄大小砲ヲ以テ打破、

主上ヲ己カ者ト成ントノ企ニテ、十九日曉所々ヨリ相応之人数九門内江忍入、夜明中立賣御門ヲ責破、

黒田様御固之公家御門前、會津之御固敗走既ニ急危所ヲ、此御方ヨリ之人数ニテ大小砲嚴重相発、内外

ヨリ責掛候処、終ニ敗走ニ相成、乍ラ漸公家御門・

中立賣御門中江返シ、敵味方死傷・手負等段有之、
(一々脱力)

此御方ニハ水引物主野村勘兵衛殿公家御門前ニテ即死、土師吉兵衛ハ御台所御門前ニテ右之類ニ砲丸ヲ

受、中立賣ニテハ阿久根人手負六人・即死二人、川上助八郎大方打手ヲ負、敵ヲ討取被申候、是ハ助太刀ヲ川路正之進致シ申候、税所長藏向騰スネ當ヲ横ニ砲丸打抜、身ニハ無別条、京都居付手形所書役赤井兵之助真向鉄砲疵ニテ、三日目死ス、是モ中立賣、尤中立賣別テ難戰ニ御座候、吉井幸助・中原猶助・上原孫次郎ナト大砲ニテ長州ノ跡備ニ打込、夫ヨリ大敗軍ニ及申候高名也、私ニハ公家御門外ニテ差引仕折、半首之揚卷ヲ砲丸ニテ打切、高連之次第ニ御座候、宮内彦次殿物見ニ十九日曉ニ被出候処、長州ヨリ打連申候、馬計罷帰、是モ砲丸當リ随分療治出来申候由ニ御座候、敵之首二十一、生捕拾三人、其内火中ニ飛入候モノ彼是此御方江御打取四十余人ニモ相及可申哉、其外諸家之働ハ追テ可申上候、不屈至極之所業難述言語御座候、十九日四ツ時分ニハ惣テ敗軍ニテ落失申候、暫時之混雜之事御推察可被下候、廿日ニハ嵯峨天龍寺江押寄焼打、敵一人モナシ、同心如キモノ一人罷居候ニ付、生捕罷帰申候、貯之火薬江火入、百千万之雷一度ニ落タル様之音仕候、誠ニ過分之火薬、乍敵手當ニハ皆々感心ニ御座候得

共、至テ弱敵策略ニ比ベ候ヘハ、十之三ナラデハ勇
ハ無之候、九門内之御堅御敵重、諸家之軍粧花麗、
敵モ居ラヌニ此炎天難儀之形勢ニ御座候、此御方軍
粧之汚ナキ御推察可被下候、軍之強キ事ハ自讃乍ラ、
四方へ轟セ申候噂ニ御座候、実ニ一人モ夫々働カヌ
人ハ無御座、感心之人氣ニ御座候、夫故中立賣・公
家御門辺、敵ハ十分之勝ニ乗シタルヲ追崩シ相成候
半ト奉存候、別紙之通追討

宣旨相下リ、長州之滅亡近キニ可有之候、誠ニ笑止
千万ニ御座候、此節之企有栖川帥宮ヲ一番ニシテ、
鷹司関白殿ヲ押立、事成就之上ハ直ニ強テ

上ニ奉迫、四門ハ因州ヨリ堅、九門ハ加・因・備ヨ
リ堅、會津ヲ押出シ、戦書ヲ送り、尹宮ヲ閉門致シ
候企、夫々書面等惣テ手ニ入申候、國司信濃中立賣
之大家老ニ御座候、夫々長門父子之黒印居ヘ有之、
条中有之具足櫃之俣伊東四郎左衛門分捕、其中江右
之軍令条有之、直様差出ニ相成申候、天龍寺ハ十九
日晝ヨリ没落、山崎ニモ足ヲ不留惣落去申候、跡探
索ニ及候処、只今ハ長藩一人モ京中ニハ相見不申候、
鷹司公ヨリ火出、七條迄燃拔、東ハ鴨川限り、西ハ

堀川ヲ限り無残焼失、実ニ哀次第二御座候、ケ様之
大麥ハ桓武以来初テノ儀ト奉存候、歴代勝難之儀ハ
有之候得共、矢軍ヲ第一ト仕候世中ニテ、火工無ユ
ヘ、右様之大火ハ迎モ有之間敷、実ニ前代未聞、言
語道断之姦賊ニ御座候、申上度儀ハ山々御座候ヘト
モ、何分大取込、飛脚之面ヲ見掛相認申候間、何レ
書損間違之説モ可有之候、御座限リニテ御覽奉願候、
追々細事可申上候、以上、

七月廿六日

三八九 薩州分捕届書

覚

- 一 首但切捨燒亡等ニテ不相知者も御座候 貳拾九級
- 一 生捕 拾三人
- 一 鉄砲但拾丸より五丸迄 貳拾貳挺
- 一 刀大小 拾六本
- 一 陣太鼓 七挺
- 一 撞鐘 貳ツ
- 一 長刀 壹振
- 一 具足内一ツ箱入 四拾五領

一 膳当

拾八

一 紋付幕

六頭片間(張九)

一 大砲但要具相添

拾式挺

一 旗

六本

右拾行分捕候品御座候、

一 戦死

四人

一 深手内一人陪卒

九人

一 薄手内一人同断

式拾三人

右は今般長州人と手合之節、生捕・討留並味方戦死・

手負人数又は分捕候品、早々取調可差出旨被 仰渡趣

承知仕、則取調申候処、右之通御座候間、此段申上候、

以上、

松平修理大夫内

七月廿六日

横田鹿一郎

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

三九〇 子七月廿六日仙臺留主居ヨリ廻達写

以廻状致啓上候、然ハ御所司代様ヨリ御呼出ニ付、助

役罷出候処、別紙写三通ノ通可致御通達旨、公用人

成瀬左衛門ヲ以被相渡候間、致御通達候、早々御順

達被下、御留御方ヨリ別紙御返却可被下候、右得御意

度如此御座候、以上、

(伊達慶邦、仙臺留主)
松平陸奥守留守居

七月廿六日

佐々木兵之進

遠藤小三郎

御次第不同

(前田齊奏、加州藩主)
加賀中納言様

(森須賀春裕、阿州藩主)
松平阿波守様

(池田慶徳、因州藩主)
松平相摸守様

(高嶺、津藩主)
藤堂和泉守様

(黒田奇鴻、筑前藩主)
松平美濃守様

(慶倫、津山藩主)
松平三河守様

(茂昭、福井藩主)
松平越前守様

(慶徳、明石藩主)
松平兵部大輔様

(島津茂久、薩州藩主)
松平修理大夫様

(定安、松江藩主)
松平出羽守様

(慶頼、久留米藩主)
有馬中務大輔様

(慶順、熊本藩主)
細川越中守様

(利剛、盛岡藩主)
南部美濃守様

(翁徳、水沢藩主)
上杉弾正大弼様

(盛寛、柳河藩主)
立花飛騨守様

於其御許

三九一 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ送ル書牘

御留守居中様

- 松平安藝守様〔後野長訓、芸州藩主〕
- 松平右近將監様〔武殿、浜田藩主〕
- 佐竹右京大夫様〔義堯、秋田藩主〕
- 伊達遠江守様〔宗徳、二本松藩主〕
- 丹羽左京大夫様〔編島直大、佐賀藩主〕
- 松平肥前守様〔山内豊鶴、土州藩主〕
- 松平土佐守様〔承昭、弘前藩主〕
- 津輕越中守様〔信順、八戸藩主〕
- 南部遠江守様〔直克、川越藩主〕
- 松平大和守様〔重正、府中藩主〕
- 宗對馬守様〔池田茂政、備前藩主〕
- 松平備前守様〔前田利益、大聖寺藩主〕
- 松平飛騨守様〔茲監、津和野藩主〕
- 龜井隱岐守様〔直薄、新発田藩主〕
- 溝口主膳正様〔忠寛、佐土原藩主〕
- 嶋津淡路守様

上々様御揃御機嫌克被為 入候半と、恐悦御義奉存候、

於爰二

貞君様・両公子貞君様トハ近衛忠房公ノ嫡中、両公子トハ忠鑑・久治ノ両君ヲ云フ 御安康被遊御

座候、珍重御義御同慶奉存候、

一爰元十九日・廿日大變之次第は、畠山吉次郎差立御届

申上候通、其後諸所ニて殘党之者共少々取押ニ相成申

候、惣勢は兵庫地江相掛逃下候由相分申候、手負等余

程為有之哉ニ御座候、長門守ニも出張ニ相成候筈ニて

出立ニ相成候得共、十九日一左右聞得候と引返シニ相

成候由、此方人数も兵庫固メ被仰付、半分は廿四日ニ

繰出、未兵庫江相固メ居申候、廿七日晚ニ長江吟方〔殊〕い

たし候堂上方、出仕御差止ニ付、越前・會津・此御方

江手配ニて、出仕被差止候堂上之所相固メ候様被仰付、

即夜より人数分配未相固メ居申候、併是は全ク御恐懼

より之事ニて、出仕被止候堂上は余程恐レ入候由、もふ

ハ御曳取ニ相成候て可然と奉存申上置候事ニ御座候、

九門内外ハ矢張甲冑・拔身・切火繩等ニて固メ、廻方

等堅固ニ御座候、一橋公も毎日の御參

内、會津・淀・所司代は繰廻害人ツ、勤番ニ御座候、

一体之形勢ハ別段相替候事も無御座候、市中も追々靜

り、燒庭取片付方共いたし居申候、

一長防追討之命相下り、此御方も右之討手被仰出、御元江御手当相成居候様、御達ニ相成候付、早々其段申上越賦御座候処、既ニ出陣日限・攻口等相分候筈にて、今日明日と相待居、相分候ハ、蒸氣船を以早々御届申上候筈ニ相見合居候処、未副將之所御決定無之、夫故今日迄も相分不申候付、御手当ニも相拘事候付、極急キ差立申上越候、尤蒸氣より差下候得は、急速ニ相達可申候得共、当分、兵庫表出張被仰付候付ては、海陸之備無之ては不相濟候付、無拠陸地急キ差立申候、尤副將は越前老公香番江被仰付御内決にて、早々御出京有之候様、幕よりも御目付早打にて越表江被差越候、此方よりも是非御出之処申上候様と之事にて、拙者・大島兩人より中根江雪迄細書相認、海江田武次・大脇祐九郎兩人一昨廿七日当地出立、越藩江差越申候、會よりも使者相立候よし、酒井十之丞出京之由にて、昨日參候付承候処、第一此御方様ヲ御見當ニ被成候由、併幕より御使も有之候得は、早々御出京ニ相成は相違無之との咄ニ御座候、左候ハ、来月十日より内ニは御着ニ相成可申候間、其上ハ出陣日限等も相分可申候付、幕之

蒸氣船ニても借用いたし、早々御注進申上候、

一朝廷も暫クは大騒動何共難申上、誠ニ恐入候、もふハ静り候得共、一事令之下ルニ付ても例之御恐懼因循未去兼申候、国事掛等之処も昼夜之御詰ニ御座候得共、廿八日夜より御暇ニ相成、昼中御參内ニ御座候、両宮・内府公両宮トハ尹宮・山崎内府トハ近衛公十分御振はまりにて、先仕合之事ニ御座候、乍併此末之御所置中々六ヶ敷御座候間、如何と苦心此事ニ御座候、一分取高名等未彼是にて、能ク取調出来不申候間、跡より取調、功不功之事件旁可申上越候、何分人数諸方江分配線出旁にて行届不申候、一分取米四百九拾俵位御座候処、市中失焼ニ付施行として差出候処、余程一統難有、夫にて壱日之渡世もいたし候位之事ニ御座候、一宮之城久治ニも変事ニ付、御踏止ニ相成居候得共、何分御病後之事ニも有之、其上此末之所如何之形勢ニ可成立も難計御座候付、一往御帰国にて御保養被遊、先々十分之御奉公御勤有之度、大島杯談合之上強て相願候処、其通ニ御聞濟ニ相成申候付、近々今一左右相分候上ニ蒸氣船差下され候節、御乗船にて御下り之筋

ニ御決定相成申候、来月十日前後ニ可相成と奉存候、

一 山海宮^(備)兵火にて丸焼ニ御逢被遊候付、差当り御難洪^{正親町三条殿ヲ云フ}ニ

付、為御助勢金三百兩被進方取計申候、正三卿^{正親町三条殿ヲ云フ}も

も同断ニ付、金百兩被進取計候処、両所共御国元江宜

敷御礼申上候様、厚御挨拶ニ御座候、差掛之事にて、

右通取計申候、

山海宮は当分

准后御下り御殿江御仮殿ニ御座候、正三卿は一乘院御

里坊ニ御座候、

一 江戸表江入塾等被差出置候人数も変事相分、幕船より

使人いたし、昨日着いたし申候付留置申候、大炮手続

等も両公子直ニ今日御覽ニも相成候処、余程能ク出来、

御用立可申と存申候、御国家之御仕合ニ御座候、

一 長州大坂屋敷ハ御城代より御達ニ相成、引渡相濟直ニ

取毀ニ相成候よし、留守居ハ川口迄送出しニ相成候、

爰元長邸ハ、留守居乃美織衛火ヲ掛、自害いたし候よ

しニ御座候、

一 小蝶丸^{船汽}ハ関東より未乗帰不申候間、帰次第ニは早々

被差下候様取計可申候、

一 御手当^{此ノ御手当トハ長州征討ヲ云フ}之義は、此前之位^{此前ノ位トハ六月中旬京師へ出サレタル兵數ヲ云フ}

平^{ラン}ニて可然奉存候、尚諸藩之模様も承相分候ハ、

早々申上候様可致候、此節は無別条急速ニ相運可申と

奉存候間、御手当ハ早々御備有之度奉存候、此後長州

大挙之所は迫も六ヶ敷、是程控かれ候ては、頭之上り

候丈ニ無之、其上対

天朝敵対之道無御座候、早々追討より外ニ道筋有之間

敷候、長江探索も差出置申候間、帰次第ニは早々可申

上候、

右外段々申上度事件多々御座候得共、何分筆紙ニ尽兼

申候間、近々出陣日限等相分候上は、大島・拙者兩人

之内ニ宍人罷下、細々言上仕可申候、只今迄之処ニハ

一日片時も寸暇無之、無抛細大申上兼居申候、今便よ

りハ跡便急ニ不申上候ては不相成事と奉存候付、今日

ハ上田郡六急キにて差立、当人江細事申合被差下候条、

直ニ御聞取達

貴聞候義共は、可然御執計可被成候、此旨早々御内用

を以申越候、以上、

七月晦日認

小松帯刀

大久保一藏殿

再白、攝津殿^{再入}江別段問合不申候間、宜敷御頼申

上候、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

三九二 舊邦秘録

先般大隅守在京ノ砌、日向国細島修理大夫へ御預所被
 仰付、難有仕合奉存候、然処細島御引渡ノ上ハ則ヨリ
 御廻米、其外所置振等ノ儀ニ付テハ、多端ノ用途ニテ、
 御預所並国元御当地へ役場相立、掛リ役人モ別段申付、
 且海岸引受ノ場所ニ御座候得ハ、台場備向等ノ手当ハ
 勿論、守衛人数モ差出置、彼是相混不相応ノ入価ニ相
 及可申、然ラハ細島御高頭三十八石余御座候由、且又
 同所ノ儀ハ入船場モ有之候得共、日州一國ノ掛船ニテ、
 何モ益筋ト申程ノ儀更ニ無之、右余潤ヲ以前文出費旁
 通モ行届不申、殊ニ国許ノ儀ハ去夏戦争以來勝手向必
 至ト難渋ノ折柄ニテ、殆当惑仕申候、左候処一昨年来
 大隅守儀、御国家ノ御為莫大ノ入価モ不厭、度々上京
 又ハ致出府、周旋尽力仕候勤勞ヲ以、不容易御評議被
 成下、右通被
 仰付候儀ト、上下一同難有奉恐察候、然ニ前件ノ次第
 故何様差略仕候テモ、当然ノ事サヘ行届不申、全御
 趣意ノ詮モ立兼候道理ニテ、別テ心配罷在候、依テハ

御時節柄モ不顧随意ノ願筋ニテ、実以奉恐入候得共、
 御趣意モ相立候様仕度念願奉存候間、猶又篤ト御賢察
 被成下、何トソ出格ノ御評議ヲ以、日州御料所惣御高
 頭二万八千石余御座候段伝承仕候ニ付、右余勢ヲ以趣
 法相立、防禦筋等行届、御恩沢奉仰候様仕度候間、
 是非御許容被成下度、遮テ御同意可申上旨修理大夫申
 付越候間、此段申上候、以上、

七月

松平修理大夫内

新納嘉藤次

三九三 島津備後同圖書某詩歌

七月十九日戦争後之作

島津備後鑑忠

長藩振暴迫帝京

可憐朝廷因循情

(マ)

一戰貪生非懼死

嗚呼名義無間然

幾回挫計寒胆肝

勝敗任天高節堅

島津圖書治久

嗚呼天下勇義士

疑心紛々生不平

若賜断然追討勅

天下各藩励勇英

賊雖天衆強暴敵

悉為灰塵尽忠誠

元治元年 (1864)

姦党縱威強校冠

一朝廟算賊鏖尽

西鄉隆盛

叩搖兵器引朝難

神州威月照光寒

伊地知正治

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年八月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数六八枚)の記載あり。〕

目録

大島吉之助大久保一蔵へ贈ル書牘

舊邦秘録

宮内彦二其外戦死及ヒ分捕品届書

長賊撃退戦功褒賞

琉球国王代替云々

小倉滞在御裁許掛園田彦左衛門殿届書

藩達長防開戦ニ就テ

馬關戦況

薩州借り船下ノ關近海ニ難船ノ顛末

馬關景況在京高橋縫殿報告

〔長州へ夷船襲来及戦争候形行小倉滞在園田彦左衛門聞

合書写旧邦秘録〕

〔長崎在勤汾陽次郎右衛門戦況報告同上〕

〔小倉出張園田彦左衛門馬關戦況見聞届書同上〕

三九四 大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書牘

御面殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御儀奉存候、次
ニ貴兄御同慶之筈と奉恐賀候、随て弟無異儀相勸居申
候間、乍憚御放慮可被下候、陳ハ追々退散之賊党探方
有之、堂上之家内洄も探索いたし候様との義にて、洛
中外共大穿鑿ニ御座候、段々と捕候者も有之、今当分
ハ先静謐之姿ニ御座候、去ル廿四日ニハ兵庫表江人数
繰出し候様御達有之、諸郷四組・御城下一組被差出、
矢張守衛中ニ御座候得共、洄も大挙大挙トハ長州ヲ指ス之氣力も
有之間敷事との評判ニ御座候、戦争相済と直様加治木
之竹内(半右衛門)・岩崎(仙吉)之兩人を長国江探索ニ差出し、吉川(經助)其外
末家之面々内情如何ニ候哉、萩中之人氣何様ニ候哉、

若吉川等之面々異論之向も候ハ、委敷論説いたし、
 本家江相離候策を用ひ、降表ニても早く奉り候ハ、
 本領安堵可致事ニ候間、其刃之処深く相探り、周旋い
 たし候様細々相達、差出候儀ニ御座候、吉川等之者相離
 候処、肝要之策と相考申候、孤立之勢相成候ハ、余程
 攻安、二三之末家一ツニかたまり候てハ、中々六ヶ敷
 勢も可有之事と相考候儀ニ御座候、此度之征長ハ総督
〔徳川慶喜〕
〔松平慶丞〕
 一橋、副将春嶽公と申論決之由ニ御座候、就てハ幕よ
 り小監察御使者ニて越國越前イフ江被差遣、早々御上
 京を促し、會よりも使者差立候間、此御方様よりも御
 使者御遣しニ相成候様、分て相談之向ニ有之候付、細
 々書面相認、中根江向海江田〔書江〕被差遣候事ニ御座候、も
 ふハ御上 京相成可申、早く御征討無之候てハ如何之
 奸謀も難計候付、速ニ御征討之処相責候義ニ御座候、
 ○三日跡ニハ暴論之堂上有橋川宮、藤司其
他數拾名前ニ記ス方頭立候分ハ出
 仕御差止ニ相成、
 宮様方ニも 御所江每晚御泊ニて御座候へ共、是以御
 ひけニ相成申候、乍然 九門内之御固ハ今ニ騒々敷事
 ニ御座候、○天龍寺ニおひて長人囲置候米五百俵計有
 之候付、京都市中焼失之者共甚困究いたし居候付、

都て施行ニ出候処余程難有かり候向ニ御座候、当分ハ
 因循之名も因循云々、前巻ニ記シタル西郷カ書儀ニ、禁衛守衛而巳ノ目途
ニテ、他藩ノ論ニ左程セサルカ故、時因循ノ名受ケタリ、是
レ深ク慮ル旨アリ一戦限ニて、洗流候塩梅ニて、気味能事ニ
 御座候、○戦功或分取等之義、い〔正徳〕地知取調中ニ御座候
 処、兵庫江差越陣場等相定、近日罷掃賦ニ御座候間、
 追て跡より表通之御問越ニ相成可申義と奉存候間、左
 様御納得可被下候、○兵庫ニてハ蒸氣船を以海上之応
 援ニ備、老艘ハ繋居候処、御乗せ付之大炮も七百目杯
 之筒ニて、間ニ合兼候品も有之由ニ急速止ムヲ得ス七百目野戰
重砲ヲ仮裝セシモノナリ
 申来候間、是非船台筒御乗せ付相成候処有御座度、い
 つれ六封度以上之筒ニて無之候てハ用ニ立兼候由ニ御
 座候、以来之処御吟味可被下候、○長崎ニて異人之軍
 艦借入之手段ハ出来申間敷哉、二艘位も相調候へハ攻
攻破トハ長
破州攻伐シ云フ候場ニハ余程可宜事と奉存候、何分御勘考
 可被下候、爰許ニおひても幕人共江も申入候手段ニ御
 座候、○因備因州、備前
二藩ライフ之両藩長州江応援之義も、今形
 りニてハ出来兼候向ニ御座候、因ハ至極胆を寒居候由、
 備ハ前以よりに些にけ心地ニて有之候由ニ御座候、加州
 も組し居候処、十九日炮声と共に国元江逃下り、不屈
 之所業ニて御座候、只今加州人数市中拵ニて、長人探

索甚敷ものにて町家でさへ大笑と相成居申候、○攻口

攻懸り、日限等之義ハ越侯御上、京之上軟と相考申候、

早速相発可申儀と御扣相成居候処、些延引相成候付、

今日飛脚被差立候間、荒々形行申上候、日限相分候ハ

、直様蒸氣船御差立相成賦にて、幕船御借入相成居申

候、胡蝶丸之義ハ江戸表大砲積下り方江戸表大砲積下り方ト
砲ヲ京坂ノ間ニ備シトノコトヲ
云、其數凡大小二千門ニ余レリニ被差遣候処、今ニ帰坂不致何

方江相滞居候哉、不相分候、○尹宮様之処長人等大ニ

忌ミ居候姿ニ相見得、此機会ニ不振直候てハ、益御わ

つらひも到来可致、もふハ安心との

思食ニ罷成候てハ、尚更御避も出来候半軟と吟味仕、

大夫小松ヲ同道にて得と申上込、伊丹伊丹藏人ヲを被召仕候

様起て御願申上、周旋央ニ御座候間、左様御納得可被

下候、若

宮様之御失徳有之候へハ、直様其責ハ此御方様ニ相掛

事にて、及ふ限りハ尽可申事ニ御座候間、此度ハ至極

ニ責掛可申含居申候、勝て甲の緒を候場合と相考居

申候、恐惶謹言、

大嶋吉之助西郷隆盛
盛田名

八月朔日

大久保一蔵様利通

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三九五〔舊邦秘録〕

八月初在京某ノ書翰ノ略

戦争後八月初頃、幕府ヨリ宇和島藩留守居へ封書一通

ヲ渡シ、内密長州へ伝達可致トノ事ナリシニ、宇和島

ハ近頃音信不通ニ付、伝達方不叶段申立候得共、強テ

ノ達シニテ不得止事受合、早速使者差立長州へ相達候

処、長州ニテハ大ニ都合宜シク喜ヒタル様子ニテ候由、

此事後日相洩レ、幕府ハ奸智深キ所為ト申シタル由、

其趣ハ長州征討ノ命令ハ発シ候得共、内密ハ人氣ヲ鎮

メントノ事ニテ候由、仍テ其時分ヨリ人氣大ニ疑ヲ起

シ居、種々ノ説起り、或ハ一橋公ハ幕役ト睦シカラズ、

今度京都ノ一条ハ幕役中不承知ノ由、夫ヨリ一橋公ハ

御關係不被成、征討軍賦等都テ江戸ニテ相定メ、達シ

ニ相成候事ノ由、此末又内ニ何カ事起ルナラントノ説

モ種々起り候、追々幕威モ立チ、諸大名ノ參勤交代又

ハ妻子江戸住居等モ、以前ニ復シ候内定モ有之、不遠

達シ可相成ト様々ノ説モ有之由、何分内外混雜ナル世

ノ中ニ相成候云々、

一 七月廿四日、大坂長州屋敷焼討スベキ達シ相成、幕兵ヲ初諸藩兵五百人計押寄候処、敵対スルモノ一人モ無之、番人居候ノミニテ、蔵々開キ見候処、米凡ソ六万石余有之、是ノ米ハ商人へ売払、代金ハ皆受取ニ相成居候由、是ハ都テ取揚ニ相成候得共、長州之損亡ハ無之、全ク買入候商人ノ損亡ニ相成候由、

一 長州人ハ能ク人氣ヲ取り候事ハ不思議ニ候由、攘夷ヲナシ万人ノ困苦ヲ救ヒ候ナトノ事ヲ以テ説得致シ、夫故右米代ナトハ直チニ納メ、万一ノ時ハ兵糧用ニ可出トノ約束モ致居候由、

一 右通人氣ヲ取り居候ニ付、争戦後モ悪シ様ニハ不申、正論ト唱へ會・薩ノ暴業トノミ申シ、殊ニ此戦争ニ烏丸迎ヨリ放火シ、四條辺マテ一円ニ焼失、又會津兵カ重ネテ放火シ、七條迄モ焼亡シタルニハ、其所業全ク會・薩ニアリト大ニ憎居候由、

一 戦争中此方ノ手ニ生捕候長州人中、川村一郎ト申ス士分ニテ、天龍寺へ捨有之候人数帳ニモ、五六番目ニ記シ有之候者ニテ、賤シカラヌ容体ノ者ニ候、糾問シ及候処、申分慥ニシテ、一日モ早ク死ヲ賜ハラントコトヲ相願候由、丁寧ニ御取扱ヒ相成リ、御兵具所ノ稽古所

内ニハゲ付ニ繩ヲ掛ケ被召置、朝夕共ニ平ヲ付キノ御賄被成下、恐入難有カリ居候由、

一 會津・越前等ノ生捕ノ者ハ、廿日ニハ皆首ヲ切り候ヨシ、札問ノ時ハ土地ニ繫キ置キ、拷問シ言ヲ不発ルモノヘハ、蠟燭ニ火ヲ付ケ、鼻ニ当ナト致シ候ヨシ、會津生捕ノ内ニ病身ノ者有之、砂糖少々喰ヒ度相願候処、火ノ起リヲ与へ、口ニ押シ入レ候由、誠ニ残忍ナル取扱致候由、

一 此方生捕ノ内ニ二十四歳ノ少年一人有之、政次郎ト申ス名ニテ、身柄相糾シ候テモ決シテ不申、私ハ賤シキ者ニテ候ト申シ通り居候由、容貌モ立派ナル生付ニテ、其者鉄砲ノ早籠十五発分首ニ掛ケ居、其内四ツ・五ツハ明キニ相成居候故、何発放チ候哉ト相尋候ヘハ、何発打チ候モ慥カニ取覚ヘ不申候ヘ共、三四発ハ打候矢所モ慥ニハ相分リ不申、残念ニ候ナリナト、申居候、

是モ早ク死ヲ賜ハレト申シ、万一モ命ヲ被下事ニ候ハ、長州ヘハ不帰、薩州様ノ御内ニ相願ヒ御奉公可致ト申シ、親兄弟モ罷居、戰場ノ露ト消ヘ候ト供養共致シ候半ナト、申シ、此事ヲ考ヘ候得ハ安眠モ不仕ト申シ、涙ヲ流シ、美味ヲ被下候得ハ、此様ニ結構ノモノハ被

下ルナト申シ、親ノ事ヲ思ヒ出シテ咽ニ下カリ不申、
仏壇ヨリ食物ナト手向ケ候半ト申シ候由、

一 此少年ハ長州ヲ出候時ハ軍ニ出ルトハ全ク不存、京都

見物ニ列レ行クトテ年長ノ者申スニ付、両親ヘモ不申

(山口県)

聞忍ヒ出、三田尻ニテ船ニ乗り候時親父走セ来リ、少

シモ叱リハ不致、無病ニシテ帰レト、母ヘモ早ク帰リ

テ面会セヨト申シタル許リニ候ト申シ、涙ヲ流シ今更

私力氣随故ナリ、御情モアラバ母親ヘ此様難有訳ノ書

狀一封ヲ遣シ、今生ノ離レニ仕度ト申候由、其外ノ者

共ハ皆田舎モノニテ命ノ惜シサニヤ、長州ノ地利ナト

又ハ山口城下ノ道筋ナト咄致候、此少年ト川村ハ外ノ

者ヲ叱リ付候由、夫テモ小声ニテ色々咄致候由、

一 右生捕ノ者申スニハ、長州山口城ヲ急々御責メ被成ハ

不宜、道モ峻シク、其上陸ニ台場モ所々ニ備有之、中

々一ト通りノ事ニテハ落城無覚束、イツレ遠攻メニ被

成候ヘハ、一年位ニテ困窮可致ト申シタル由、

一 五月初頃中立賣辺ニ非人一人罷居、不審ノ者故會津ノ

手ニテ召捕及糺問候処、中々白狀不致、水火ノ拷問ニ

及候処、終ニ白狀致候由、此者ハ長州ニテ目付役相勤

候モノニテ、書留等モ有之、色々事情相分り候由、此

者身体モ非人ニナリ切り、誠ニ剛情ナル者ナリ、又同
シ頃相國寺ヘ出家一人不審ナル者ノ有之、是モ會津ノ

手ニ召捕糺問ニ及候処、問者ニテ候由、此者ハ面道ニ

達シ居候ニ付、山口辺ノ地図為書大ニ見合ニ相成候由、

一 此方ノ兵士中ニ高岡ノ士本田次郎五郎ト申者、鉄砲ニ

テ敵一人ヲ打留タル由、軍終リテ乾御門前ニテ勝吐氣

ノ式アリシ折申出ルニハ、狩ニ参リ突ヲ射候ヨリ懇ヒ

易ク、軍ハ格別六ヶ敷モノニアラズ、是迄ハ聞ヲチ致

居候ト笑ヒ候由、

一 飯野郷士_{不分}モ能キ武者ヲ鉄砲ニテ打留候ヘ共、首ヲ

取ル間ナク捨置候故、朋輩共何故首ハ取ラサル哉ト尋

候処、首ハ御城下ノ衆可取、面動ニナル故不取ト申シ、

尚外ニ射殺スカ第一ナリト申シタル由、名利ニ不志士

ナリト感心セリ、後日御名代_(高津忠憲)備後殿_(高津久治)圖書殿被聞召、

御褒賞被下候由、世ハ末ニ相成候ヘ共、カ、ル廉潔ノ

士モアルハ頼母シトノ評判ニテ候、

一 長州人ハ以前ヨリ種々奸暴ヲ以テ世ヲ乱シ候モ、全ク

私欲上ヨリノ事ニテ、將軍職ヲ取ラントノ内心アルハ

段々証拠モ有之由、殊ニ昨年ヨリ此節ノ次第、大逆無

道、天誅勿論ノ大罪、剩ヘ去年五月下ノ關通航ノ夷船

ヲ砲撃致、

皇国ノ大難ヲ引キ出シ、然ルニ此度下ノ關ニ英・米・佛・蘭四ヶ国ノ軍艦十八艘ヲ以テ攻撃致サレ、敗走ニ及ヒ終ニ和ヲ乞ヒ、壇之浦并ニ前田等台場ノ大砲等悉ク被奪候ヨシ、其時国中下賤ノ輩ハ夷人ヘ加勢致シ、大砲等船ニ積入レ候由、其時下賤ノモノ申スニハ、ケ様ノモノナルカ故、余計ナ軍ヲシテ、攘夷ノ何ノト人ノ苦ミヲカケル故、皆夷人ニ遣スカヨイト、数十人ノ手ニテ持出船ニ積セ候由、国中如斯ノ人氣ニテ、役人中ニモ心配致シ居候由、

一黒田藩樹嘉右衛門筑前辺ヘ被遣、歸リニ長崎ニ立寄り、英人ガラバナナルモノヘ面会、段々ノ嘶ニ下ノ關戰爭ノ事ニナリ、四ヶ国十八艘ノ軍艦ニハ、長州モ大敗北ニテ和ヲ乞シ其時、長州ヨリ申ス趣ニ、攘夷ハ

勅命ニ依リテ致シ候事ニテ、私ノ見込ニアラス
朝廷・幕府ノ御沙汰モ毎々有之、殊ニ薩・長其外諸大名モ同心ノ事ニ有之候、然ルニ此節

勅意異変ノ向ニ有之候間、長門守其伺ノ為メ上京致候、全ク長州一己ノ意ヲ以テ攘夷鎖港ヲ唱ヒ候訳ニアラズ、幕府ノ役人ハ偽詐多ク、歐羅巴人不納得ノ事不少

候間、此後ハ直チニ

朝廷ノ命ヲ以テ可取計、依テ和睦ヲ乞フトノ趣ニテ候由、是ヨリシテ長人ハ以前ニ引替リ、夷人トノ親厚ク日本ノ内情モ打明カシ、却テ彼レニ尻押しノ勢ニ相成リ候由、且長人外夷ヘ内密申ス、

朝廷ト幕ト府脱中惡シク、幕府ハ偽多ク、今日ノ事モ明日ハ直ニ變シ候故、諸大名皆幕府ヲ惡候、仍テ何事モ書付ヲ以テ論判ニ及フベシト申込ミ候ニ付、歐羅巴ノ人共承知シ、其後ハ軍艦五六隊、兵卒一二万人ヲ催シ、江戸ヘ押寄せ、將軍ニ直ニ談判ニ及ヒ、其上急ニ望通ノ事ニ不運候ハ、兵庫・大坂ヘ押寄、関白直ニ談判可致、今形約定変シ易クテハ不相濟ト各国議定ノ由、右ハ長州人歐羅巴ヨリ近頃歸リ候者ヲ以テ申聞事ノ由、如此長州ハ變化シタル趣申シタル由、

一戰爭後京中ノ米価、白米一升百五十文ノ定直ニ幕府ヨリ被定、諸人別ニ困窮ニ不及由、只困リ候ハ兵火ニテ木屋掛ナト漸クニ相調候者多シトノ由、

一戰爭後ノ金相場モ一兩六貫四百文内外ニテ、格別高料ニ不相成由、

一反布類モ格別高直ニ不相成、以前通りノ相場ナル由、

一 戰爭中放火ノ為メ市中ノ焼亡夥シク、土藏ノ焼ケタル
数多ク、平常ノ火事ノ様無之、目塗り等モ不行届、皆
人大小砲声ニ恐レ逃ケ去リ候故ナリ、殊ニ丸太町辺・
中立賣出水辺御所近キ町々ハ戰場ニテ其通ノ事ニ候、
三條・四條ヨリ未ノ方ハ、土藏ハ差シテ焼ケ不申候由、
一 長州人ノ相印ハ、紺足袋股引脚半トノ間ニ、白布ノ幅
五部許リノモノヲ巻キ居候由、敗北ノ後ハ此印ヲ捨、
其上他藩ノ名ヲ偽リ、諸所ノ固メ場ヲモ抜ケ通り候由、
一 重久直心ハ下立賣出水辺ノ警衛ニテ候処、長兵五十人
余ノ人数逃ケ行ヲ待チ居候処、四五十人ノ長兵公然ト
来リ、直先ニアルモノヨリ御免被下ト申シ徐々ト罷通
リ候ニ付、何方ノ人数カト問ヒ掛候処、越前ニテ候ト
申シ少シ早足ニ相成候間、不審ニ存シ候得共、何分粗
忽ニ手出シモ不相成、右ノ人数絹白ノ印付居候ヲ、同
隊ノ中ニ存候モノ有之吟味スル内ニ、早ヤ二町余モ行
キ過キ候得共、放發致候処、直ニ逃ケ出シ候ニ付、ボ
ードホイツル連發致シ、十余人打倒シ、其余ハ四五人
三四人ツ、四方ニ逃去ルヲ追ヒ討致シ、二十余人ハ打
殺シ候由、

一 會津兵蛤御門ヲ固メ居候処、三十人許薩州印ヲ付ケ、

薩州ト名乗り罷通り候ニ付、差シ通シ候処、遙ニ行過
キ候後、長州残兵ト申ス事相分リ候由、ケ様ニシテ落
延ヒ候者多ク有之候由、

一 此度ノ戦ニ第一ニ手イタク戦ヒ候ハ、會津・越前・一
橋・此方ノ四藩ニテ、其中ニ公家御門前ノ戦ニ會津・
越前敗走シ、長兵已ニ禁内ニ押入ラヌトスル処ヲ、此
方ノ兵応援シ遂ニ追ヒ退ケ候由、其場実ニ危キ事ナリ
シ由、

一 加州ハ此内ヨリ君侯モ上京相成居、密々長州ニ組シ候
処、元來弱国ニテ、十九日戰爭初リ前ニ君侯ハ僅ノ供
方ニテ、御暇モ不申退京被致、大津ヨリ小舟ニテ被引
取候由、家老本田某ハ、十九日戰爭初リシヨリ引キ取
逃下リ、人数ハ多ク残シ置キ候ヨシ、未練臆病ノ評判
取々ナリシ由、

一 廿日・廿一日頃ニハ加州勢ハ籠手・脛当等事々シク出
立、拔身刀・槍・鉄砲等ヲ携ヘ洛中ヲ行キ廻リ候、見
ル人毎ニ臆病加賀ト指差シ、笑ヒ嘲リ申候、初メ出京
ノ人数ハ上下七千人トノ届ニテ候処、争戦後ハ漸ク千
人位ニ減シ候由、固場ハ仙洞御所前ニテ、陣屋モ立派
ニ出来、人々ノ出立モ諸藩ニ立越立派ニテ候、

一 戰爭後諸所ノ固メ場皆變革相成リ、日之御門ハ諸州高松引続キ尾州侯、南門ハ初ヨリ會津ニテ元ノ通り、公卿御門ハ越前引続キ桑名侯ニテ、乾御門ハ以前之通此方ニテ候、

一 會津侯ハ壯年ニテ二十七歳ナリト申ス事ニ候、戰爭前ヨリ大病ニテ伏入ノ処、病ヲ忍ンテ參

内、

天拜ノ上御花畑内へ宿陣シ、手勢ハ武田街道ニ出張シ、大ニ勤メ候評判宜シク候、同藩人ノ咄シニ、此上人数増共被命候得ハ、国元ニ士ハ一人モ無之、只今ニテ凡士卒合テ八千人余在京致居、加之入費夥シク如何ントモ致シ方無之、困窮ニ及候トノ咄ニテ、決シテ其通ナルベシト申ス事ニ候、

一 川上助八郎カ長人篠原秀太郎ト申ス者ト戦ヒ、已ニ危キ処ヲ、足輕川路正之進走セ来リ切殺シ候、川上カ刀ハ関ノ_{不分}作ニテ候由、篠原カ刀ハ長治ト銘有之、大坂居住ノ鍛冶ニテ候由、

一 戰爭終リテ此方ノ足輕・下人数ノ者共ハ、敵ノ死骸ヲ探リ分捕多ク致候由、一人ニテ百両余モ取候者有之、二三十両位不取モノハ無之程之事候由、又ハ刀其外武

器ヲ取候モノ多く、因テ又モ軍アレガシト申シ居候由、夫レニ士分ノモノハ一錢ノ分捕致候人ハ無之、適々見テモ蹴リ散ラシ、兼テノ嗜格別ナリト申ス事ニ候、

一 此方分捕ハ小銃七十丁、大砲十七挺、此内大砲十一挺ハ蒸氣船ヨリ鹿兒島ニ送り、一挺ハ御兵所蔵へ格護相成リ、余ハ都テ地金用ニ鑄製所へ被相渡候、

一 天龍寺ニテハ、此方ノ手ニテ米其外書付類ヲ大切二分捕シ、其余ハ火ヲ掛ケ候故、家ト一緒ニ焼捨候由、

一 福原越後ハ伏見ヨリ押寄セ、大垣勢ノ藤ノ森ニアルヲ追退ケ、夫ヨリ東山辺知恩院ニ屯シ、

主上御迦アルヲ奉待守護シ、臨機宇治又ハ奈良良迎へ御幸ナシ奉ルベシト、予メ定メタル事ナリトノ由、

一 川上助八郎カ長人篠原ト大刀合セノ戦致シ、篠原長キ大刀ノ打振り手利キニテ、川上ハ危ク逆モ仕留ハ六ヶ敷シク相見得候処、川路正之進走來後ヨリ切り付候へ共、篠原カ鎧ヲ着シ居候由ニテ切レ不宜、二ツ三ツ切り、川上モ刀ヲ得テ切り掛ケ候故、篠原モ何カハ前後二人ノ敵ニ叶フヘキ、遂ニ斃レタル処ヲ川路タ、ミ掛ケテ切り付ケリ、川上モ突ヤラ切ヤラ致シ、首ハ川路カ手ニ打落シ候由、篠原ハ一刀流ノ達人ナラント川路

カ咄ニテ候、篠原ハ長州ニテモ賤カラス者ト相見ヘ候由、此度ノ戦ニハ此大刀打ヲ第一ノ評判ニテ、他藩ニ於テモ大評判ニ候、昔ノ軍ト違ヒ大小砲ノ遠戦ニテ大刀打・組打等ハ決シテナキモノト皆人相考候処、間ニハケ様ノコトモ有之候間、刀劍ハ捨ラレヌモノト申ス事ニ候、長州人ノ内ニハ槍・長刀ヲ持候モノ段々相見得申候、官軍ニモ會津・桑名・越前等モ槍ヲ携候モノハ多ク相見ヘ候、又弓ヲ持候モ有之候、

一軍初リ大小砲ノ音 御所内ニ相聞得候処、公卿方ハワナ、振ニテ其狼狽限リナク、色青ザメラレ逃支度ノ様子ノミニ相見得候由、其時感心ナルハ、〔朝多親王〕尹宮様ニハ平生ニ御替リナク平日ヨリモ御静リ、始終

主上ノ御側ニアラセラレ、折々表ノ方ニ御出陣之様子御尋ネアリテ、夫ヲ

主上ニ言上モアラセラレ候由、又主上ハ砲声ノ聞ヘ初ルト、直ニ御衣冠ヲ御改メ遊サレ、

常御殿ヘ出御、
皇后宮モ間〔ナク脱丸〕モ御衣冠ニテ同御殿ヘ御出、御二リナカラ御動キモナク、人形ノ如ク泰然トシテ御座ナサレ候由、サスカニ一天ノ主タケアラセラレシト、尹宮軍後ノ御

物語ノ由、宮女共ハ狼狽シテ鳴クモアリ、顔ヲオウヒテ伏スモアリ、彈丸ノ御庭ニ飛来リシヲ見テ声ヲ出シテ鳴クモノ多ク、誠ニ仕方モナキ次第ナリシトノコトニ候由、其上公卿方ノ内宮女トモト談合シテ、御迦シ、トノミ尹宮等ヘ迫ルニハ、宮モ大声ヲ出シテ武辺ノ言上ノ上ニトノミ御答被成候由、

三九六 甲子八月於京都御届

宮内彦二其外戦死及ヒ分捕品届書

三九六ノ一 八月朔日松平修理大夫様ヨリ

戦死

宮内 彦二

野村 藤十郎

同 勘兵衛

松原 深太郎

ノ四人

深手

塔 華 庄 太

道 岡 忠之助

海江田武右衛門

福長 傳太郎
同 助左衛門

永野 圓右衛門
平岡 源四郎

赤井 兵之助
薄手之者 廿三人

右之通弊藩戰、死手負ニ御座候間、此段申上候、以上、

別段

一首 廿九級

一鉄砲 廿二挺十匁ヨリ
五匁マテ

一生捕 十三人

一陣太鼓 七

一刀大小 十六本

一長刀 一振

一突鐘 二ツ

一膳当 十八

一具足 四十五領

一旗 六本

一紋付幕 六張
但切捨又燒亡等ニテ不相知者モ御座候、

一大砲 十二挺
右分捕之品ニ御座候、

三九六ノ二
八月三日井伊掃部頭様ヨリ

七月十九日、丸太町通於堺町東ニ入一戰討取首級之
事、

一首 一姓名不知 青木津右衛門討取
一同 同断 曾根佐十郎討取

一同 同断 神尾惣左衛門討取
一同 六マテ 澤左小幡次郎八組足輕 右 太

但兜付二ツ、尤一人姓名又二郎藤原幸弼、
砲戰之節討取

右之通木俣土佐隊ニテ討取申候、生捕之者無御座候、
此度申上候、以上、

三九七 長賊擊退戰功褒賞 (本藩)

長賊 關下暴動各藩鎮撫褒
勅左ノ如シ、

去ル十九日、禁闕之下不容易擾乱之処、各藩兵士忽
出張、粉骨碎身抛一命、遂防戰速及鎮静之条、忠勳

(原本通り掲ぐ、後考をまご)

觀感不斜候、殊ニ其後數日終夜御守衛別テ苦勞被
思召候旨、御沙汰候事、

右七月廿一日、各藩各通ヲ以テ重役召喚、伝奏衆ヨリ
達セラレ、本藩ハ小松帶刀出頭拜承、即日各隊ヘ伝達
ス、而シテ鹿兒島ニ於テハ八月三日ヲ以テ左之通城中
又ハ組頭宅、諸郷ハ地頭仮屋ニ於テ拜見セシメ、或ハ
布達セラレタリ、

先月十九日於京都長州人又ハ浪士共、及暴動候節、
此御方御人数抜群ノ働イタシ、賊徒速ニ追ヒ払候ニ
付、御別紙之通御褒

勅被為蒙 仰誠ニ以不容易御事候条、一統謹テ奉承
知候様可申渡候、

八月^三

攝津^{喜久}

式部^{久美}

但馬^{久運}

此ノ布達ハ八月三日ニ達セラレシトモ、茲ニ記スハ褒

勅再記煩ハシキヲ以テナリ、

三九八 琉球国王代替三云々

元治元子年八月十五日因幡守様へ
被差出之

琉球中山王代替ニ付テハ、来々寅年從清国封王使渡来
之由、中山王申越候、此段申上候、以上、

八月三日

松平修理大夫

三九九 小倉滞在御裁許掛園田彦左衛門殿届書

三九九ノ一

今四日午刻時分、長府領元山崎より夷船相見得候由、

当御領田之浦辺より注進有之候付、則同所江馳付候処、
半里位相隔候同領太刀之浦地方より三町位冲合江、一

町位ツ、間を置都合拾八艘碇泊いたし、（未一小倉邊）当所役々五六

人乗付候付、応接之次第承合候処、英軍艦大小拾貳艘、

蘭同五艘、佛同壹艘都合前之通にて、昨年下之關通船之

折無故逢砲発、其段は則於横濱政府江申出、おのつから

御所置も可有之、最早一ヶ年余も相待候得共、是迄全

無其儀候付、遺恨為可相嗜各国申合、先月二十八日横

濱出帆、豊後姫島にて舟揃渡来いたし、明五日早天よ

り下之關江通船、彼方より若不及砲発候ハ、同所人家

江夷船より致砲発、其上なから同断之儀も候ハ、直

ニ上陸諸所台場居付之大砲押取、於横濱政府江可差出

所存之由相答候付、長州之儀は於日本も不法之挙動等

有之、不日御所置も有之筈候付、夫迄は猶予可致旨、

此節被仰出候、長州御征伐之御趣意相合申入候処、於日本もおのつから所置も可有之候へ共、夫成難捨置訊筋にて、此儀は何様承候ても、不致承服旨、口を切相答候付、其俣引取候由承、右応接之次第を以は決て明日戦争相開可申哉、尤前田等之台場田之浦より纏拾五六町相隔、今昼時分より追々多人数張出候向ニ相見得、尚又戦争等之形行追々可申上候得共、其内襲来之次第迄、此段早々御届申上候、以上、

但太刀之浦夷船碇泊之処より前田台場迄凡海上二里半位、同所より下之關人家半里位之由御座候、

子 八月四日

小倉滞在

園田彦左衛門

(島津忠兵衛所藏本にて校訂)

三九九ノ二
本文二付

当所役々ヨリ夷船江乗付致応接候処、外夷共ヨリ相答候ハ、方今長州江襲来之趣意前段之通ニテ、既ニ横濱出帆之節、夫々政府江モ申出候処、小笠原大膳大夫様(忠幹、小倉藩主)事、素ヨリ幕府江御由緒モ有之、就中近代御精勤之一筋モ有之候間、自然砲戦等ニ相及、カノ御領内江ハ子細モ無之候間、必楚忽之挙動等不致様幕役ヨリ御内諭

モ有之候間、聊懸念ニ相及申マシク候、乍然時機ニ依テハ致上陸儀モ可有之、其節ハ決テ乱妨横行不致候テ可然聞取可呉段、夷人ヨリ致理解候由承得申候、夷船襲来ニテ小倉藩応接等之次第、一昨四日夜御届申上候、昨日ハ決テ砲戦可成存、小倉町ヨリ四里位有之候大里之内高山笠頭ト申処へ、為見聞早天ヨリ罷越候処、夷船ニハ先日通太刀之浦江碇船イタシ居、馬關前田ナラヒ二壇之浦台場凡海陸七八合位モ有之、眼下ニ見御戦争見聞ニハ第一之場所ニテ、右台場之儀、一昨日マテハ旗相立騎馬馳達、甚混乱之向ニ相見得候得共、昨朝ニ相成旗モ取除、殊之外鎮返リ、仮令異船ヨリ致砲発候テモ、彼ヨリ打合イタシ候儀ハ無覚束向ニ相見へ、尤於異船モ至極静成様子ユへ、砲戦可相成ヤ聊疑惑仕居候処、昨五日未刻時ヨリ追々蒸氣ヲ立、拾八艘之内五艘ハ長府地方江乘向、前田台場ヨリ拾町位上筋之方江都テ蒸氣ヲ留、六艘ハ小倉灘田之浦地方ヨリ、雨力久保ト申処、台場差向ヒ之所ニテ、砲台ヨリ七八町位相隔、是亦蒸氣ヲ留、又夫ヨリ大振り之式艘右両方中海江乗出、残り五艘ハ太刀之浦ヲ少シ乗出候モ有之候処、無程右大船ヨリ空砲一発打出候処、雨力久保浦江真先

江扣居候船ヨリ前田砲台江ニ發打込、直ニ彼方ヨリモ六七発一所ニ同断、夫ニ外船々ヨリ砲撃、前田ヨリモ六七拾發余程無透間打出候得共、漸々砲声間遠ク罷成、夷船ヨリハ尚又都テ前田江打込、其内間々壇之浦江同断、長府地方ヨリ二艘砲台近ク乗行散々打崩、右之内ハレットタン甚敷台場内江打込、決テ手負・死人モ可有之勘考シ、折角所陣屋火之手相見得無程焼亡、彼方ヨリハ夫限ニテ全不致砲發、夷船ヨリハ其後モ數發打込、夫ヨリ壇之浦台場江振向數發同断、左候テ拾八艘之内五艘ハ太刀之浦前ニ扣居全不致砲發、尤長府地方之船々ハ都テ横合ヨリ打込、夫故打破候向ニ相見得候処、又長府地方之船式艘速戸之瀬戸ヨリ壇之浦之方江乘入、彼是三拾發位打放、下之關人數江モ三四發ハ打込候得共、最早夜ニ入船影モ難見分、追々太刀之浦方江引取碇泊イタシ候ヲ見届罷帰候、就テハ最早三拾發位ハ算候得共、追々數艘之船ニ一所ニ打出、其後何程ト申儀慥ニ分兼候得共、二時計之打合ニテ勿論都合拾三艘ヨリ無透間打出候付、彼是千發位、台場ヨリハ式三百位モ打出候儀共ニテハ有御座間敷哉、土持平八(親等)其外多人數見物人モ有之、凡之見当右通ニテ御座候、尤台場ヨリ

異船江打当候儀ハ見及候ハ無之、決テ間近ク相見得候テ、其通相違有之間敷奉存候、左候テ手負・死人之儀イマタ相分不申、且又太刀之浦ハ異船乗出候旁之次第、別紙籠絵図面通ニテ相添差上申候、勿論今日マテ滞船仕居候付、尚又見聞仕退帆次第、早々罷帰細事可申上候、先昨日戰之形行之通如此御座候、此段早々御届申上候、以上、

子八月六日

三九九ノ三

本文小倉役々夷船へ乗付致応接、夷人共申ス趣ニ、長州へ襲来ハ前段之通ニテ、横濱出帆ノ前政府へ申出候処、小笠原大膳大夫事、幕府之由緒モ有之、就中近代精勤之一筋モ有之候間、自ら砲戰ニ相及候ハ、彼領内へハ楚忽之舉動不致様幕役ヨリ内諭モ有之候間、懸念ニ相考間敷、依時機上陸モ可致候得共、聊乱妨横行等ハ不致、可然聞置候様申出候由、此段モ申上候、

前報告ノ次

先達テ長州ヨリ益田・福原等多人數引列、又ハ長門守(毛利元徳)様御出京旁之次第、精々探索仕候処、益田其外久坂元(武)隨(瑞)・木島又兵衛(政久)・牧和泉(保臣)ノ誤ナリ其外両三人

専ら頭取ニテ、表向ハ攘夷ノ名ヲカリ、実ハ

主上ヲ山口へ可奉移山口へ玉座ヲ遷シ奉ランノ議ハ、専ら馬關其
他長防地方一般ニ唱ヘタルコトナリシト云フ

之企モ有之、追々浪士ヲ集メ、城ヲ山口へ築キ、海岸

又ハ小郡宮市へ陸台場ヲ築造イタシ、或ハ三條其外之

公卿方ヲ誘ヒ、去年八月企之次第相頭ハレ京師不都合

相成候処ヨリ、此御方様並會津ヲ第一意恨ニ色々無形

儀共悪様ニ申触シ、近頃ニハ會津米積會津侯ノ領地後ニテ
此所ヨリ廻漕ノ船ナ

云リシト船ヲ燒キ、然ルニ先々月五日於京師會津ヨリ長藩

ヲ召捕又ハ討取、右注進追々山口へ相違、益田・福原

等之者共會之上、此機會ニ兵器ヲ携、多人數出京イタ

シ歎願申出候ハ、決テ勢ニ恐レ無御因循

勅許可相成、尤筑前・因州・岡山等へモ前広説得致シ、

此節休戦争相及候儀ハ、決テ有之間敷ト之評議モ有之、

吉川其外譜代之内ニハ、多人數出京之儀ハ宜無之、強

テ相拒候者為有之由候得共、三條其外暴論之輩聞入無

之、押テ追々三千人程伏見・八幡・山崎辺へ出張イタ

シ、京師之模様相同、イツレ長門守様早々御上京無之

候テハ、内存通參兼候処ヨリ、右之趣ヲ以テ益田等ヨ

リ度々申越処其段吉川承リ、則山口へ差越頻ニ逗留メ、

長門守様ニハ御承服相成候得共、例ノ暴論家ノ者共不

合点ニテ、強テ御上京申上候処ヨリ、吉川ニモ無致方

先月十四日山口御出立長門守出
發ヲ云フハ、先達テ申上候通相替

儀無之、然処於御中途變事到来モ難計トテ、遠見船兩

艘被差出御供船跡先ト乘行、同廿二日讃州多度津御出

帆、與島ト申ス所ニテ京都戰爭長藩敗走之注進相違シ、

一統恐怖イタシ格別評議速モ無之、直ニ御曳返シ、尤

モ此御方様蒸氣船ヨリ追討相成ト之取沙汰有之、イツ

レモ大ニ相恐レ余程混雜、同廿三日夜防州室津へ御供

船モ追々相付、右追討之評判遠見船被差出候得共無

其儀押返シ、御上京之評議モ有之候得共区々ニテ、先

ツ一往御曳取其上何分トモ御評議可然ニ相決シ、夫ヨ

リ同廿七日三田尻御着長門守歸
着ニ云フ三條美其外公卿方ニモ同

断、御同人御旅館ニ大膳大夫様御出迎、廿八日山口へ

御帰城、尤御同人初至極御残念之由ニテ御落涙、御供

方之面々申聞無之只管恐入候為体ニ相見得候由、左候

テ益田等ノ人数凡三千人位罷登居候処、千人位ハ追々

逃下リ、其余ハ慥ナル儀ハ不相分候得共、如何様戰死

又ハ被召捕候儀共ニハ有之間敷哉、福原ニハ鉄砲疵ヲ

負ヒ候得共存命ニテ罷下リ、益田・國司ハ行衛不相知

哉ニ取沙汰イタシ候、尤福原一手之人数之内、用人加

藤原五郎ト申者筑前黒崎船ヨリ逃下リ、於船中乗合之者へ相咄候ハ、此節之戰爭勝利相違無之候処、主將之手配不行届、其上山崎之隊出勢不致、夫故惣敗軍トナリ、可勝軍ニ敗ヲ取り遺恨千万、山口着之上ハ形行可申出トノ咄致候ヲ、船頭黒崎之廣助承リ居候由、左候得ハ其場之次第不致一和尙(マヤ)ニモ相聞得、尤兵庫辺ヨリ逃下候モノトモハ、態ト無力ニテ人足体ニ相紛レ候者過半有之、尤在之内ニモ手負之モノ段々有之候由、其後之次第探索仕度與々奉存候得共、異船襲来後下之關通船互ニ差留メ、夫故聞合之道モ相絶残念之至ニ御座候、然共夷船退帆仕候ハ、手弦ヲ求メ承合候モ可有御座ト奉存候、

一筑前藩此内ヨリ五六拾人山口へ入込、長門守様御上京之折御供之内ニ乗組居候処、前文通御曳返ニ付、三田尻ヨリ黒崎へ着船、至極秘事ニ致シ居候由、且同所之早船十三艘御出京前長州ヨリ御借受相成、又ハ於兵庫辺モ外ニ黒崎船五艘借受逃下候モノモ有之、其外以前ヨリ互ニ御往来、先達テモ申上候通、攘夷別当御願立筑前侯ニ付テモ建白之趣モ有之、長州同腹之形ニ相聞得申候処、此節京師交後ハ右通人数申出置候儀ハ勿論、

何篇穩密ニ致シ、攘夷一条ニ付テハ援兵可差出ト一往約条イタシ置候迄之事ニテ、外ニ全ク子細無之由為申觸候由、然処去ル十日、筑藩喜多岡勇平ト申者小倉様(小倉原忠幹、小倉藩主)へ為御使者差越、当所役人面会致シ候処、筑前ハ長防同腹之由世評有之、美濃守様ニモ其段御聞ニ相成至極御心配ニテ御取調相成候処、暴論之者モ少々ハ罷居、則チ御取扱可相成事候得共、涯々右之通ニテハ混雜成立候模様ニテ、其内ハ屹度締付置候様、此上ハ何モ子細無之、小倉様之儀全体御統合モ有之、其上御隣国ニテ何カ御互ニ無隔心、以前之通御付合モ致度、尤モ長州へ夷船渡来ニ付、援兵差出候賦ニテ、黒崎迄差出候処、追討之儀被仰渡候ニ付、援兵之儀ハ差扣追討手当ニ振替同所へ扣居候、就テハ長州申合セ、小倉ヲ狭打之手筈モ有之、夫故只管其用意モ有之候由承、人数因堺へ出張居候儀疑モ有之候ハ曳取候共差図次第可取計、勿論此内当所台場御借受一条ハ勿論、彼是評判之趣一々聞捨ニイタシ、長州同腹ニテハ曾テ無之筋ニ心得異候様為申由、且肥後へモ先達テ筑州ヨリ御使者參リ、長州同腹ニ無之小倉同様之趣演舌イタシ候由、是以樋二承届為身晴之諸所へ御使者相立候向ニ相聞得、両藩

トモノ物笑イタシ候位ニテ、差テ打合モ無之候由、

一小笠原様小笠原之儀、昨年来長州トハ至テ中惡鋪折柄、

此節於京師彼方敗走之聞得有之、夫レニ勢相付、然共

彼方ヨリ不意ニ押寄候モ難計トノ評議ニテ、大里・田

之浦又ハ筑前之儀、長州同腹ニテ申合挾打等之疑念有

之、国境へ窃ニ人数差出至極嚴重之御手当ニテ、諸所

ニ新規ニ番所相立、士分之者共鉄砲切火繩ニテ夜廻イ

タシ、此内トハ大ニ士氣ニ振ヒ立、大里其外ノ要所へ

大砲三四挺ツ、諸所ニ居付、下ノ關通船ヲ差留メ既ニ

手当向計カト相考候様御座候、尤士分・足輕等帶刀之

者都合式千七八百人位ノ由、何分小藩ニテ御手当向届

兼候処ヨリ、唐津ヨリ上下三百人先日為援兵差越、細

川様之儀ハ御統合モ有之、此内ヨリ御援兵之御願立有

之、上下式千二三百人近日御差出相成賦之由、左候テ

良之助様来ル十八日御上京之取沙汰ニ御座候、

右之通承得申候間、此段御届申上候、

小倉滞在

子八月四日

園田彦左衛門

茲ニ記ス処ノ説ハ十中ノ八九ハ其実ヲ得タルモノナリ、宜シク前
後ノ説ト並考スベシ、

四〇〇 藩達 (長防開戦ニ就テ)

今般京師變動朝敵追討之一挙ニ就テハ、既ニ

皇国ノ乱階ヲ顕シ、追々御大事ニ相及候儀ト案中、加

之外患モ不日ニ差迫候様ニテ、自然

天朝御危難之御場合ニ至候得ハ、兼テ 中将様御内命被

遊 御承知候得ハ、御出馬之 御内慮候処、無御扱被

御願進趣有之、

太守様御出馬被遊度候条、諸御手当向行届候様可申渡

旨 御沙汰被為 在候、此旨表方へ致通達、奥掛御勝

手方へモ相達、諸郷・私領へ可申渡候、

八月五日

丹波・摂津
龍衛・但馬

四〇一 馬關戦争

覚

一今朝五ツ時比、壇ノ浦辺より飛船式艘乗出し、異船碇

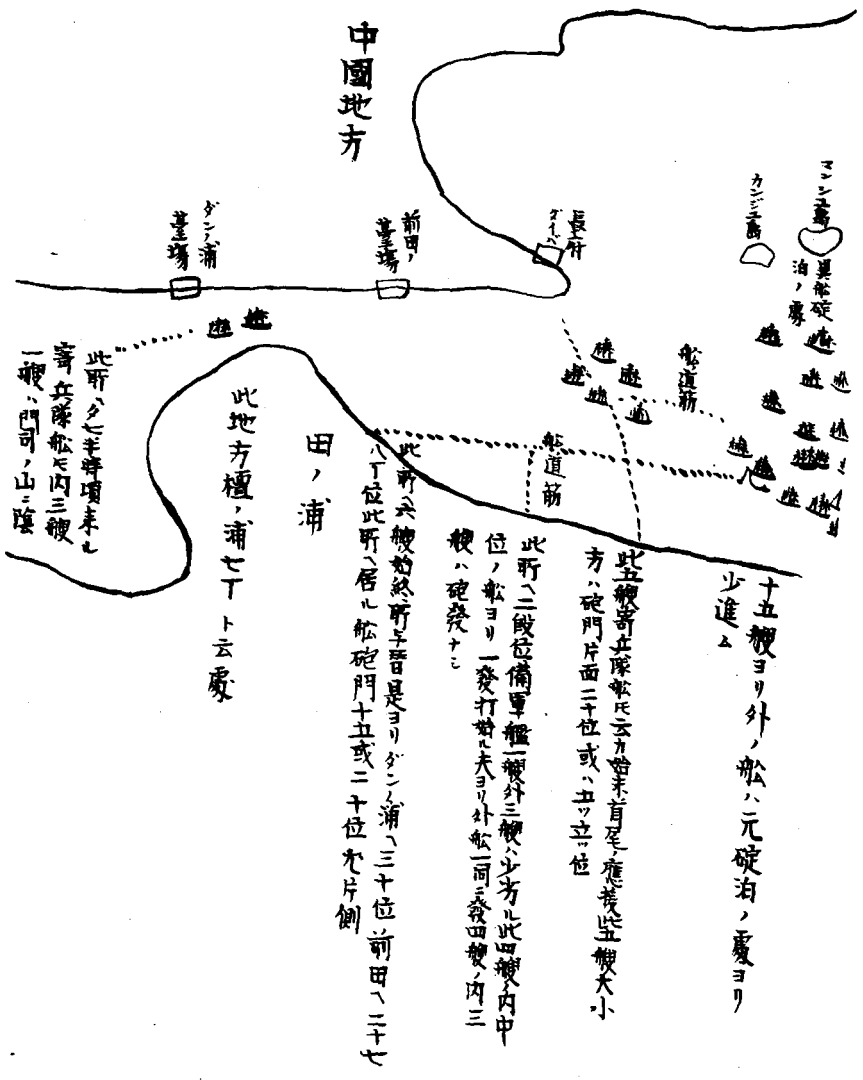
泊之処江寄、二三輩も昼九ツ時比、右式艘之船元之方

江帰帆仕候事、

但

此間応接仕候事と奉存候、

中國地方



十五艘ヨリ外、船ハ元碇泊ノ處ヨリ少進ム

此艦奇兵隊艦云カ始末首尾應着此艦大小方ハ砲門片面二十位或ハ五ツ立位

此町二艘位備軍艦二艘外三艘ハ少方此四艘内中位ノ船ヨリ一發打撃ハ夫ヨリ外船二艘同ニ發四艘ノ内三艘ハ砲發ナシ

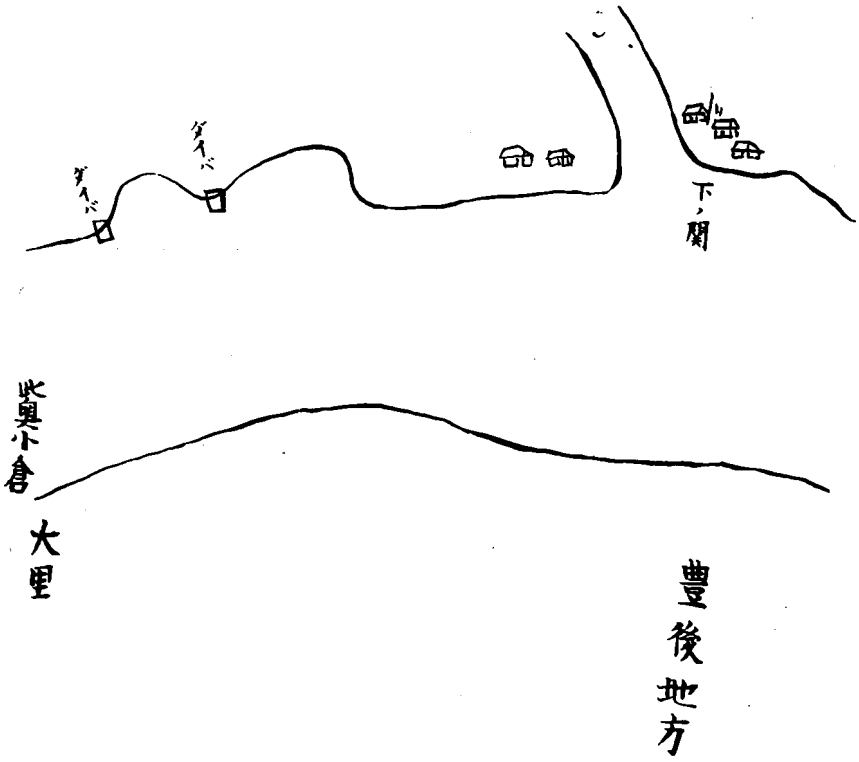
此町六艘始終野子皆是ヨリ丹波浦ノ三十位前田ノ二十七位此町ノ居ル松砲門十五或二十位尤片側

田ノ浦

此地方檀ノ浦七ト云處

此所ハ之半奇蹟未シ奇兵隊艦ノ内三艘一艘ハ門司ノ山ニ墜

元治元年 (1864)



一 昼九ツ比頃より頻ニ蒸氣相立、九半時比ニ異船左右ニ分れ、豊後地之方江六艘、田之浦より五六町程ニ居候、中国地方長府之方江五艘横ニ并、昼八時分過候比、異船之内より砲発、夫より左右一同ニ打立申候事、

一 田之浦方江並候船、一番はイキリス、二番フランス、三番オランダ、四五六番はイキリス、長府之方江寄申候船は寄兵船隊トモ申候歟、不残イキリス船と見受申候得共、自然は間違も難計奉存候、

一 此節各国渡来之船は、イキリス船拾二艘、オランダ式艘、フランス式艘、アメリカ式艘此分驗見損も難計御座候、巨細は帰着仕候上奉申上候、都合船数拾八艘ニ御座候、

一 夕八時過より双方之砲発烈敷、七ツ時比ニ相成候ては少寛ニ相成申候事、

一 台場より砲発も始二十発くらひ、其比迄は砲数多く、七ツ時比ニ相成候ては、前田辺之台場絶て砲発いたし不申、何れ台場破候事と相見得申候、

但

異船より前田台場を見当ニ打申候間、暫時ニ破申

候、

一 異船四艘並居候内より打始申候て、つるべ放チニ打立申候、台場江砲玉落候音或は中発台場之方、言語同断之事ニ御座候、

一 台場より打申候砲丸は一ツも異船ニ当り不申不慮ノ形況、顯然タリ、実ニ残念千万之事ニ御座候、彼是と長州之事申唱候得共、今日ニ至り歎息仕候事ニ御座候、

一 前田台場江夕七半時比より烟立居申候処、後火之手揚申候、此家砲術練習之稽古小屋ニ御座候由、七間ニ五間之家焼失、外ニ暮少前ニ火菜ニ火移申候事、

一 今夕八時比より打始、暮迄異船より砲発無絶間御座候事、

一 異船より打申候砲玉数凡三千玉數三千ハ三百ノ誤ナラン、見物ノ人軍事ヲ不知ナラン、故ニ如斯之見当仕候事ニ御座候、

但

本行砲丸数私老人之見究ニも無御座、薩藩園田・土持園田彦左衛門・土持平八ヲ云フ、此二名兩人も同様見当ニモ檢視ノ為前頃ヨリ小倉ニ出張シタリ御座候、

一 台場より砲丸は、数千千ノ數モ多キニ過ク不足ニ御座候と見当仕

候事、

但

此積も前段之通ニ御座候、

一異船其俣門司山浦手ニ碇泊仕居申候事、

右件之次第は、帰国之上巨細奉言上候、甚差急文字

も分兼申候次第、重畳御断奉申上候、以上、

八月五日

阿部野権平

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

四〇二 薩州借り船下ノ關近海ニ難船ノ顛末

一筆致啓上候、此度私守護ヲ以長崎へ漕廻被仰付テ、薩州船并ニ御借船共先月廿八日川口迄乘り出シ、風折悪敷ニ付、川口ニテ滯船、翌廿九日出帆、代ヶ濱浦ニ繫船、過ル朔日同所出帆、前大津大泊リへ繫船、其後難風高浪ニ相成リ、出帆難相成ニ付滯船、同三日漸穩ニ相成候ニ付、卯ノ中刻出帆仕順々颯下リ候処、大浦沖通ヨリ風雨手強忽高浪ニ相成、誠ニ古今稀ナル大時化ニテ、類船モ數艘御座候処、孰モ及破難船ニ候様子ニ相見、薩州船至テ氣遣敷油断不仕様ニト時々声ヲ掛ケ、供々氣ヲ付候得共、所詮漕綱短ク、本船ニ引込ミ候様相見へ候ニ付、梶ヲ取種々アセリ候内、薩船真横ニ相成、高浪打込ミ水船ニ相成候ニ付、乗組中命ヲ限り相働キ候様子ニ御座候処、其後又々引続キ高浪打掛ケ候故、乗組御雇舸子之内須佐浦

源右衛門・百合松・黄波戸浦徳五郎・正兵衛之四人ノ者共海中へユリ落サレ行衛相知不申、其上本船へ高浪頼リニ打込ミ、風波弥増烈敷、勿論繫留難相成至テ危ク次第、夫故右四人之者助方之儀不任手式次第ニ候、漸大浦口俵島風影へ漕付仕、薩州船乗組之御手舸子久次并殘御雇舸子之者共、孰モ本船へ乗移ラセ候テ、薩州船ハ碇ヲ入浮ヲ付置、本船之儀ハ阿川浦へ乘廻シ仕、夫ヨリ早速彼地ヨリ漕船ヲハ差出サセ、薩州船之儀モ阿川浦へ漕込ミ仕ラセ、右ニ付テハ本船之儀ハ、私ヲ始惣乗組中ニ至迄都合無難ニ罷在申候、且薩州船乗組之久次其外殘御雇舸子之者共、無難ニ罷居候処、彼船之儀ハ水船ニ相成候故、船具ヲ始銘々着類手道具等ニ至ル迄本体流失、シカシ薩州船之船具類ハ本船へ積込ミ候ニ付、聊別条無御座、依之流失之船具荒増詮義仕候テ、別紙付立差送り申候、早々調被仰付度奉存候、尚海中へ落込ミ候御雇舸子四人之者共モ、尋方之儀ハ早速近辺浦々へ廻状差出候処、翌四日須佐浦百合松死骸阿川浦手長磯へ打上ケ、同浦源右衛門儀ハ阿川浦硯磯へ死骸打上ケ候段届出候ニ付、早速須佐浦之者見分シテ差越候処、人柄相違モ無之段申出、其後黄波戸浦徳五郎ト申者俵島へ游上リ候ニ付、大浦之者

罷出助歸り無難ニ罷居候段、大浦庄屋ヨリ届出、同五日
本船へ連越仕申候、今一人黄波戸浦正兵衛ト申者儀ハ、
イカゞ相成候哉一向行衛相知不申、素ヨリ前断四人之者
共高浪ニテ海中へ打込レ候次第ニイテハ、本船ヨリ見
受候事ニハ御座候得共、尚又為念船中ニテ何ソ不折合之
筋共ハ無之哉ト、重疊相糺見候へ共、毛頭左様之儀無御
座、偏ニ否様悪敷荒波ニユリ落サレ候由申事ニテ、難船
之次第ニテハ全御不審之儀ハ更ニ無御座候、時節トハ乍
申、不慮之天災扱々恐入候次第ニ御座候、委細ハ御手舳
子伊右衛門ヲハ差返シ候ニ付、現場之様子得ト被聞合候
様奉存候、先ハ前断成リ掛リ為御届上如此御座候、恐惶
謹言、

山本新右衛門

忠

大

八月五日

追テ薩州船乗組御雇舳子之内、海中へユリ落サレ候黄
波戸浦徳五郎儀ハ、俵島へ游上リ助命仕候ニ付テハ、
船作事等相成候上ハ、直様長崎へ罷越度段申出、心得
神妙之儀ニ奉存候、尚須佐浦御雇舳子四人・黄波戸浦
同四人之儀ハ、着類其外流失、其上銘々水船へ乗付居
簀板其外ニテ手足ヲユリ打レ、追々痛出来働難相成ニ

付、長崎へハ得罷越不申、何トソ入代リ被 仰付候様
ニト返テ相断申候ニ付、此段御物筋へ被 仰出、早々
入代リ相成候様被仰付度奉存候、旁之趣 御聞合、何
モ早々相運ヒ候様被成御沙汰可被下候、以上、

井上與四郎様

四〇三 馬關景況在京高橋縫殿報告

四〇三ノ一

当月五日、長州江英国船拾式艘、阿蘭陀船式艘、佛郎
西船式艘、並米利加船式艘都合拾八艘渡来及戰爭候趣、
肥後藩中小倉江被差出置候向より申来候由にて、別段
絵図面迄三通高崎伊勢正風 方江為相知候段申出書写差
上申候、右付ては、おのつから巨細之形行は園田彦左
衛門等より御届可申上筈御座候得共、召列候足軽急ニ
て差返、早々此段御届申上越候条、被達

御内聴候儀は何分も宜御取計可被成候、以上、

但

長岡丈之助様御事も、依

御召当月廿日比、御上京之由承得申候、此段も為

御心得申上候、

子 八月七日

高橋縫殿德種

喜入攝津殿高久

川上式部殿美久

熊本より

四〇三ノ二
右高橋カ報告左ノ如シ、

一筆奉啓上候、益

御機嫌能被遊御座奉恐悅候、然は別紙覚書今日見物仕
候丈奉言上候、誠ニ今日之事筆紙ニ難奉申上上次第二御
座候、今晚直ニ早打ニて罷帰可申筈ニ御座候得共、昨
夜承申候稜も御座候間、明日之首尾迄見聞仕、直ニ駈
歸申候間、左様思召被上可被下候、昨夕小倉藩上條一
兵衛列同藩之役々打揃、異船江乗入談話共仕候事も承
申候、此度渡来之訳は昨年以來度々

幕約外國約条ヲ云フ之妨御座候付、横濱ニテ

幕府江御届申、先月廿一日同所出帆、只今渡来之由異
より答申候処、當時

皇国之御所置付之砌ニ付、先退散いたし候様申聞候処、
今度通船いたし候共、若砲発無之候ハ、上陸いたし
大砲共取集、横濱江持行

幕府江差出申筈、夫迄之処深入は不仕と答申候由、左

候て是非赤關赤關ハ赤間關ヲ云フ迄焼払積ニ御座候、且又未夕外
ニヒク嶋之方へ台場三ツ御座候付、何れ明日は替勤御
決之事と奉存候、模様次第急駈帰巨細奉言上候間、左
様思召被上可被下候、何も差急荒方之儀迄奉言上候、
則別紙(四五・八・四五九頁にあり)絵図共奉入御覽候、差急相認乱筆御免可被下候、
恐惶謹言、

八月五日

阿部野權平

井上加右衛門様

当月十五日夜九ツ時小倉仕出、

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

四〇四 長州へ夷船襲来及戦争候形行小倉滞在

園田彦左衛門聞合書写舊邦秘録

一夷船襲来且去ル八月五日於赤間關長州砲戦ノ次第、兩
度御届申上候処、一昨六日ヨリ昨七日迄戦争有之、兩
日見合之形行左ニ申上候、

一小倉領両日久保浦ヨリ大刀ノ浦上ノ間、先日通り夷船
拾八艘碇泊、然ニ一昨六日早天、壇浦隱台場ヨリ大砲
十四五發打掛、砲合七八町位モ有之、右ノ内一發夷船
表先へ打当候得共、聊相損シ候共見受不申、直ニ夷船

ヨリ数発打掛、夫ヨリ六艘前田台場ノ方へ乗付ケ、バツテラ拾艘追々多人数上陸ノ節、長兵大谷越へ山合ヨリ小銃打出候処、上陸ノ夷兵直ニ備ヲ一行ニ立責上リ、良時ヲ移シ砲戦、長兵ニモ至極血戦ト見受候処、終ニ長軍角石台場ヨリ大ニ敗走致シ、〔右カ〕大戦ニテ双方手負・死人相応可有之、夷兵ニハ前田台場へ引取り、其節同所ノ陣屋并ニ人家廿六軒不残焼払候、夫ヨリ右ノ台場ニ居付候大砲ヲ奪取テ、バツテラヨリ本船へ積移シ、右上陸ノ人数千人位モ可有之、前田台場内へ嚴重ニ備ヲ立テ居候、又外ニ英佛二艘壇ノ浦台場地方へ横付ニ致シ追々上陸、町家後へ人数繰出シ其勢甚敷、長兵立向フ事能ハス都テ山ヲ伝へ逃行ヲ追付致シ、長兵相応死亡致シ、外夷ハ本ノ台場へ引取り据付候砲器ヲ取り本船へ積入レ、又々山手ヨリ長兵相見へ、外夷ハ相圖ノ笛ヲ吹キ立、則備ヲ立替へ谷合へ責上リ、其節長ノ伏兵起リ互ニ打合、山陰ニテ慥ニ相分リ不申候得共、夷人モ相応死亡候半、然トモ少モ猶予不致、小銃ヲ以テ打合、終ニ長軍敗軍、又夷兵備ヲ替へ下ノ關町へ差向、右ノ台場ヨリ町口迄八町ト申処ノ由、其間夷兵二行立ニテ引続キ寸尺ノ地モ無之、外ニ町口へ長府藏屋

〔敷カ〕式番所等有之、外夷何カ疑ヲ掛候体ニテ、一町計ノ処ヨリ小銃数発打込、其節バツテラ六艘へ拾人計大砲乗セ付、右海岸へ廻リ、藏屋敷へ数発打込、疑相晴候哉直ニ責入、諸所へ砲發致シ候得共、長軍不見得、本ノ台場へ引取り旗ヲ立テ総勢ヲ纏メ扣居候、一バツテラ一艘へ兩人乗付赤間關測量致シ候処、早汐ニ引カレ候体ニテ、彦島ノ方へ流レ行キ候ヲ、下ノ關ヨリ長兵十人計小船へ乗付漕付ケ、直ニ右兩人ヲ打果シ船ハ彦島へヒキ行キ、外夷ニハ少シ山越ニ相成候ニ付、如何様右次第氣ニ不相付候哉夫成召置候テ、本船ヨリハ終日下ノ關人家并諸所へ大砲打込ミ、關町家數十軒焼失、然ル折大谷越ヨリ前田台場近辺村山へ又々長兵相見へ、同所ノ陸兵都テ海辺三丁計ノ間一行ニ備ヲ立テ、本船ヨリ大砲、陸兵ハ小銃甚敷谷合等へ打込、其節〔乙〕大砲戦ハ暫時ニテ、是又長兵敗走致シ、夫ヨリ外夷山中へ責上リ、角石陣屋ヲ焼払ヒ、於同所テモ打合有之向ニ砲声相聞へ、夜ニ入候得共不引取、左候テ壇浦陸兵ハ、暮前本船へ乗付ケ、二艘共ニ前田台場前へ碇泊致候、

一夷船壹艘前田台場海岸へ乗付、砲器類積入候砌、引汐

相成候、如何様淺瀬へ乗据候ヤ、バツテラ数艘相付御シ方致候得共、昨日迄浮言上方不申余程心配ノ向ニ相見へ、全ク砲玉ニ当リ右ノ通りニテハ無之、引汐ニテ乗居候儀相違無御座候、

一昨七日四ツ時分ヨリ下ノ關又ハ諸所山中へ追々大砲打込候得共、長兵全ク出合候儀無之、尤台場近辺諸所へ火薬庫有之、一々焼払、昼過下關町家へ大砲五拾二発打込、町家打崩候得共不致焼亡候、然処暮前ヨリ夷船四艘ハ下之關町下江碇泊、拾四艘ハ本ノ通り雨ケ久保浦へ同断碇泊、決テ今日ハ下ノ關ヲ焼払ヒ、尤彦島へモ台場ニケ所有之候ニ付、於彼方モ砲戦可有之ト奉存候、左テ小倉藩ヨリ昨日外夷へ承り候処、長藩凡三百人余、外夷ニハ五人戦死致シ候旨相答候由、人伝ニ承り候、未慥ナル儀ニモ無之、追々慥ニ相分り候上、委細ノ儀ハ追テ可申上候、

右ハ一昨六日迄兩日戦争ノ次第、小倉門司ノ浦ト申ス処へ差越、凡七八町ノ処ヨリ見聞仕候処、右ノ通御座候、

八月八日

小倉滞在

園田彦左衛門

四〇五 長崎在勤汾陽次郎右衛門戦況報告同上

四〇五ノ一

英商カラハヨリ承候趣ハ、昨日申上候通御座候、昨夜猶又英コンシユルガラル方へ、堀壮十郎差遣承合候処、

少々異同モ御座故猶又申上候、(候脱力)

死亡人数十七人、内士官式人、余ハ都テ戦卒ニテ、手

負凡六拾人余御座候由、

陸兵五百人、外ニ船卒等千五百人、都合式千人上陸為

致候処、長州ヨリ夜打ヲ仕掛、互ニ鉄砲打合、此時ニ

死亡拾人位モ御座候由、刀鎗ノ疵受候者ハ老人モ無之、

都テ鉄砲疵、内老人ハ死亡之由、

山蔭ニ屯居候長州勢へ鉄砲打掛候処、都テ何方へカ退

散、其行方ヲ不知、

既ニ下ノ關可焼払ノ処、長州ヨリ和談相成候付、下ノ

關ハ其俣ニテ相替儀無之由、

掠取候大砲八拾挺ハ、園田カ届書ニ六十三挺ト記シタルハ非ナリ、ウキ

皆軍艦へ積込候由、ンリドガ日記ニ八拾挺ト記ス、之ヲ確實ト認ム

右ノ通承得申候、今日幸便御座候付、猶又為御覽合

申上候、以上、

長崎在勤

子八月十三日

汾陽次郎〔光通〕右衛門

御側役衆

追テ品川藤十郎ヨリ今朝書面差出申候付、是又差上申候、

四〇五ノ一
右品川カ書面左之如シ、

当八月五日ヨリ十日迄テ長州一件荒増之事

当八月八日、長州家老英吉利船中へ罷越、和睦ノ方ニ談判イタシ呉候ハ、向後外国船同所海峡通行致シ候トモ、決テ放発等イタス間敷旨申出候由、然ルニ何等ノ訳ヲ以テ是迄右様砲発イタシ候哉、英ノ方ヨリ相尋候処、右ハ京都并江戸大君ノ命ニ因テイタシ候儀ニ有之、此方ニヲイテ決テ放発ノ存寄ニハ無之由返答有之、左候へハ其國而已ニ命令ノ下ル訳モ有之間敷、外諸侯ニモ其命無之候テハ不相叶処、外諸侯ハ右様ノ儀無之、其國ノミ右様イタシ候次第無之弥、左様ニモ候へハ、定テ命令状可有之、是非一見イタシ度旨英ヨリ申聞候処、何レ一見為致可申旨ニテ、其日ハ退船イタシ候由事、尚当月十日、長州家来船中ニ参リ右ノ応接有之候処、右ハ全ク間違ニテ、太守ノ命ト申事ニ被申聞候由、然

処左様時々相違有之候テハ不都合ニ付、是非太守ニ面会イタシ度、一体太守ハイツレニ被在候哉相尋候処、萩ニ罷在候段相答候趣、萩迄ハ幾日路ニテ通行出来候哉相尋候処、二日路ノ由返答有之、左候ハ昼夜ニテ日數三日ナレハ充分ニ可有之ニ付、十三日迄相待可申間、其日ニハ是非下ノ關迄太守出張相成度、此方ヨリモ上陸面会可致旨申出候処、萩迄山路等ニテ夜中通行出来不申ニ付、十四日迄ナラデハ其儀出来兼候ヨシ返答有之、然ラハ十四日迄相待候付、其日無相違面会有之候様イタシ度旨申聞候趣ノ事、

右応接ノタメ夷船式艘程相殘、跡船ハ兵庫開兵庫開キトハ開港ヲ云フキトハ、キノタメ大坂へ赴候由ノ事、

夷人水夫壱人端舟ニ乗り、下ノ關ノ方へ潮先ニ流サレ候処、長州方ヨリ小舟ニ乗付、右水夫壱人相手トシテ四五人ニテ散々殺害ニヲヨヒ候由、然ニ右応接中ニ其儀ヲモ申出、殺害イタシ候本人ヲ差出、且端船モ新ニ造作イタシ呉候ハ、格別其儀不相叶ハ其タメ壱万ドルラルヲ償ヒ候様申出候趣ノ事、

下之關人家文ケハ焼残リ居候由、然ニ応接中若此方ヨリソム文ケノ儀難被聞及候ハ、下ノ關ヲ尚放火致

スベクト申出候ヨシニ候事、

五日八ツ半時比、又既ニ戦争ニ及ハントスル時、豊前ノ沖ヨリ四五艘ノ日本商船、下ノ關方へ落落ストハ下リ潮ニ乗リ行クヲ云フ

スヲ、英船ヨリ見懸ケ、直ニ端船ヲ贈リ、不残帆ヲ卸サセ相止メ候由、右ハ全ク輕我等ニ無之様ノ為ナリ、然ルニ右日本船ノ内壹艘ハ、石炭ヲ積請居候ヨシノ処、

是ハ相応ノ代価ヲ払ヒ、右石炭ハ不残英ノ方へ取入候趣ノ事、

戦争中長州方ヨリ打候玉数百発程異本ニ數百ト記シタリトモ及ヒ候ヨシ、尚奪取ノ内ニハ木筒并石玉等ヲ以テ知ルニ

足レ有之候趣ノ事、

右長州へ罷越候外国船ハ、不残ニテ拾七艘ノ趣ニ有之、壹艘毎ニ壹人宛ハ、日本人乗組横浜ニテ雇入タル日本人、即水先ナリ居候様ニ有之候事、

昨十二日入港ノ佛船ハ、分ケテ下ノ關相開ケ候儀、当所へ注進ノタメ也、且右之次第一先本国へ為知ノタメ、当所ヨリ直ニ上海へ向ケ昨夕方出帆イタシ候事、

右之趣、奉行所ヨリ公儀蒸氣船乗組ノ内、田中六之助・戸瀬正平ト申者、当朔日当港渡来ノ英軍艦コツケツトルニ乗組セ、彼方へ内密差遣有之候処、昨日

入港ノ佛郎西軍艦ヨリ立帰り、同人等ヨリ直ニ承候次第荒々御含マテ申上候、以上、

四〇六 (小倉出張園田彦左衛門馬關戰況見聞届

書同上)

長州於下之關外夷砲戰見聞之形行追々申上置、去ル八日後之次第、左ニ申上候 (園田彦左衛門ヨリ)

一去ル八日朝五ツ時分ヨリ、夷船四艘長府領彦島近ク乘来、同所台場江大砲三十發位打掛候得共、彼方ヨリハ全不致砲發、折柄台場脇入海之処ヨリ、凡拾式三反帆之大和船一艘出帆、陣笠ヲ冠リ候者共多數乗組居候哉ニ見受居候処、十町計之処ニテ直ニ夷船ヨリ大砲四發打掛候得共、船前後江落、船ハ追手ニテ無程島蔭ニ相成、同島之内南風泊之方江乘行、尤同所台場之儀ハ、兼テ三百五拾人出張居候由御座候得共、右通不砲發候付テハ、右船ヨリハ勿論、前夜下之關辺江決テ引取候儀相違有マシク、左候テ外夷右台場江追々上陸旗ヲ立、夫ヨリ居付之大砲都テ奪取、終ニ陣屋一ヶ所、人家拾軒位并火藥等段々焼払、申刻下之關町家前江碇泊、其日ハ夫迄ニテ砲發等無御座候、

一右同日下之關ヨリ小船一艘、小倉田之浦碇泊之夷船江差越候由相聞得、何様之訳ニテ右通之事哉為尋問、小倉藩兩人、同九日夷船江乗付承候処、長藩高杉作六戸刑馬・杉尾徳之助参り、公義依御命令去夏通船江砲撃ニ及候処、此節数艘渡来及砲戦候得共、中々難敵、就テハ和ヲ結ヒ呉候様申候付、夷人ヨリ御命令ニ付テハ、何ソ証拠相成候訳ニテモ可有之哉、左候ハ、見届度ト之趣申入候処、墨付等モ有之、山口表江掛合之上、明後十日昼時分可致持参ト之事故、其通取究置候由承届、九日ヨリ砲発相止、和睦之姿ニ相見得候得共、其後之次第旁分兼候処ヨリ、昨十二日小倉藩又々乗付尋問イタシ候処、長藩毛利出雲・杉尾徳之助・畑野金吾・渡邊庫太、去ル十日攘夷仰出書并国主ヨリ之直書一封持参内蔵太イタシ候付、開封ニ及候処、砲機不相揃逆モ難致敵对、此上ハ和議相乞候外無之文言之書面ニテ、印形モ無之、不承知故差返シ、イツレ取次ニテハ、速ニ弁兼候付、大膳大夫父子間江於下之關提督ヨリ可致直談、左様取計候様申答、使者差返シ置、就テハ縦令此節之一条和議相整候テモ、形行政府江申出、彼御方御談判相済候迄ハ、台場取扱候儀ハ不相成、尤下之關町家ヲ燒

払候代リニハ金子何程可差出哉、勿論各国申合之上軍艦数艘差向候事故、オノツカラ失脚金モ可差出、併員數之儀ハ、追テ此方ヨリ可申付段モ為申置由御座候得共、昨日迄ハ何分返答無之由、左候テ去ル五日・六日砲戦之節、外夷戦死・手負人都合三拾六人之由、長兵ハ多人數討取候得共、何程ト申儀不相分、且台場居付之大砲都合六拾三挺取揚置候ト為申由、応接イタシ候小倉藩茂呂三郎平ト由者ヨリ直ニ承届、夷船今日迄モ都テ滞在仕、長州表評議区々之由相聞得候得共、慥成儀相分不申、両三日中ニハ何分相決可申候間精々承合、何分共相決次第罷帰形行可申上候得共、其内是迄見聞之次第右通御座候間、此段御届申上候、以上、

子八月十三日

小倉滞在

園田彦左衛門

元治元年 (1864)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年八月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数九八枚)の記載あり〕

目録

久光公照國神社御祭文

長州征伐出軍人名

舊邦秘録

討手ノ諸侯

島津又六郎以下長州征討総督人名

長州征伐出陣名簿

小松帯刀御褒賞

木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔本藩国老小松帯刀於京師長州処分意見上申〕

一橋慶喜公褒賞書

〔公上幕府ヨリ〕

本藩ヨリ幕府へ親書

長州征伐出軍期日其外達書

一橋中納言殿ヨリ褒賞

中川修理大夫殿ヨリ使者ヲ以御送り相成候目錄

川上助八郎所有刀劍二題シ久光公之御作

水戸烈公ヨリ照國公ニ送レシ書牘

照國公ヨリ水戸烈公へ送ラレシ御書

照國公ヨリ伊達宗城公へ答書

四〇七 久光公照國神社御祭文

公弟久光七年祭ヲ管ム文ニ曰ク、

照國大明神者、故薩・隅・日三州太守兼領琉球国、

贈中納言從三位源齊彬〔公之〕之靈也、神克修徳、尊王

朝、敬幕府、忠貫日月迄比易質憂世、將□徵余久光

有所顧命、故銜遺託文久二年趨京及東繼兄誠忠建白

公武一和、

皇国厚蒙 叡感、幕府亦褒賞、而十二月贈官、如右

寔特恩也、因及嗣侯少将茂久議請崇神社、越翌五月神祇管領卜部良義服其精忠、荐授神宜特踰例規、陞右神号、於是創社於城隣南泉門外、命鑄一鏡刻概於陰崇神体迎季祭祀焉、伏願神威明赫益輝島邦永鎮、皇國邦内寧謐子孫昌盛、士励文武、民各勤業莫歲不熟、以至無窮、元治甲子八月穀旦、從四位上中將兼大隅守源久光謹書、

四〇八 長州征伐出軍人名

四〇八ノ一
八月廿五日達

長州征討出軍人員左ノ如シ、

- 先陣總督 島津 又六郎久明
- 全副總督 島津 主殿久顯
- 一陣惣物主 島津 隼人久芳
- 一番組物主 島津 刑部
- 二番組物主 仁禮仲信 舍人久直
- 三番組物主 島津 織之助盛昌
- 四番組物主 名越 左源太種秀
- 五番組物主 高橋 要人
- 六番組 大砲隊物主 島津 登久

諸郷物主左ノ如シ、

- 大口 山田 司
 - 末吉 川田 掃部
 - 田布施 喜入 雄次郎
 - 國分 川上 左大夫
 - 帖佐 伊集院 喜左衛門
 - 大崎 益滿 與右衛門
 - 高山 三原 傳左衛門
 - 清水 武宮 十左衛門
 - 高城郡高城 長束 十郎
 - 志布志 福崎 助七連季
 - 阿多 柳 半之進
 - 伊集院 中軍 島津 隼人
- 右ハ今般長州御征討ニ付、出軍被仰付候条可申渡候、
八月廿五日 但馬川上

四〇八ノ一
一番組

物主

島津 刑部

談合役

(17)

旗預

(マ)

什長

(十行空目)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

運漕方

(マ)

宿割方

(マ)

二番組

医師

(マ)

物主

仁禮舎人

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行空目)

斥候

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

三番組

玉葉方	(マ)
小荷駄方	(マ)
宿割方	(マ)
運漕方	(マ)
医師	(マ)
物主	(マ)
談合役	(マ)
旗預	(マ)
什長	(マ)
(十行案内)	
斥候役	(マ)
太鼓役	(マ)
貝役	(マ)
旗指	(マ)
兵糧方	(マ)
玉葉方	(マ)
小荷駄方	(マ)
宿割方	(マ)
運漕方	(マ)
医師	(マ)

四番組

物主
島津織之介

談合役 (マ)

旗預 (マ)

什長 (マ)

斥候 (十行空目)

太鼓役 (マ)

貝役 (マ)

旗指 (マ)

兵糧方 (マ)

玉葉方 (マ)

五番組

小荷駄方 (マ)

宿割方 (マ)

運漕方 (マ)

医師 (マ)

物主 (マ)

談合役 (マ)

旗預 (マ)

什長 (十行空目)

斥候役 (マ)

六番組

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

物主

大砲隊兵士御城下

談合役

(マ)

島津

登久

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

十行空目

斥候役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

大砲隊全上

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行空百)

斥候役

(マ)

貝役

(マ)

白砲四挺
携白砲二挺

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

什長

(十行空百)

玉薬方

(マ)

大口

兵糧方小荷駄方承

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

玉粟運漕方

(マ)

医師

(マ)

物主

山田 司

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行空白)

斥候役

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉粟方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

末吉

物主

川田掃部

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行筆白)

斥候役

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

田布施

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

物主

喜入雄次郎

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行筆白)

斥候役

(マ)

太鼓役

國分

物主

川上左大夫

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

運漕方

(マ)

医師

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(十行笠目)

斥候役

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

帖佐

宿割方

〔マ〕

運漕方

〔マ〕

医師

〔マ〕

物主

伊集院喜左衛門

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

什長

〔十行空白〕

斥候役

〔マ〕

太鼓役

〔マ〕

貝役

百引

旗預

〔マ〕

兵糧方

〔マ〕

玉薬方

〔マ〕

小荷駄方

〔マ〕

宿割方

〔マ〕

医師

〔マ〕

物主

益満與右衛門

談合役

佐竹直之進

旗預

〔マ〕

什長

〔十行空白〕

斥候役

〔ママ〕

太鼓役

〔ママ〕

貝役

〔ママ〕

旗指

〔ママ〕

兵糧方

〔ママ〕

玉薬方

〔ママ〕

小荷駄方

〔ママ〕

宿割方

〔ママ〕

医師

〔ママ〕

高山

物主

三原傳左衛門

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

什長

〔十行空白〕

斥候役

〔ママ〕

太鼓役

〔ママ〕

貝役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

兵糧方

〔ママ〕

玉薬方

清水

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

医師

(マ)

物主

武官十左衛門

談合役

(マ)

旗指

(マ)

什長

(十行空目)

斥候役

(マ)

太鼓役

(マ)

高城郡高城

貝役

(マ)

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

医師

(マ)

物主

長束十郎

談合役

(マ)

旗預

〔マ〕

什長

〔十行空白〕

斥候役

〔マ〕

太鼓役

〔マ〕

貝役

〔マ〕

旗指

〔マ〕

兵糧方

〔マ〕

玉薬方

〔マ〕

小荷駄方

〔マ〕

宿割方

〔マ〕

医師

志布志

〔マ〕

物主

福崎助七

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

什長

〔十行空白〕

太鼓役

〔マ〕

貝役

〔マ〕

旗指

〔マ〕

兵糧方

〔マ〕

玉薬方

〔マ〕

高岡

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

医師

(マ)

物主

柳 半之進

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

十行望目

斥候役

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

阿多

旗指

(マ)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方

(マ)

医師

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

〔十行空百〕

斥候役

〔マシ〕

太鼓役

〔マシ〕

貝役

〔マシ〕

旗指

〔マシ〕

兵糧方

〔マシ〕

玉葉方

〔マシ〕

小荷駄方

〔マシ〕

医師

〔マシ〕

野戰砲十二挺ニホント砲

白砲四挺二十冊
携白砲二挺

右銃隊一隊ニ野戰砲一挺宛附属ス、白砲ハ遊軍ニ備
フ、

什長

〔十行空百〕

斥候役

〔マシ〕

玉葉方十六人

小荷駄并運漕方十六人

右ハ今般長州御征伐ニ付、出軍被仰付候条、万端総督・

副総督ノ可受指揮候、

八月廿五日 但馬川上

四〇九〔舊邦秘録〕

此節長州御征伐ニ付、御城下六組人数並大砲隊并諸郷
十二ヶ郷、一ヶ郷一隊宛大砲・白砲等附属ニテ被差出
候ニ付、兼テ被定置候御軍賦之通、兵糧・玉葉ハ勿論、
人馬手当並船々用意等於内々無手抜取計、総督・副総
督江届出候様可致候、

但兵糧之儀ハ兼テ被定置候通、白米並味噌等三十日
分一隊毎ニ相備、其余ハ戦地ノ模様ニ依リ差続ケ、

又ハ出軍先ニ於テ臨機ノ手当有之賦ニ候、玉葉之儀ハ被定置候員數ニテ、追々蒸氣船ヲ以テ可差続候、

右之趣総督・副総督並諸隊物主へ申渡、向々へモ早々可申渡候、

八月廿六

但馬川上

四一〇 討手ノ諸侯

此節京都ニテ長州者共等ノ争戲、既ニ乱階ニ相成トハ何事ソ、此前ヨリ京師ニヲヒテ、何者共不知無科人ヲ誅戮シ、事々敷犯罪ノ科ヲ相知シ、殊ニ 公武ノ間合体ト名ヲ付、色々ト名ヲ立乱ヲ好ハ、是乱階ノ始也、此節ハ段々事ヲ醸出候筋ニ相当リ、諸侯一円忠義ノ純粹ナキ故也、就中外患ノ憂ハ去ル丑年ヨリ段々ト相迫リ候訳ニ付、現事差見得、何ノ外患ノ模様杯トイフ様ナル事テハ無之、殊ニ
天朝御危急ノ場ナラハ、御内命所テハ無之、是程ノ御危急ハ日本開闢初テノ事ナラン、

九州討手
一ノ先

松平修理大夫
(黒田斉博、筑前藩主)
松平美濃守

二
松平修理大夫
(藤原、久留米藩主)
有馬中務大夫
(薩摩、柳河藩主)
四
立花 飛驒守

長州御征伐被 仰出候ニ付テハ書面通相心得、去月廿四日相達、国許へ揃置候人数早々繰出シ、当月下旬ヨリ来月十日ヲ限り筑前国へ参集、差図相待可被申候、尤自彼妄動致候ハ、不得差図攻入誅伐可有之候、

但人数ノ多少家之分ニ応シ選兵強卒差出、雑人ハ可

成丈省可被申候、尤大小之船ハ兼テ用意致シ可被

置候、

八月廿五日

右公義ヨリ仰出也、

四一一 島津又六郎以下長州征討総督人名

先陣総督

島津 又六郎

右此節長州御征伐ニ付、右ノ通被仰付候条、諸隊へ指揮行届、機先ヲ察シ、勝利ヲ全シ、威武ヲ不失様可相心得旨被仰付候、

先陣副総督

島津〔久壽〕殿

右此節長州御征伐ニ付、右ノ通被仰付候条、先陣總督
へ申談、諸隊へ指揮行届、軍謀不誤様可相心得旨被仰
付候、

右ノ通

御直被仰付候、

四二二 長州征伐出陣名簿

四二一ノ一

一陣總物主

島津隼人

右此節長州御征伐ニ付、伊集院一組ノ人数被召付、出
軍被仰付候、

右ノ通今日被仰付候条向々へ申渡、地頭・用達へモ
可申渡候、

八月廿六日

但馬

四二二ノ二

小荷駄奉行

市來次〔十〕郎

御旗奉行

伊集院周八

玉葉奉行

山田轉

御使番

汾陽次郎〔光遠〕右衛門

土山彦右衛門

普請奉行

迫水善左衛門

兵糧奉行

郷田源八

御目付

三雲藤一郎

小倉喜藤太

御軍賦役

大山格〔綱良〕之助

田代宗次郎

御祐筆

竹内伊左衛門

人馬奉行

有川藤左衛門

御儒者

諸郷御先手

兒玉源之丞

蒲生一組物主

川上八郎左衛門

國分一組物主

川上左大夫

志布志一組物主

福嶋(崎也)助七

大口一組物主

山田大炊

隈城一組物主

野村勘兵衛

水引一組物主

上原藤大夫

惣物主

町田(久盛)民部

御城下御先手

一番組物主

北郷(久徳)數馬

二番組物主

仁禮(仲信)舍人

三番組物主

田尻(種賢)務

四番組物主

島津織(久直)之助

五番組物主

川上(久賢)右膳

六番組物主

島津權(久肇)五郎

御名代総督

島津周(忠盛)防殿

御家老

喜入攝(久高)津殿

御側役

養田傳(長胤)兵衛

御軍役奉行

折田(平八)八

田畑平(常秋)之丞

寝禰武右衛門

有馬新助

甲斐彌右衛門

市來彦太郎

此度長州御征伐ニ付、先陣トシテ総督始メ出軍被仰出候ニ付テハ、引統被遊 御出馬思召ニ候、然処兵糧・玉菓ハ勿論海陸ノ運送彼是莫大ノ御宛行、一同急速ニハ運兼、夫々分隊ヲ以テ被差出候時宜ニテ、敵方ノ動静次第ニハ後隊迄モ追々御繰出ニ相成候、外夷ノ事件モ未一定不致、不容易形勢、内外切迫ノ時節ニ候得ハ、御国体尚嚴重被備置、天下国家ノ為御誠志被為尽度等ノ御事ニ候、就テハ向々御手当被仰付置候面々ハ勿論、当分御軍役不被仰付置候遊兵迎モ無差別、皆共御軍法ヲ以テ攻守ノ御手当可被仰付儀ニテ、一統同敷御軍役ノ事ニ付、屹度輕拳ノ儀無之、銘々我受持ヲ大切ニ存、士道相嗜、其機節ニ臨ミ粉骨碎身名義至当ノ忠節ヲ尽シ、御国威相輝候様可心掛候、左候間此節出勢ノ先陣外ノ者共、拔駈等致シ候儀ハ無之筈ニ候得共、万一御軍法相背致拔駈、先陣ヘ相加候様ノ者於有之ハ、無用捨先陣總督ヨリ差帰シ、夫々御軍律ヲ以テ罪科可被仰付候条、此段向々ヘ手厚可申渡、就中年若ノ者共ヘハ父兄又ハ親類・朋友等ヨリ丁寧致教諭候様、大番頭・御

小姓大番頭ヘ分^(六九)ヘ可申渡旨被仰出候、右ノ通被仰出、

誠ニ以テ御尤ナル思召ノ御事ニ候条、謹テ奉承知、一統忠勤ヲ尽シ、御趣意通屹度可相守候、此旨万一不心得之者於有之ハ、御軍律ヲ以テ其罪科可被仰附候、此旨向々ヘ不洩様可致通達候、

子八月

攝津「喜入」^(七)

帶刀

但馬

式部

龍衛

四一三 小松帶刀御褒賞

先月十九日長賊犯 禁闕別テ 御大事之刻、当日ハ勿論前後不容易致粉骨、無遺漏指揮行届、遂ニ賊徒ヲ令退治、奉救 御危難候段、拔群之勲勞令感悦候、仍馬一疋・拵刀一腰正俊遣之候、愈可抽忠勤之状如件、
元治元年甲子八月廿八日

久光

茂久

小松帶刀殿



四一四 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

以上、

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

大坂

大久保一蔵殿

木場傳内

別紙之通兵庫小豆屋助右衛門より申越候、英船之儀ニも御座候間、此段御届申上候、以上、

八月廿八日

木場傳内

大久保一蔵殿

別紙

一筆奉啓上候、秋冷之砌ニ御座候処益御安泰可被遊御座、大悦御儀奉賀候、然は生田別勝屋鋪建家并ニ地面之儀別紙ニ細々相認、封中差登申候間、御入手遊し可被下候、先は右奉申上度如斯御座候、早々、謹言、

八月廿七日

小豆屋助右衛門

木場傳内様

二白、奉申上候、此廿六日八ツ時頃英吉利帆船廻船老艘下筋より罷登、右船へ公儀御使番酒井數馬様始其外役人衆多人數乗込被成候、左候て右御人數御上陸、夜前兵庫泊り、今朝帰坂ニ相成候とも、英吉利船之儀今日も滞船致居候、此段乍次手奉申上度、早々、

四一五 本藩国老小松帶刀於京師長州処分意見

上申

本藩国老小松帶刀於京師長州処分意見上申、長州御所置愚存ノ次第左ニ申上候、

大樹公御着京ノ上、

朝命ヲ以テ長州云々ノ次第相札候様被仰出、其上幕府其命ヲ奉シ、吉川監物外ニ同藩ノ家老早々浪人迄被召呼、通船へ砲発、七卿列レ行キ幕船奪取、幕役殺害、薩船砲発等ノ心得、閣老一人・大監察夫(々之)ノ御役場御下坂ニテ御札問有之度、後悔イタシ御断申上候得ハ、其節ハ直様暴論輩へ嚴重ノ所置早々相付、御断申出候様、兩人ノ内一人御差返、一人ハ召留被置、一人帰国ノ上ハ形行右ノ一人へ申越、時々御届申上候様可被仰達哉、無左理届申暮居候ハ被召呼、兩人ハ大名へ御預相成、形行
朝廷へ被仰上、前ノ
朝命ヲ以、幕府へ相当ノ所置イタシ候様、被 仰付候上ハ人數被差向、宰相父子ノ罪御札シ有之外無之候、

右人数被差向候ニ付テハ、可然御方一人惣大将ニ被命、其ニ四五藩ノ人数被召付、藝州迄出張被仰付、隣国応援、九州ニテモ両三藩へ出張被命、小倉迄迄一時ニ相集リ、主将ノ命令相待居、若可打破ノ令相発シ候ハ、其時討取候様御達相成度、左候テ右主将藝州へ着、直ニ長州へ使者ヲ以分家ノ内一人早々被召、朝命ヲ以宰相父子家来ノ者共浮浪士ト相合、加様々々ト暴行ノ次第旁イタシ候段、朝廷遵奉ノ志アラハ、直ニ暴論輩ハ嚴重ノ所置イタシ、七卿モ早々差出候様、明日中否申出候様御達相成、其上右ノ所置不被行候節ハ直様兵ヲ發シ、誅伐ヲ加へ可申外無御座儀ト奉存候、

一惣大将

尾州老公

外ニ副将一人

彦根

若州

藤堂

備後福山

右四藩被召付

石州濱田

藝州

筑前

小倉

因州

備前

作州津山

雲州

伊豫松山

伊豫大洲

伊豫宇和島

讃州高橋

讃州丸龜

播州龍野

右応援

肥後

久留米

薩州

肥前佐賀

柳川

岡

右九州口討手

以上

四一六 一橋慶喜公褒賞書

松平修理大夫

今度長藩士及暴挙候処、人数出張凶徒ヲ追退之段、

感不斜候、依之移鞍一具賜之候事、

八月 日一橋殿ヨリ褒賞左ノ如シ、

今般長人乱入ニ付、其手人数中立賣・蛤門・公卿門ニ

於テ防戦、賊兵追退並塚町御門之救応、其余天龍寺へ

出張等拔群之働候、仍テ感状如件、

元治元年甲子八月

慶喜華押

薩摩少將殿

四一七 全上幕府ヨリ

松平修理大夫

先般松平大膳大夫家来共入京、迫 禁闕砲発及乱妨候節、速ニ家来共出張及接戦候段達 御聴候処、常々申付方宜一同励忠勤候段、拔群ノ働一段ノ事ニ被 思召候、此旨可申聞旨
上意候、

四一八 本藩ヨリ幕府へ窺書

長州追討被 仰出、尤速ニ軍勢因許江相揃置、差図相待候様、勿論従彼妄動いたし候ハ、不待差図口々より撃入誅滅可致、但し寄手之攻口並攻懸候日限は、御決議次第可被達旨、於京都御老中稲葉(正邦、筑藩主)美濃守様より御達相成、就ては不日ニ攻懸候日限等可被 仰出儀ニ候半、然処当分英・佛・蘭軍艦數艘長州江襲来、戦争之央ニ相聞得、然る時御発軍御日限等被 仰出、いまた長州戦争不相止内ニ押寄候ては、良外夷を相援ケ候筋ニ相当如何可有之、乍然右式軍勢揃置、攻掛之日限等追て

可被仰渡旨御達相成候付、夫成ニも可難被捨置、去とて看々外夷と戦争之央之事情ハ、御軍勢は御差図次第被差出、譬へハ小倉領辺ニても可然場所見合屯集いたし、諸国之軍勢差向ケニ相成候ハ、其節之時宜次第此御方も押出し、長州攻口江出張被仰付可然哉と吟味仕、此段申上候事、
子八月 (島津忠承氏所藏本にて校訂)
松平修理大夫

四一九 長州征伐出軍期日其外達書

四一九ノ一

一此節出軍ニ付、惣物主島津隼人始諸郷七組且御城下三組人数、九月朔日出軍被仰付候間、陸地ヨリ差越、阿久根ニテ船都合文ハ船ヨリ、其余ハ陸地ヨリ被遣候、

一島津又六郎・島津主殿並御城下二組其外御軍役奉行以下諸役へ、上下人数凡四百六十人余、同三日翔鳳丸御軍艦且挽船二艘へ乗付被仰付候、尤陸地被差越候人数・大砲並要具老船ヨリ被遣候、

一同三日立被仰付置候諸郷五組モ右同様、都合次第阿久根ヨリ乗船、又ハ陸地被遣候、

右通被仰付候条出軍ノ面々へ申渡、可承向へモ可

被申渡候、

但陸地被遣候人数小砲丈ハ可持越候、

八月

攝津

四九二

此節出軍ニ付、荷物之儀ハ御定之實目通ニテ、具足ハ

持越度向々右實目ニ不構持越候儀、勝手次第被仰付候、

此旨向々へ可申渡候、

八月

攝津

四二〇 一橋中納言殿ヨリ褒賞

松平修理大夫

先般松平大膳大夫家来共入京、迫

禁闕砲發及乱妨候節、速ニ家来共出張、及接戦候段達

御聴候処、常々申付方且一同励忠勤候段抜群之働、一

段之事ニ被思召候故、此段可申聞旨 上意候、

一今般長人乱入ニ付、其手人数中立賣御門・公卿門ニ於

テ防戦、賊兵追退ケ並堺御門救応、其余天龍寺へ出張、

是抜群之働候、依テ感状如件、

元治元年甲子八月

一橋

慶喜判

薩摩少将殿

一橋ヨリノ感状ハ、余リ委シクハオモハレス候、

四二二 中川修理大夫殿ヨリ使者ヲ以御送り相成

候目録

一押掛

一掛宛

一輿助

一掛宛

右

本田彌右衛門

藤井良節

鵜木孫兵衛

上田軍六

締四人江

一輿助

一掛宛

右

村山齊助

鵜木孫兵衛

右之通中川家重役之由ニテ、小倉隼太麻袴着用ニテ、

手扣書之通演説之上、大豆之義ハ大坂迄積登セ候間、

此御方様御便利次第京・攝間大蔵へ相納可申トノ事ニ

付、被入御念候、御使之趣委細致承知候条、早速其段申越可申旨答礼イタシ、御品等ハ先御預申上候趣ヲ以使者相返シ申候、何分御差図被下度、尤大久保氏へハ即チ致談合、挨拶使者差返置候、尤大河彌右衛門一列上京相成、一同ヨリモ挨拶等御座候、

四二二 川上助八郎所有刀劍二題シ久光公之御作

〔番号三八一に同文あり削除〕

四二三 嘉永七年甲寅五月八日ヲ以テ水戸烈公ヨ

リ照國公ニ送ラレシ書牘(本書ノ扣書徳川

家所蔵)

第一

扣ト口書ニアリ、(徳川齊密)烈公ハ往復書モ重要ノ事ハ必ス扣書ヲ残シ置レシト見ヘタリ、此書モ則チ其一ナラム、

第二

去月中芳翰云々、則チ同年四月ヲ云フ、閏老へ御逢云々マ、晦日四月晦日閏老へ御逢云々、公ハ閏老へ御面会、何事カ御建言アラムト其手順ノ御意見ヲ問ハレタルニ、答ヘラレシト見ヘタリ、何等ノ事柄ナリシヤハ知ルニ由ナシ

ト雖、前書ヲ以テ考フルニ、禁裏御造宮云々ヲ閏老ニ建言シ玉フノ儀ナラン歟、

第三

竹下清ノ事、同朋ヲ以テ度々御懸合云々、藩士竹下清右衛門ナル者ヲ水戸ニ雇聘シ、反射竈築造セラレンコトヲ度々依頼シ玉ヒシヲ云フ、同朋トハ水戸茶道職ノモノヲ云フ、其姓名ヲ詳カニセス、○竹下ハ鹿兒島士ニシテ、弘化ノ初メ齊興公大小砲製造局ヲ創設セラレシ際、田原直助ナル者ト製造方指揮職ヲ命セラレタル者ナリ、洋式砲術少シク、(マ)究シ、大砲製造ニハ心得アルモノナリ、然トモ反射竈建築ニハ関係セシコトナク、中ニ鎔鉄ノ事ニハ不得意ナルニ、如何ナルコトヨリシテ烈公ヨリ御所望トナリシヤ、知ルニ由ナシ、当時鎔鉄製砲ノ業、肥前佐賀及ヒ本藩ニ於テ大業ヲ企タルハ有名ナリシ故、竹下モ尋常ノ製砲家ナルモ、鎔鉄製砲ニモ得意ナルヲ誤聞セラレ、所望セラレタルニヤアラン歟、故ニ公ハ竹下ニテハ御不安心ナル旨告ケラレタルモノナリ、然ルニ烈公ハ全ク公ノ御謙退トヤ思食シケン、或ハ竹下ノ食客南部ノ者有之云々、此モノハ則チ森岡藩士大島惣左衛門ト云和蘭(盛)学生ヲ竹下カ食客トシ、製砲或ハ鎔鉄ノ書翻譯ヲモナサ

シメタリ、此者ヲ竹下ト共ニ雇聘セラレタリ、又肥前家
来ノ儀云々、肥前侯ハ反射竈ヲ日本ニ於テ創設セラレ、
本藩ハ其ニ倣フテ建築セラレタリ、其時佐賀藩ニ於テハ
手塚謙蔵（律蔵カ）ト云ヘル洋学者ニ命セラレ、翻譯セラレタル鉄
煩全書及ヒ鎔鋳炉製造書タリ、公ハ此等ノ書ヲ藩士宇宿
某等ニ下示セラレ、嘉永四年ノ夏ヨリ城中ニノ丸外苑内
ニ雛形ヲ試築シ、鎔鉄ヲ試ミ玉ヒシニ、可也ノ結果ヲ見
テ、而シテ磯村別邸ニ大竈ヲ築クコト四基、及ヒ鎔鋳炉
一基ヲ設ケ、鉄煩數十門ヲ鑄造、陸海軍備ニ充テラレタ
リ、斯ク製造スルモ、其關係吏ヲシテ佐賀藩ノ法ニ則ラ
シメ、質問セシメ玉ヘリ、此等ノ事蹟ハ公ノ行実ニ記ス
カ如シ、斯ノ如ク本藩ハ佐賀ノ成蹟ニ依リタルカ故、肥
前家来云々ト記サレタル者ナラム、

第四

竹下ハ十三日発足、水戸へ参候様申付云々、前書ノ如ク
雇聘ノ約ヲ為シ玉ヒシ故、同年五月十三日ヲ以テ水戸へ
発足セシメ玉ヒシナリ、

因ニ記ス、竹下ハ水戸ニ至リ、建竈ノ事ヲ大島惣左衛
門ト水戸藩士ト議定シ、其計画稍定リテ後辞シ去レリ、
大島ハ尚留マリテ建築ニ従事セリト云フ、前記ノ如ク

竹下ハ能ク其事ヲ弁セサリシカ故ナリ、

第五

二白、琉球ノ御記録云々、琉球在留佛・英ノ事情、或清
国ニ於テ英・佛・米國トノ關係報告ノ書類ヲ、烈公御所
望ニ依リ貸上セラレシヲ、返却ヲ請ハレシヲ云フ、

第六

今以日々執筆モ多ク云々、不日附箋シテ返サルヘキヲ云
フ、此付箋ハ烈公ノ意見ヲ記サレタル者少カラス、舊邦
秘録及ヒ鞅掌史料ニ記シタルカ如シ、注意ノ厚キ感スル
ニ余アリ、

因ニ記ス、烈公カ国事ニ心ヲ用ヒ玉フノ厚キハ、多言
ヲ要セスト雖トモ、当時海外ノ事情ニ心ヲ玉フノ厚キ
ハ、烈公ト我カ公トノ如キハ各藩侯中多カラサルベシ、
殊ニ琉球ノ事情ハ日本ニ於テ未曾有ノ難頭（マ）ナル故、公
心ヲ痛メ玉ヒシ事実ハ、水戸・越前・宇和島侯等ノ往
復書中ニ明カナリ、或ハ水戸侯ニ琉球事件ノ書類貸与
セラレタルハ前記ノ如クニシテ、中ニモ江戸邸政庁ノ
該件ニ罹ル簿書、彼邸ニ騰写セラレタルモノ凡ソ八冊
アリ、（市来西郎広置）
市廣明治二十三年ノ冬、東京ニ於テ史料蒐集ニ
尽力スルニ当リ、旧水戸藩ノ編輯員長谷川清・服部敏

氏ヨリ該書ヲ示サレタリ、廣之ヲ見テ驚喜ニ堪ヘス、之ヲ借りテ閱スルニ、我カ藩ニ伝ラサルノ書類ナリ、依テ直ニ騰写シテ參考ニ供シタリ、其詳事ハ廣カ日記ニ記シタルカ如シ、忠義公ニ其原書閱覽ニ供シタリ、○今島津家ニ藩庁ノ公書全ク伝ハサル明治六年ノ憂故、大山綱良鹿兒島県權令タリシニ、百事旧弊ヲ掃除セント、旧藩庁各局ノ簿書悉皆燒棄シタリ、僅ニ二公御手許ニ属スル者ノミ存ス、爰ヲ以テ公解ノ書類亡失シタルノ第一回トス、尋テ明治十年西郷隆盛等カ暴動ノ際、鹿兒島市街ハ百分一モ残リテ其他燒燼シタルカ故、門葉諸家所蔵ニ罹ル書類、或士人ノ所有書類モ多クハ燒亡シタリ、之ヲ第二回ノ不幸トス、其外江戸藩邸ニ在（酒井左衛門對其他藩兵ヲ云フ）タリル書類ハ、慶應三年丁卯十二月廿五日（藩兵ノ為メ）幕兵ノ為メ、芝藩邸ニ浪士潛匿ノ嫌疑ヨリシテ燒亡セラレタリ、此際悉皆烏有二婦シタリ、之ヲ第三回ノ不幸トス、其外廢藩後旧藩ノ記録簿書ノ類ハ無用視シテ、古紙ニ棄却シタルモ又鈔カラス、之レ全ク世ノ風潮ニ伴ヒ、好新古棄ノ時風ニ誘ハレテ、適々ニ之ヲ棄テタル者亦甚タ多シ、此等ノ事由ナルカ故、今ニシテ歴史ノ資料ニ乏キヲ致セルモノナリ、廣去ル明治十五年照國公言行録

編輯ノ命ヲ蒙リシニ、材料ノ乏キニ困メリ、然ルニ僅ニ材料トスルハ、寺師宗道カ記録及ヒ廣カ日記及ヒ石室秘稿等僅々數十部ヲ以テセリ、如斯ナルカ故事蹟ノ欠滿甚シ、然ルニ必要ナル琉球事件公書ノ徳川家ニ存シタルハ、照國公ト烈公ノ賜モノト謂フベシ、廣カ喜ヒ何ニカ之ニ若ンヤ、

第七

嘉永七年甲寅四月廿七日公水戸烈公ニ去ル（次）日ノ御答翰ナリ、御本翰アリシハ文意ニテ、此ハ書添云々、湯川道安ヲ以テ御内々琉球一条申上候処云々御処分上ノ事、烈公ノ御意見ヲ問ハレタルニ、烈公何ト乎述ラレシ趣ナリ、其趣旨今知ル由ナシ、

第八

琉球事件ノ簿書貸与セラレシハ、前段ニ記シタルカ如シ、数多ノ簿書ナル故、追次交換セラレシ事ト見ヘタリ、

第九

且又以同人御縁組一条之儀モ申上云々、（篤姫、徳川家定夫人、天璋院殿結婚事件ヲ、湯川道安ヲ以テ可否ヲ内問セラレタルヲ云フ、願通云々、此方ヨリ懇願セシカ如シト雖トモ、當時將軍家ハ内外各藩侯ヲ家臣ノ待遇ヲナシ、諸侯ハ主君ノ如ク崇

敬セシカ故、如此婚家ノ如キモ將軍家ヨリ内示シテ、懇願セシムルヲ習慣トス、此ノ願云々モ則チ其習慣ナリシヲ知ルヘシ、○天璋院殿ノ結婚ハ、當時外國事件ヨリシテ天下多事ナルニ、將軍家定ハ病身ニテ、難局ニ当ルノ器ニアラサルカ故、閣老阿部正弘ハ全ク國事上ヨリ結婚ノ内旨アリシニ依レリ、公ハ其意ヲ領シ玉ヒ、習慣ノ如ク懇願セラレタリト云フ（早川五郎兵衛へ与ラレシ密翰ニ明カナリ）

第十

願通相調候得ハ、領國中琉球迄モ人氣格別ニ相成リ、殊ニ浮説ノ憂モ少ク云々、當時琉球ニ仏・英人在留、通信・貿易ヲ密行ストノ説アリテ、大ニ天下ノ嫌疑スル処ナルノミナラス、公ハ英名ナルヲ以テ、大事ヲナスノ人ナルノ説モアリテ、前閣老水野越前（忠邦 兵松藩主）ハ在職中、阿部正弘ニ、公ハ徳川家ニ不利ナル人物、恐ルヘキヲ語ラレタ事アリシニ、阿部侯ハ其言ヲ越前侯ニ語ラレシニ、越前公ト公ハ懇交互ニ其誠意ヲ知り玉ヒシ故、阿部侯ニ弁護セラレシニ、後ニ阿部公モ越侯ノ言ヲ信シ、公ト交ヲ深シ、百事心ヲ合セ、内外公私胸襟ヲ開キ、師トシ兄トシ交リ玉ヘリトゾ、越侯ハ懇交ノ公ナルカ故、其事ヲ公ニ語り玉

ヒシニ、越前守ノ言大ニ肝胆ニ銘シ玉ヒシトナム（此言ハ明治廿一年（次）月（次）日廣親シク慶永公ヨリ聞ク処ニシテ、公ト對話記ニモ記シ置テ、此ノ如キ密情モアリシ故、公ハ忍耐シ玉ヒ結婚ヲ望ミ玉ヒシハ、実ニ國家ノ安泰ヲ謀ラン、

第十一

下田モ余リ自由相働キ候由云々、魯西亜人下田ニアリテ造船中ナリ、何ノ規則モナキ故、暴慢ノ挙動多シ、故ニ（長峯）鵜殿民部少輔ヲ派遣シ、取締上ノコトヲ談判セシヲ云フ、

第十二

越前守松平慶永例規婦国セムトスルヲ、當時國事多端ノ時ナルカ故、滯府アラン事ヲ公ハ烈公ト閣老ヘ密ニ尽力セラレシモ、遂ニ其事ヲ達セサリシトナン、慶永公對話書ニ詳記ス、

第十三

老若御料理御断リ焼キ飯ニ相成候由云々、従来閣老・若年寄等ハ營中ニ於テ、日々午飯ノ盛饌ヲ給ルノ例規ナリシニ、此回ヨリ是ヲ停メタリ、故ニ御台所役人ハ不平ヲ鳴ラシ云々、従来台所役人等ハ是カ為メ私スル処諺カラサルニ依リ、俗吏ノ習不平ヲ鳴スヲ云フ、

第十四

左様之小事許リノ評議ニテハ云々、公ハ当時内外多端ナルニ、斯ノ如キ小事ニ渉ルヘキノ時ニアラサルヲ歎息セラレタル者ナリ、

第十五

家来竹下清右衛門云々、前記ノ如ク反射竈建築ノ為雇聘セラレント依頼シ玉フヲ、承諾セラレタル者ナリ、鑄鉄云々前記ノ如シ、

第十六

肥前家来力武彌右衛門、此者佐賀ニ於テ反射竈建築担当ノ者ナル故、我藩ニ於テモ此者ニ質問シテ築造シタル者ナリ、故ニ公ハ如斯烈公ニモ告ラレタルナリ、

第十七

肥前守へ御懇之儀云々、公ハ佐賀侯ト懇交ナル故、烈公ハ公ヲ以テ何事乎意旨ヲ問ハレタル者ノ如シ、其事柄ハ知ルニ由ナキモ、考フルニ当時外国処分ノ問題ニ困シタル折カラナルニ依リ、果シテ其意見ヲ問ハレシナラム歟、

第十八

四月廿七日則チ嘉永七年庚寅四月二十七日ナリ、

第十九

猶々琉大砲船モ当月三日半方出来候テ云々、則進水式ヲ

云フ、大隅国牛根及ヒ櫻島ノ地ニ於テ製造ス、其事蹟ハ公ノ行実及ヒ石室秘稿ニ詳記ス、

第二十

是ヨリ上ノ方仕立云々、進水シタル故、内部ノ裝飾或ハ甲板上ノ造作ニ掛ルヲ云フ、

第二十一

右船相願候ハ、日本船ニテ願達不仕云々、治世ニナリテ三櫓桅ノ大船製造ヲ、徳川家ニ於テ禁製スル処ナルカ故ニ、公製造ノ許可ヲ得玉フニ就テハ、琉球船ノ形ニ三櫓桅トシ、砲門ヲ開キ云々ノ名ヲ以ヒラレシ故、琉大砲船ト名ツケラレタリ、然ルニ追手外国ノ刺撃ヲ受ケ、幕府稍悟ル処トナリ、形状ハ兎モ角モ、日本形ニテモ軍艦模造スルニ至リタリ、故ニ外飾ハ日本形ニシ、砲門ヲ設ルモ苦シカラサルコト、ナレリ、尚ホ公ハ閣老阿部正弘ニ談セラレ、全ク日本形ノ船形テ、軍船ニ製造セラル、コト、ハナレリ、

第二十二

来春迄ニハ江戸海へ取寄せ云々、落成ノ上ハ江戸海ニ乗り廻スヲ云フ、

第二十三

別啓ニ猶又相伺候、先頃申上候御所向云々、朝廷尊崇云々ノ事ヲ、辰ノ口則チ閣老阿部伊勢守^{正親}ニ忠告セラレムノ事ヲ、烈公ニ意見ヲ問ハレシモノナリ、其他海防之儀ハ申出可然ヤ否ヤモ同シク意見ヲ問ハレタルハ、幕府ノ形勢ヲ問ハレタルモノナリ、

因ニ記ス、公ハ烈公ヲ仰クコト父兄ノ如ク、重要ノコトハ意見ヲ問ハセ玉ヒ、烈公モ亦夫ニ対シ、信シテ腹藏ナク意見ヲ述ラレタルハ、数多ノ往復書中ニ明カナリ、或云、烈公ハ公ト其所見ハ大ニ相反ス、則チ烈公ハ攘夷ヲ主張セラレタルハ皆人ノ知ル処ナリ、公ハ開港ヲ主張セラレシノミナラス、實際琉球其他ニ於テ開市ノ準備モナシ玉ヒ、或ハ時勢ヲ見テ、表ニハ開市論ハ主トシ玉ワサリシモ、無謀ノ攘夷ハ得策ニ非ラス、或ハ彼ヲ知り己ヲ知ルヲ要スル等ノ旨ヲ、近衛家等ニ忠告セラレタルハ、御書中ニ散見ス、然ルニ烈公ト親交ナリシハ、人ノ怪ム処ナルハ其一ヲ聞ヒテ、其二ヲ知ラサル者ト云フヘシ、蓋シ唯尊王ノ誠意相合フニ外ナシ、或ハ烈公モ攘夷ヲ主張シ玉フハ、又其一ヲ知テ其二ヲ知ルニ在リ、其深奥ノ意ハ開港ニアルモ、士氣振作ヲ要トセラルカ故、攘夷ヲ表ニセラレタルナリト、

是松平慶永公ニ烈公ノ語り玉ヒシ言ヲ以テ証左トス、

慶永公對話記ニ詳記ス、就テ其疑ヲ弁スヘシ、

四二四（照國公ヨリ水戸烈公ヘ送ラレシ御書）

四二四ノ一

第一

嘉永七年甲寅四月十二日ヲ以テ、照國公水戸烈公ヘ送り玉ヒシ御書ノ臨写、本書徳川所蔵、

第二

封紙及ヒ御印章等皆真写ス、

第三

本紙ハ説明スルノ用ナク、寒暖ヲ述ルニ止リ、第四条ノ副書ニ要ヲ記サレタリ、左ノ如シ、

第四

猶々乍恐時候云々、且此煙豚并塩豚云々、煙豚ハ一名ラカント唱フ、琉球ニ於テ豚肉ヲ薰シ製シタル者ナリ、塩豚モ同シ、内地ノ塩漬ト異ナリ、一種漬法アリ、故ニ其味美ナリ、是ヲ一産物トシ、藩主ノ贈品中ノ最ナルモノナリ、

第五

副書ニ極密被仰下候趣奉畏候云々、又々京地御大變云々、

幕府カ外国船処分ノ事ニ付、林大學頭等ノ数名ヲ上京セシメ、応接ノ事情ヲ奏聞シ、条約締結ノ勅許ヲ得ントス、朝廷之ヲ許シ玉ワス、其事実ハ各史上記スルカ如シト雖トモ、内実ノ事情甚タ多端ナリ、大久保利通日記及ヒ石室秘稿ニ詳記ス、○大罪云々、林等カ朝廷欺キ奉リテ、勅許ヲ申下サントセシヲ云フ、

第六

是迄委細之儀ハ不承候処、(則チ四月八日)八日ニ筒井事参リ云々、筒井肥前守(政憲)カ、我藩邸ニ来リ、公ニ謁シ、閣老阿部伊勢守正弘ヨリ公ニ諮詢セシコトアリ、或ハ米國使節ト談判ノ趣ヲ告ケタルヲ云フ、

第七

誠ニ驚入り候云々、当時幕府ハ外国人ノ請求ニ、或ハ彼カ暴威ニ恐キ、城下ノ盟ニ等シキ挙動ヲナセシハ、史上ニ記シタルカ如シ、○阿部閣老カ筒井ヲシテ其事ヲ告ケシメタルハ、何ノ意タルヲ知ルニ由ナシト雖トモ、阿部侯ハ公ト懇交ナルノミナラス、弘化ノ初琉球ニ於テ仏・英人処分、或ハ開市否ヤノ議ヲ論シ玉ヒ、公ハ開市論者ノ先鞭者ナルモ、今日ノ如キ城下ノ盟ニ等シキ処置ハ、尤モ否トセラルハ無論、然ルニ阿部侯ハ内外ノ區別ナク、

琉球ト同シク開市論ナラントノ慮察、上ヨリ筒井ヲ以テ談判ノ始末ヲ告ケ、同論者ヲ求メラレシ者ナルヤノ疑ヲ存ス、然ルニ公ハ本書ノ如ク、烈公ニ驚入タル云々ト記サレタルノミナラス、過去ハ致方ナシ云々、御手当心ユルミ無之、諸人進ミ立候様云々、数百年昇平驕奢ノ風習ヲ匡正シ、士氣ヲ振作シ、海陸ノ武備モ充足シ云々、如此城下ノ盟ニ等シキ談判ニ及ヒ、國威ヲ失墜シ、上朝廷ノ逆鱗ニ触レ、下有志者ノ憤慨ヲ来シタルカ故、公ハ筒井ヲ以テ阿部侯ニ忠告セラレ玉ヒシナリ、則チ辰へモ可申上云々ノ趣ナリ、是ナリ、(中山實善左衛門)中山實善カ父次左衛門ヨリ聞ク処實善日記ニアリ、就テ見ルベシ、

第八

定テ魯夷へモ前条之趣ニテ云々、魯西亜ハ既ニ使節ヲ以テ蝦夷地経界ヲ定メ、通信ヲ請求スルニ至リシヲ、答弁延期セラレシ故、不年ニシテ其答詞ヲ請フハ必定ノ勢ナル故、前条之趣ニテ御濟セノ外無之云々、遺憾ノ御心情文上ニ溢レハ(筋カ)レタリ、

第九

如命イキリス・フランスモ多分今明年ニハ可參云々、烈公モ二国力近年中ニ渡来、米國同様請求スヘキヲ憂ヒ玉

ヒ、公ニ其事ヲ告ケ玉ヒシト見ヘタリ（烈公其他有志ノ諸侯、如此國事ニ懼ル往復書翰ノ類一モ御所藏ナシ、則爰ニ記サレタル烈公ノ御書翰モナシ、遺憾極ル、公薨去ノ次日、遺命ノ如ク燒棄タル一函中ニアリシナラム、行実第^(マ)卷及久光公親話記或ハ石室秘稿ニ記スカカシ）

第十

先頃差上候書面之通ニ云々、此書面ハ琉球ニ於テ仏・英人カ、日本ヘモ清国同様条約締結スヘシ云々ヲ記シタル書提出シ、或ハ二國在留人カ語ル処ノ趣ヲ琉吏カ藩庁ニ出シタル者アリ、此書烈公ニ呈セラレタルナラム、如之琉球ヨリ外國ノ事情ヲ報告スルニ依リ、時々幕府ニ具申セラルト雖モ、幕府ハ唯々恐懼スルノミニシテ、予備ノ実施ニ疎ナルヲ公ハ愛歎セラレタルハ、公カ行実ニ記スルカ如シ、

第十一

申上候ニモ無甲斐事ナカラ、家督後時々琉球之義内々牒面モ阿闍ヘ為心得云々、前書ノ如ク公屢々阿部正弘ニ琉吏ノ申暢書類等ヲ提出セラレ、予メ注意ヲ促サレシモ敢テ頓着ナク、馬耳東風ニ看過シ、今日ニ至リ恐懼狼狽セラル、ヲ云フ、則チ是迄頓ト打捨ニ相成居云々ノ文旨ヲ

以テ、其形況ヲ知ルニ足ル、然ルニ事目前ニ迫リ、少シク感スル旨アリシカ、此間差上候書面通中ヨリ差出候節初メテ心附候云々、中ハ則チ中山王^(琉球國王)ノ略ナルハ、事柄ヲ以テ琉球ナルヲ証ス、此書面ハ仏・英人カ清国文章ヲ以テ、清国条約締結ノ写書、或ハ其レニ準シ日本ヘモ請求ノ事ヲ記シタル者ヲ見テ、現ニ目前ニ迫リシ故、阿部侯ハ丁寧ニ返詞ヲナシ、今後無手拔云々ノ趣ヲ以テ、是迄冷淡ナリシヲ稍悔悟ノ意ナルカ如シ、

第十二

当地此次第二相成候ニ付テハ、琉球ハ以後如何可相成哉云々、交易等モ不仕候処云々、弘化三年公齊與公ノ御代理ニテ、御帰國ノ時仏人カ要求ノ条件、寛猛兩端ノ措置委任ノ命ヲ奉セラレンモ、公ハ時機ノ至ラサルヲ慮ヒ玉ヒ、倭ニ請求ヲ容レ玉ハス、食料・薪水ヲ与ヘ、在留勉学ヲノミ允シ玉ヒ、其後困難ナル場合幾回モアリシモ、琉吏ヲシテ耐忍セシメ、請求ノ如ク許サレス、僅ニ琉人ヲシテ彼カ日用品ヲノミ交換スルニ止リシ者ナリ、其事蹟ヲ以テ幕府ノ措置ノ面白カラサリシヲ、烈公ニ述ヘラレタル者ナリ、○公カ琉球王ニ示サレタル要点ハ、琉球ハ寸鉄モナキ文國故、柔克剛ヲ制スト云フヲ忘ル、コト勿

レト、実ニ国体ヲ明ラメタル誠言ト云フベシ、

第十三

何分前述ノ事情ヲ詳記シ、烈公ノ尊慮モ何度云々、紙上
 尽シ兼云々、水戸茶道坊主湯川道安ヲ以テ申上云々、湯
 川ハ公ト烈公トノ内書交通ノ使ヲ勤メタル者ニテ、烈公
 腹心ノ者ナリシナラン、○其申述ノ有無ハ茲ニ分明ナラ
 スト雖トモ、必ス文書ニ記シ得サルノ事柄モアリシナラ
 ム、

第十四

大砲雛形之儀モ云々、何種之雛形ナリシヤ知ルニ由ナシ
 ト雖、公ハ素ヨリ古式ノ砲ハ不用ニ属スルヲ知シ召シ、
 烈公モ近世式ヲ用ヒ玉フカ故、考フルニ、当時主張セシ
 ハ洋曆千八百五十年頃ノ式ナリシ故、必同年式ノ器ナル
 ヤ明カナリ(本年ハ西曆一千八百五十四年ニ相当ス)

第十五

昨夜龍土ヨリモ云々、則チ四月十一日ニ当ル、龍土ハ伊
 達宗城公ノ邸麻布龍土ニアリシナリ、兩人ニテ雛形拵へ
 云々、珍品ノ雛形ナルヲ知ルベシ、ボンベンハ昨夜云々、
 是ヲ以テ考フルニ、当時専ラ用ヒタル佛国新式ボムペカ
 ノンニヤアラム、

第十六

湯ノ事云々難有奉存候云々、何等ノ事柄ナリヤ知ル由ナ
 シ、

第十七

京地之儀ニ付薄々承候云々、先頃伏水通り近衛殿へ参殿
 仕候云々、公ハ嘉永四年二月御知政、同年四月御就封、
 日江戸ヲ発セラレ、五月、日伏見ニ着セラル、日近
 衛家ニ参殿セラレ御帰国、同五年春御出府、同六年、月
 御下国、同七年、月参府アリタリ、茲ニ記サレシハ、此
 回ノ途次伏見駅御滞留中、近衛家ニ参殿セラレシ者ナリ
 ヤ明カナリ、

第十八

五ヶ年御節儉云々、幕府カ外夷防禦ノ事ニ就テ非常ノ経
 費アルニ依リ、万事儉約ヲ令シ、朝廷ノ御用度ニモ五ヶ
 年程ノ節儉ヲ用フルコト、ナセリ、依テ禁中ノ事ハ元来
 僅少ノ充行ナルニモ一層節儉シ、主上一年ニ兩三回ノ乱
 舞モ停メラレ、其他百事非常ニ減省ヲ加へ、御不如意ノ
 事云ハン方ナク、実ニ哀ムヘキ悲ムヘキ御有様ナリシト
 ソ、乱舞ノ御楽其費用モ僅々タルモノナルニ、夫ヲモ減
 削シタルヲ云フ、右ハ全ク関東御存シノ義ニモ云々、全

ク御付ノ面々御奉公振ニ云々、所司代等カ関東ニ於テ自己ノ褒貶ニ関スルノ私心ヨリ、如此僅少ノ經費ヲモ減シタルヲ云フ、万乗ノ君僅々タル兩三回ノ舞楽ヲモ減シタルヲ、公ハ近衛家ヨリ聞セラレ、愛歎セラレタル者ナリ、御所向之儀ハ右様ニ不相成候テモ云々、公カ尊王ノ御誠意知ルニ足レリ、海防ノ為メ節儉ハ当然ナルモ、禁中僅少ノ事ニ及サンヨリ、將軍家カ驕侈ナルハ言ヲ俟サル故ニ、公ハ京地ノ人氣或ハ諸国ヘノ嚮將軍家ノ不徳ノ基云々、此節ノ天災云々、大地震等ノコトヲ指シテ記サレタルモノナリ、

第十九

何卒神祖之御規定通云々、家康・家光ノ代ニ天子御供料規定アリ、其概略左ノ如シ、

第二十

御造宮万事御不自由無之云々、当時炎上後ノ御造宮中ナルモ、前ノ如ク非常ノ節儉中故、百年減削シテ甚粗略ナルノミナラズ、工事受負仕事ニテ、工人等カ貪利ノ工事故、其構造知ルヘキナリ、公親ク近衛殿ヨリ聞キ玉ヒ、慨嘆ノ余リ烈公ニ斯ク内告セラレタルモノナリ、烈公ハ徳川家親藩中尊王ノ御方ナレハ、閹老等御示諭ノ道モ近

キカ故、斯クモ申述セラレタル者ト信ス、

第二十一

大隅へ御伝言難有奉存候云々、大隅守齊興公へ烈公何乎御伝言アリシ趣ナリ、当時高輪住居云々、近頃高輪ノ別邸ニ移転セラレタル際ナリ、御伝言ハ何等ノ事柄ナリヤ、知ルニ由ナシ、

第二十二

(佐久間傳) 佐久間之儀美ニ可惜事ニ候得共云々、其人為ヲ知り玉ヒシヤ明ナリ、憤激之余云々、歎惜シ玉フノ意文旨ニ顯ワレタリ、公ハ佐久間ニ御交際アリシハ、行実(又)第(又)ニ記スカ如シ、惜ミ玉ヘハ、当時憂国ノ識者ナリシハ、悉ナ人知ルカ如シ、

第二十三

其外申上度云々、近日中安ヲ以テ云々、前記湯川道安カ事ナラム、

第二十四

副啓

京地炎上誠ニ驚人云々、安政元年甲寅四月六日禁裏炎上ス、主上下加茂ニ行幸後、聖護院ニ遷幸シ玉フ、

第二十五

私方ニモ近衛殿初御類焼云々、近衛家ハ御近親ナル故、私方云々ト記サレタル者ナリ、

第二十六

昨日異船沙汰云々、亜米利輪船伊豆下田港ヨリ出船シタルモ、不日魯西亜船来ルヘシ、又騒駭アラムトノ意ナルカ如シ、

第二十七

嘉永七年則安政元年四月十二日ヲ以、水戸烈公ヘノ御内書ナリ、本蔵徳川家ニ現存ス、○此ノ御書ニ対セラレ烈公御返輪左ノ如シ、○御返輪ハ公ノ御書翰之裏ニ朱書ヲ以記サレタリ、蓋シ御扣書ノ為ナラム、今其俣徳川家保存セラレタリ、

第二十七

鑄鉄丸并火帽御投遣云々、鹿兒島ニ於テ鑄製ノ着発爆彈及雷管ハ、近代ノ製式ニ則リ模造シタル者ニシテ、当時砲術家中賞讃スル製品ナリキ、故ニ公ハ之ヲ進呈セラレシ者ト信ス、此製式ハ洋曆一千八百五十年式ト唱へ、一兩年前和蘭人ヨリ長崎ニ於テ伝授シタル者ニテ、廣カ如キモ其模造ニ關係セシ故、水戸公ニ進呈用ナリト奉命、製造シタルヲ記憶セリ、

第二十八

御書中縷々御申越之趣云々、前書ノ如シ、

第二十九

御所云々之儀拙老モ心付云々、烈公モ京都ノ形勢ヲ探求セラレ、小田原・濱松云々、小田原侯大久保相摸守〔加賀守志慮也〕

濱松侯水野越前守〔忠邦カ〕

等ノ閣老ニ向テ、禁裏御尊崇供御不如意ノ事ヲ建言セラレシヨ云フ、然レトモ幕府ハ事ヲ

左右ニ托シテ其結果ナキハ、有志ノ憤慨セシ処タリ、石室秘稿ニ詳記ス、

第三十

此度又建白云々、外之儀トハ違ヒ御造管早速取掛リ、以前ヨリヨロシクハ出来候得共、御疎末ニ出来候事ハ決テ不相濟ト云々、閣老ハ如此口ニハ唱フルモ、其実ハ甚疎末ナリシト、或ハ閣老ノ指導行届カサルヤ、或ハ口ニ唱ヘテ内心ハ別ナリヤ、疑ナキニ非ラス、公ハ近衛殿ヨリ聞カセ玉フ処ニテハ、甚タ疎略構造ナリト聞コシ召セリ、故ニ御建言ナサルノ尊慮ナリシモ、外藩ハ別視セラル、ノ政度ナル故、懇交ノ烈公ニ意見ヲ問ハセ玉ヒシモノナラム、烈公尊王憂國ノ御方ナルノミナラス、公ト親密ノ御事故、本ノ如ク答ヘ玉ヒシ者ナリト信ス、

第三十一

嘉永七年五月十八日ニ当ル、

四二五 〔照國公ヨリ伊達宗城公へ答書〕

四二五ノ一 〔島津斉彬〕

伊達宗城公照國公へ御尋問ニ对セラレタル答書ト見

ユ、伊達公御書及ヒ御質問書送ス、又照國公此答書

ニ添付ノ書モ送ス、唯此書ノミ保存セラレタリト、

一文久四癸亥春云々十二字ハ、伊達宗城公御書入レナリ、

本書同家所蔵、明治廿四年同公ヨリ貸与セラレシヲ臨

写ス、文久四ハ同公御誤ナリ、文意ニ就テ考フルニ、

安政四年夏頃ナラム歟、

〔東京都港区〕同上

一四ヶ条之儀先達高輪・田町手当伺云々、両所ニアル別

邸警衛藩兵一手ニ引受警衛ヲ請願セシニ、許可ヲ得タ

ルニ依リ、臨機心得振伺ニナリタリ、其時邸外ノ警衛

ハ手ニ及ヒ兼云々ヲモ上申セリ、其事ヲ簡單ニ記サレ

タルモノナラム、舊邦秘録ニ詳記ス、

一五ヶ条田町砲台築出シ云々、前条ノ如ク邸内警衛許可

アリシニ依リ、砲台築造ノ為メ埋地ヲ請願セシニ、許

允セラレ、当時埋築中ナリシヲ云フ、事実舊邦秘録ニ

詳記ス、高輪ニハ幕府ノ手ヲ以テ沿岸ニ砲台築造ノ予

定ナリシ故、本藩ノ心配ニ及ハサルヲ云フ、然ルニ其
後交議、品海ニ数ヶ所ノ洋砲台ヲ築キタリ、現存六ヶ
所ハ其中ナリト云フ、

一六ヶ条參勤人数云々、嘉永七年春供列人数ヲ云フ、当
時米艦浦賀其他ニ渡来非常ノ時ナル故、伊達公ハ供列
人員モ増スヤ否ヤヲ尋問セラレタル答弁ナリ、廿五日
ニペロトン云々、何月ナリヤヲ詳記スルコト能ハス、
然レトモ舊邦秘録ニ依レハ、二月廿八日二隊ヲ出シタ
ルコトヲ記セリ、蓋シ之ヲ云フナラム、去年モ別段一
ペロトン云々、嘉永六年ノ夏米艦入浦ノ報ニ接スルヤ、
直ニ一隊ヲ出シタリ、之ヲ云フ、一ペロトンハ和蘭式
ノ一小隊ヲ云フ、兵員四十八名、隊長其他兵糧・彈薬
等ヲ掌ル役員ヲモ合セテ六十名ニ及フ、此ヲ當時一隊
ノ組織トス、之ニ加フルニ野戰砲二門ヲ附ス、其兵一
門ニ八名彈薬・兵糧運搬手ヲ合シテ凡三十名ニ及ヘリ、
故ニ一隊ト云ヘハ百名ニ余レリ、
一七ヶ条何等ノ事柄ナリヤ知ルニ由ナシ、内蔵ハ伊達家
松根内蔵〔後園書〕ト改ム
今三葉ト号ス含テ来麿セリ、
一八ヶ条此儀極テ難申上云々、深宮云々、幕府ノ大奥ヲ云
フ乎、歌橋ハ幕府ノ老女ヲ云フ、此老女當時営中ニ威

権アリシモノナリト云フ、此事柄何等カ詳ナラス、

一九ヶ条此儀先便申上候通云々、近衛忠熙公ヨリ関白九條尚忠公へ密申セラレシ事柄ナラム、其事知ルニ由ナ

シト雖トモ、内々関東へ云々、水戸へモ殿下ヨリ云々ノ文ヲ以テ考フルニ、外国処分ノコトナリヤ明カナリ、

一十ヶ条魯奴御考ノ通ト云々、嘉永七年甲寅魯西亜使節渡来、幕吏酒井其他談判好結果ヲ得サリシヲ云フ、

一十一ヶ条別段使者不遣云々、誰ナルヲ知ルニ由ナシ、文詞上ヲ以テ考フルニ、魯西亜使節事ヲ幕吏へ尋ネ越

シタルナラム、悪ムベキ様子云々、カラフトノ境界云々ト記サレタルヲ以テ、魯艦事件ナルヤ明カナリ、

一十二ヶ条此義云々事柄知ルニ由ナシ、内蔵ハ宇和島侯家老松根内蔵後改書ヲ云フ、同人ヲ鹿兒島ニ遣サレシニ、

公面接セラレ、何事カ云ヒ合メラレタルコトヲ云フ、中休ミ云々知ルニ由ナシ、

一十三ヶ条参府ハ最早伺濟云々、琉人モ承知ニテ手当云々、安政五戊午ノ秋琉球王子ヲ俱シ参府セラル、ヲ云

フ、此参府云々ハ重大ノ事由アリ、舊邦秘録・石室秘稿ニ詳記ス、

一十四ヶ条渡唐船使云々事由知ルニ由ナシ、推考スルニ、

清国ニ関スル事由ナラム、琉球ヨリ渡清ノ便ナキ故分明ナラサルヲ云フナラム、

一十五ヶ条此雛形云々、何ノ雛形ナルヤ推考スルニ、大小砲等ノ雛形ナラム乎、私ノ図ハ松根内蔵へ云々、軍艦ノ図ナルヤ明カナリ、

一十六ヶ条九大尋次第云々、宇和島藩士ナルベシ、糺スベシ、

一十七ヶ条願書云々、何等ノ願書ナリヤ詳ナラス、細川云々之儀長崎崎陽通詞共云々、何ノ事柄ナリヤ知ルニ由ナ

シ、然レトモ文詞上崎陽云々ヲ以テ考フルニ、何カ外国ニ関シタル事柄ナラム、

以上十七ヶ条、宇和島侯家老松根内蔵ヲ鹿兒島ニ遣サレ、質問セラレタル条書ニ答弁セラレタルモノナリ、此書伊

達家ニ保存ス、伊達侯ノ書翰及条書ハ迭ス、書中年月日ナシト雖トモ、文詞ヲ以テ推考スルニ、琉球

人ヲ引率シ参府云々ヲ以テ、安政五年ナルヲ弁知ス、公ハ知政後琉人ヲ率ヒテ参府セラル、ハ、此ノ回ニ限りタ

レハナリ、

四五ノ二當時公ハ御在国、鎌田ハ江戸藩邸在勤中ナリ、○公ハ本

年五月御帰国アリタリ、○二度目ノ書面云々、其事柄知ルニ由ナシ、何カ重要ノ事ナル文詞上顯ハレタリ、考フルニ、重役進退ニ関シタルコトナラム、○高輪之処云々、齊興公高輪ノ別邸ニ在セラル、ヲ云フ、御父子御相談ニナルヘキ重事ナラム、○下総ハ国老島津下総久徵ヲ云フ、○駿河ハ新納駿河久仰ヲ云フ、

市廣當時ノ形勢ヨリ案スルニ、国老島津豊後久寶カ進退ニ関シタルコトナラム乎、尚ホ勸フベシ、

鎌田正純ハ少壯ノ時ヨリ武事ニ心ヲ用フルコト厚ク、中ニモ荻野流ノ砲術ヲ藩士青山千九郎ニ学ヒ、其奥儀ヲ極

(正之)

メタリ、弘化ノ始齊興公、高島四郎大夫カ門人成田正右衛門カ和蘭式砲術ヲ軍事ノ基本ト定メ、國中一般ニ伝習スヘキ旨ヲ令シ、操練局ヲ設ケラレタルニ依リ、鎌田ハ當時組頭職ニ在リシ故、撰拔セラレテ勸奨ノ特命ヲ受ケ、附属ノ士ヲ奨励スルニ就テ自らモ研究シ、其技ニ長シタリ、然レトモ元来学フ処ノ流派ノ銃器列伍ヲ我国ニ適當ナリト信シ、洋式ノ隊伍ハ密接ノ伍列ニシテ、敵彈ノ的トナルヲ痛論スルコト久シ、故ニ主張スル処ノ隊伍ニ編制センコトヲ上申シタリ、(上申書高氏日記ニテ)殊ニ公ハ正純ニ命シテ、當時有名ナル軍学家小野寺庸齋カ門ニ入ラシメタリ、小野寺

モ所論洋式ノ隊制ヲ不可トシタルニ依リ、小野寺カ説モ合セテ上申シタリト云フ、然ルニ公ハ本書ノ如ク彼ヲ知り己ヲ知りテ、而シテ後ニト記サレ、今兩三年研磨シ、洋式會得ノ上 皇国相応ノ趣法ニ大成編制セラレンノ尊慮ナリシナリ、或ハ公ハ一般ニ見ル処ニアラセラレシニ依リ、其方ニモ西洋式研究スヘキヲ、尚ホ訓諭セラレシモノナリ、○公ハ御少壯ノ時分ヨリ諸流ノ軍学ヲ修メラレ、中ニモ御家流ノ軍法ヲ極メ玉ヒ、或ハ荻野流或ハ高嶋カ洋式ヲモ学ヒ玉ヒシノミナラス、弘ク外国ノ軍書ニ心ヲ用ヒ玉ヒシニ依リ、鎌田等カ識見ト同日ノ論ニアラス、茲ヲ以テ能ク我国ニ適合ノ法ヲ設ケ玉ハシノ遠慮ハ、無論アラセラレタリト信ス、且文詞中委細追々可申談云々ハ、臣下ニ示スノ懇丁ナル、実ニ感スベキナリ、○屋敷中取締云々、江戸藩邸在勤ノ輩風紀ノ取締ハ、毎回訓令セラル、処ナルニ依テ、斯ク命セラレタルモノナリ、或ハ文武ノ奨励ハ殊更ニ勸誘セラル、処タリ、(勸誘ト唱)迫田甚蔵政庁右筆ナリシヲ、長崎附人ニ登用セラレタリ、○江田平蔵供目付役ナリシヲ、使番ニ登庸セラレタリ、他藩ヘ対スル事務ニ馴レタルモノナリ、○土持孫兵衛ハ右筆職ナリシヲ広敷用人ニ登庸セラレタリ、此人ハ少シ

ク識アリテ、有志部類中ノ人ナリ、○谷川次郎兵衛ハ門
 葉ノ末ニ在リテ、善金並物頭職ナリシヲ、側用人ニ登用セラ
 レタリ、廉潔ニシテ弓術ニ達シタリ、先年琉球在番奉行
 職ニアリテ、英・仏人渡来ノ折難局ニ当レリ、公薨去ノ
 後ハ久光公側用人兼側役ヲ兼ネ、文久二壬戌初メ御上洛
 ノ際モ附從シタリ、○産物方改正云々、琉球産物局種々
 ノ悪弊アリシヲ改正セラル、ヲ云フ、其事実ハ舊邦秘録
 ニ詳記ス、

安政四年丁巳十月廿九日

四五ノ三
 小野寺ノ事云々庸齊ヲ云フ、當時有名ナルヲ聞召サレタ
 ルナリ、○先比申入タル趣云々、案スルニ、我藩へ召抱
 へ、軍学ノ師範タラントノ御内存アリシト聞ケリ、果シ
 テ其事ナラム乎、○其方自分心得ニテ軍学修業スヘキ旨、
 訓諭セラレタルモノナリ、○直助ハ中原尚介ノ誤ナリ、
 此人少壮ヨリ荻野流砲術家ナリシカ、後ニ江戸へ出江川
 太郎英稱左衛門カ門ニ入り、高島カ砲術ヲ修業セリ、当時江
 戸ニ在リ中原ヲ小野寺カ門ニ入ラシメント、鎌田カ上申
 シタルニ對セラレタル御文旨ナリ、○後年ハ呼候云々ハ、
 小野寺ヲ召抱ラレンノ内慮ナルカ故、不離様親ムヘシト

訓示セラレタルモノナリ、○屋敷出入云々ハ、在邸ノ輩
 出入門限取締等ヲ云フ、○筑後ハ在邸国老川上筑後久封
 ヲ云フ、○豊印之事云々、島津豊後ヲ云フ、○下総ハ島
 津下総久徵ヲ云フ、○武兵衛ハ側役豎山利武ヲ云フ、

市廣考フルニ、豊後ヲ黜ケ玉フヲ云フ乎、同人ハ人
 望ナキノミナラス、調所笑左衛門在世中ヨリ同穴ノ
 人ニテ、大ニ奸事ヲ働キタルニ依リ、國中一般憎ム
 処ナレトモ、齊興公ノ寵ヲ受ケタルニ依リ、公モ已
 ムコトヲ得玉ハス、時機ヲ見玉ヒシモノナリ、

因ニ記ス、安政五年ノ春豎山ヲ御使ニテ黜斥セラレ
 シコトヲ、齊興公ニ告ケシメント東上セシメ玉ヒシ
 ニ、豎山元来凡庸ノ人ナリシ故、之ヲ齊興公ニ親暢
 スルコト能ハス、齊興公ノ側役永江休之丞ナル者ニ
 議ス、永江ハ豊州ト親密ナルカ故、其事ヲ肯ンセザ
 ルノミナラス、却テ之ヲ豊州ニ密告シタルニ由リ、
 豊州ハ百方力ヲ竭シテ齊興公ニ向テ防禦シタリト、
 遂ニ公ノ意ヲ達シ玉ハサリシトナム、事実冗長石室
 秘稿ニ記スルカ如シ、奸人ノ所為恐ルベキナリ、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年九月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
（紙数六八枚）の記載あり〕

目録

- 万石以上之面々江戸在住復旧達書
- 御城下六組ノ組織變更達書
- 本藩征討軍賦
- 長州征討御手配之次第
- 藩内錢相場達書
- 島津圖書御感状
- 小松帯刀へ御感状

桂右衛門大目付ニ昇進

地頭職復旧布達

議政所中止

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

島津仲大目付格ニ昇進

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書

太守様御鞍置御馬御拝領ノ照会

安田助左衛門日記抄

地頭職被命人名

蛤御門戦争御褒賞

飯野澤原開墾地

在崎汾陽報告及外国新聞紙

大坂城ニ於テ軍議ニ列シタル諸藩人名

大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

大樹公外国人応接云云上奏書

安田助左衛門日記抄人吉異変

言路ヲ開カル藩令

松木五代ノ兩人横濱ニ放タル

四二六 万石以上之面々江戸在住復旧達書

一万石以上之面々交代寄合、嫡子在国在邑且妻子国邑
へ引取候共、可為勝手次第旨、去々戌年(被脱力)

仰出候、銘々国邑へ引取候面々モ有之候処、此度

御進発可被遊候ニ付テハ、深キ

思食モ被為在候付、前々ノ通相心得、当地へ呼寄候様
可致候、

九月朔日

一 一万石以上之面々交代寄合、参勤之割御猶予被成下候
旨、去々戌年被

仰出候所、深キ 思召被為 在候ニ付、前々之通御定
之割合相心得参勤交代可有之候、

九月朔日

四二七 御城下六組ノ組織變更達書

一 二番組新上橋ヨリ關山札前通川手、草牟田宇治瀬川手
迄、

一 三番組萩原小路上手ヨリ、高見馬場下通、島津又六郎
裏門通、上手馬繫馬場・清瀧川上手ヨリ大門口迄、

右ハ二番組之内新照院方限、三番組之内二本松馬場通
ヨリ、上手ノ方一番組へ召加、組替被仰付候旨申渡置

候得共、右方限居住之面々、右通一番組ニ組替被仰付
候条、此旨表方へ致通達與掛御勝手方へモ可相達候、

九月

(攝入久高)
攝津

一番組 島津 刑部

二番組 仁禮 (仲信) 舍人

六番組 島津 登 (久繁)

伊集院 島津 隼人 (久芳)

高山 三原傳左衛門

清水 武官十左衛門 (親實)

大口 山田 司

國府 河上左大夫 (大友)

大崎 益滿與右衛門

志布志 福崎 助七 (季運)

右 九月朔日出軍

總督

副

出水 島津 又六郎 (久明)

島津 主殿 (久壽)

三番組 島津 織之介 (久吉)

中番組 名越 左源太 (盛昌)

高城郡 長束 十郎

田布施 喜入 雄次郎

末吉 川田 掃部 (佐徳)

帖 佐 伊集院 喜左衛門

阿多 柳 半之丞

右 九月三日出軍

四二八 本藩征討軍賦

一 蒸氣船二艘

此二艘ヲ以テ兵士ヲ積ミ、鹿兒島ヨリ筑前若松港へ

直航シ碇泊スヘシ、諸藩兵ハ九月十日迄軍揃ノ旨、幕府ヨリ御達有之候、

一先陣

高山一組百式拾四五人以下倉左ノ如シ

物主

三原傳左衛門

五百錢野戰砲式門

一中備

國分一組

物主

川上左大夫實親

五百錢野戰砲式門

一御城下御先手一組

六番組組頭物主

島津登久

携臼砲式門

一先陣

總督

島津又六郎明久

一先陣

副總督

島津主殿久

但陣旗式本、各手勢引卒、自分纏又ハ旗馬印之間

一本

一御城下

物主

川上右膳久

此処ニ京都守衛五番組人数、彼地ヨリ出軍ノ賦、此人数ハ本年七月中旬、京都守衛ノ為メ上京之隊、

一先手

高城郡高城一組

物主

長束十郎

七百錢野戰砲二門

一中備

伊集院一組

總物主

島津隼人久

七百錢野戰砲二門、手勢并纏又ハ旗馬印ノ

間一本

一左備

大崎一組

物主

益満與右衛門

五百錢野戰砲二門

一後備

御城下一番組一組

物主

名越左源太真盛

二十拇臼砲一門

携臼砲一門、手勢又ハ纏旗馬印ノ間一本

一右備

田布施一組

物主 喜入雄次郎

一遊兵

帖佐一組 物主

染川五郎左衛門

七百錢野戰砲二門

伊集院喜左衛門病二依

一後備

阿多一組 物主 柳 半之進

七百錢野戰砲二門

テ染川交代

七百錢野戰砲二門

一後備

一左備

大口一組 (物主カ) 山田 司

志布志一組 物主 福崎 助 七運季

五百錢野戰砲二門

一右備

一遊兵

清水一組 物主 武宮十左衛門

御城下一組

一番組 物主 嶋津 掃 部遠久

五百錢野戰砲二門

二拾拇臼砲一門

一右備

御城下二番組 物主 仁禮 舍人信仲

合人数上下式千六百八拾人人足履夫ハ此外ナリ

二十拇臼砲一門、手勢又ハ纏旗馬印ノ間一

合野戰砲五百錢砲六門

本、携臼砲一門

合同七百錢砲十二門

一左備

末吉一組 物主 川田 掃部徳佐

合携臼砲五門

七百錢野戰砲二門、手勢又ハ纏旗馬印ノ間

合二十拇臼砲四門

一本

右通九月朔日・二日・三日ノ三日ニ出軍可致候事、

一参謀

御家老 喜入攝津高久

御側役 島津求馬滿久

御軍賦役 黒田嘉右衛門綱清

種子島乘左衛門

京師ヨリ出軍 大山格之助良綱

全 田代宗次郎

右人数及ヒ諸隊九月初出發ノ予定ナリシニ、八月廿八日

京師飛報到来、延日ノ達アリ、其所以ハ八月廿六日攝海

ヘ英国軍艦数艘渡来、兵庫開港申立

朝幕大ニ因却、其他種々ノ事情、或ハ長州末藩清末ヨリ、

又ハ吉川経幹監物ヨリ降伏謝罪アルカ故ナリ、嘆願、

四二九 長州征討御手配之次第

惣督 尾張大納言殿陸路ヨリ

副惣督 松平越前守殿海手ヨリ

先陣 松平安藝守淺野長則

同藝州ヘ 板倉周防守備中松山

同岩國ヘ 真田信濃守信州松代

同山口寄 阿部主計正方頭備後福山

後軍

松平備前守備前岡山

脇坂淡路守播州龍野

松平近江守弘次

三浦備後守作州勝山

板倉攝津守勝弘、庭瀬藩主

本多肥後守播州山崎

御使番監軍 松平左金五勝安

向井左衛門

小笠原隼三郎

先陣石州、萩ヨリ山口寄

松平相摸守因州鳥取

松平右近將監石州濱田

龜井隱岐守石州津和野

松平三河守作州津山

松平出羽守寒州松江

有馬遠江守越前丸岡

松平佐渡守雲州広瀬

應援

御使番監軍

松平主計(直哉) 頭雲州母里

内藤彌左衛門

大島主殿

朝倉小源太

先陣海路、四国徳山ヨリ山口寄

松平阿波守(須賀齊裕) 阿州徳島

松平讚岐守(久松勝成) 伊予松山

松平讚岐守(頼勝) 讃州高松

伊達遠江守(宗徳) 伊予宇和島

応援

松平壹岐守(久松定法) 伊予今治

御使番同

水野采女

服部仲

遠山左衛門

先陣海路、下之關ヨリ山口寄

細川越中守(慶順) 肥後熊本

小笠原近江守(真正) 豊前小倉新田

奥平大膳大夫(昌服) 豊前中津

後軍

小笠原大膳大夫(忠幹) 豊前小倉
小笠原幸松丸(貞安、安斎藩主)

松平美濃守(黒田齊博) 筑前福岡

松平肥前守(編島直太) 肥前佐賀

小笠原佐渡守(長昌) 肥前唐津

御使番

多賀鞆負

曲淵階一

岩瀬敬太郎

先陣海路、萩ヨリ山口寄

松平修理大夫(島津茂久)

後陣

有馬中務大夫(慶頼、久留米藩主)

立花飛驒守(鑑寛、柳河藩主)

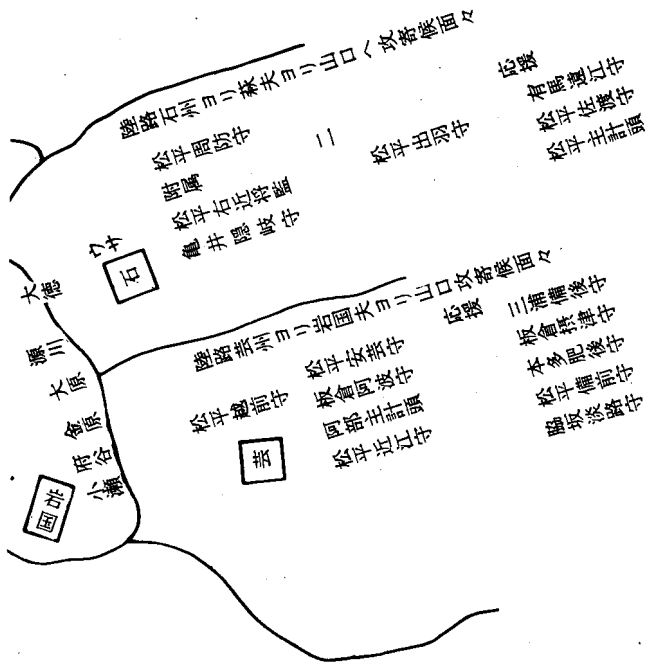
応援

松平主殿頭(忠和、島原藩主)

御使番

天野民部

平岩金左衛門

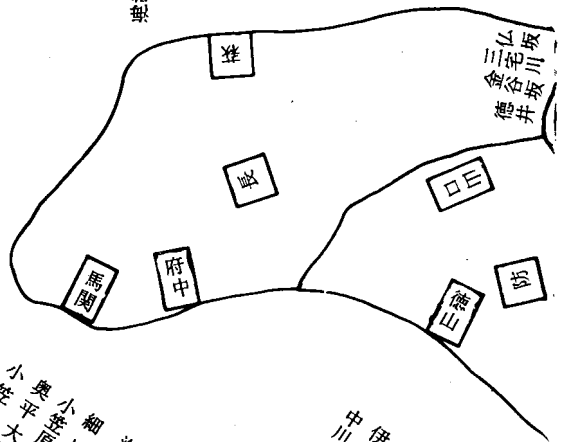


紀伊中納言殿

芸州石州数道間路之押

- 建部三三郎
- 織田山城守
- 伊東播磨守
- 一柳對馬守
- 丹羽長門守
- 関備前守
- 木下備中守
- 森對馬守
- 森美作守
- 朽木近江守

松平修理大夫 二 有馬中務大夫
 梅路 三 坂本 四 大塚 五 大塚 六 大塚 七 大塚 八 大塚 九 大塚 十 大塚



海防四國一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百

内藤平八郎

御進發御供

御老中

阿部〔正外、白河藩主〕豊後守

諏訪〔忠誠、高島藩主〕因幡守

陸軍惣奉行

松前伊豆守〔榮広、松前藩主〕

〔若年寄カ〕
手寄

松平縫殿頭〔天給兼頭、田野口藩主〕

立花出雲守〔種菰、下手渡藩主〕

御側衆

坪内河内守〔保之〕

小笠原加賀守〔長徳〕

酒井肥前守〔忠礼〕

大目附

神保伯耆守〔長興〕

土井備中守〔利思〕

外国奉行

田村肥後守〔直廣〕

四三〇 藩内錢相場達書

銅錢一文

代錢三文

右ハ吟味之訳有之、今日ヨリ御蔵々入払ハ勿論、御領
國中へ一同腰書直成ヲ以、致通融候様申付候、此旨
下略ス、

九月三日 〔川上久美〕
式部

右之通メツタニ直成被相替候間、市中其外疑惑ヲ生
シ、益々銅錢多事ナク、諸色モ高料ニ相成、尅文ス
ル品カ則三文ニ相成候、

四三一 島津圖書御感状

九月五日

一御感状尅通

一御太刀一振

一御鞍馬尅疋

〔久也〕
島津圖書殿

右当七月十九日、長賊犯 禁闕不容易御事之刻、諸
軍ヲ惣宰致シ被奉救

御危難之段、御感悦思召候、依之為軍賞右通拝領被仰付候、

四三二 小松帯刀へ御感状

- 一 御感状壹通
- 一 御太刀壹腰
- 一 御馬壹疋

小松帯刀殿 (清應)

右ハ当七月十九日、長賊犯 禁闕不容易御大事之刻、致粉骨奉救 御危難候段、御感悦思召候、依之為軍賞右之通拝領被仰付候、

右之通今日御直被仰付候条、此旨表方へ致通達與

掛御勝手へモ可相達候、

九月五日

(喜入久高)
攝津

右ハ後年ニ至リテハ格別ノ武功ト相見得候共、其節ノ規律ハ全ク無之、面々ヲヒノニ出張イタシ、幸ニシテ長賊退散イタシ候由、尤諸士へハ金貳兩ツ、ノ軍賞之由、

四三三 桂右衛門大目付ニ昇進

元治元年甲子九月六日転為大目附役、賜職田高二百石班、位着^(久運)島津主殿次、国老川上但馬伝命、

一大目附

一 御役料高貳百石

桂 (久武)
右衛門

右ノ通御役替被

仰付、御役料高被下置、席順島津主殿次可罷在候、

九月 但馬

四三四 地頭職復旧布達 (藩令)

九月八日

地頭職ノ儀ハ不容易重任ニテ、往古ハ居地頭ニテ、出軍ノ節ハ郷人数召列及出張、第一御軍制之旧格之處、後世文ニ至リ品々虚飾ノ事共被相行、其後無何相廢レ、只今ニテハ御格式之様ニテ被仰付来候間、是非御先代様地頭ノ旧格ニ被復度御趣意候得共、御領内余多郷々現実之通難被行訳モ有之、出軍之節ハ諸御役場ヨリ御人撰ヲ以物主被仰付事候間、先当分之通被召置、堺目要枢之場所文ケ居地頭被召居候、就テハ当分諸郷之儀、追々出軍被仰付候得ハ、平日疲労之煩無之、武備專要

之事ニ付、是迄狩夫銀ト申唱、御物並地頭ニ納來候得共、以來被差免候付、年々所ニ相屯置、居地頭又ハ地頭へ届之上、郡奉行・郷士年寄・組頭又ハ地頭へ届之上、郡奉行・郷士年寄・組頭預ニテ軍用相備候取計可致候、年頭・八朔御祝儀事、地頭吉凶等之節往来之納物有之哉ニ相聞得、一切被差免、年頭・八朔兩度ニ所産物輕品之内一品、居地頭又ハ地頭へ相納候様被仰付候旨被仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ相達、諸郷へモ不洩様申々可申渡、(早立)

但明所之儀ハ、先ツ是迄之通、右寄頭方預リ被仰付置候条、是又可申渡候、

九月八日 攝津 帶刀

龍衛 但馬

式部

四三五 議政所中止

議政所式日被相定、掛り役々出席被仰付置候へ共、思召之訳有之候ニ付、何分 御沙汰被為 在迄ハ、御休席被仰付候条、此旨向々へ可申渡候、

子九月八日 但馬

四三六 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

尚々一橋幕府之嫌疑ヲ避、元ノマ御戴物モ惣督ヨリ被相渡候筋ニ申上候半欵、誠ニ拙策ヲ行ヒ申候、

御兩殿様益御機嫌能被遊御座、恐悅之御義奉存候、陳ハ長州征討之義遅引之事殘志無申計候、尾張老公江関東より御目付兩人被差遣、金之御采配御戴相成、是非惣督之御受相成候様申參候由ニ御座候、迺も御受相成文ケニ無之模様ニ被伺申候、尾州ハ土民一向之徒、東本願寺焼失ニ付、徒党を組、混雜之向ニ被相聞申候、會藩故ニ焼亡いたし候故仏敵と相唱、是非通行ハ不被致との説も有之候由御座候、西本願寺を焼払候様、戰爭涯も、(光緒王)山階宮様より御沙汰有之候得共、決して不取合、尤西ハ長州江組し居、落人も相困居候由相聞得候付、會江相通探索いたし候様申置候処、又々此比ハ乃見織(重、長州藩士)衛等潜伏之由相聞得、是非此御方より火を掛候様、宮様より御達有之候得共、今更ケ様之事を謀り候てハ仏敵と唱れ、却て手之延兼候基ニ御座候間、此義ハ不_レ宜段御断申上置候、段々壯士之者焼度申立候得共、引留置候処、尾張之説共承り、よふこそ火攻を取止候と

相考居申候、後難之処を打返し勘考仕候事共御座候、一時之愉快を欲し候てハ、跡之難儀ニて被取返候事ニ御座候間、折角念を入候事共御座候、○天朝より之御褒賞、最初ハ御所江御家老御呼出有之、御品等直様御渡相成賦ニ御座候処、一橋よりは是非惣督江御渡被下、右より諸藩江ハ可相渡との段申上、俄ニ其御運ニ相成候由、実ニ朝廷ニ御人無之、諸藩之人氣を被失候事共、可嘆事共ニ御座候、委細表通御問越可有之、森岡才領(才領)ニて被差下申候、○小蝶丸之義、攻懸等之義、惣督之指揮を受、慥ニ相定候上差下賦ニ御座候処、何分延引之訳ニ相成候付、一篇ハ足輕兩人被差立候処、淀川ニて難船ニ逢ひ、御用封等都て流失相成、当分ハ飛脚等も遅着勝之事ニ御座候間、小蝶丸差下候間、翔鳳丸ニても、小蝶丸ニても、速ニ御差返相成義ハ相調間敷哉、(才領)いづれ大夫御帰京ニ付てハ、決て蒸氣船よりと相考候得共、為念御願申上置候、いづれ軍勢被差出候ニ付てハ、蒸氣船より被差出咎御座候得共、引船等之御手数相成候ハ、随分御都合出来させられ候半致、幕船借入も当分ニてハ出来申間敷、海軍方之船迄も取揚候由御座候間、相成義ニ御座候ハ、一艘ハ御遣ニ相成候

様御働可被下候、此度も守衛方人数流行病ニて多人數臥居、渴氣又ハ疫病相流行死亡多、看々難儀之者ハ不差返候て不相濟訳ニて、守衛方ハ専戰場を守りたし、病難ニ差迫候者ハ、御愛士之廉も不相立候てハ不被為濟との訳ニて、幸御国船參候付、御雇入ニて引船之都合ニいたし、小蝶丸江為引難涉申立候分ハ御下シ相成候間、左様御汲取可被下候、○攝海江異船相見得候間、(才領)早々木脇方江手ヲ付させ候処、別紙之通申出候付、異情探索不致候てハ不相濟、外国奉行談判ニ依事柄も相分義ニ候へハ、速ニ手を不付候てハ、間後れ相成、攝海江參候義も有之候付、有馬新助江戸より參居候処、(義成)東郷罷下候付、跡江被残置候得共、畠山等被差越候付、少しも支無之故、海江田武次差添、横濱探索ハ勿論、幕情承合候様被差遣候、明日出立と申場合之処、内府様より會・肥後・久留米等申談、將軍上洛を早々催候様周施可致旨御達御座候付、明日人を関東江差下賦ニ御座候間、其辺之処申付可差遣候間、外藩江ハ内府公より御達相成候様御願申上置、当月朔日爰許出立致申候、○南部彌八郎等昨日着いたし承候処、四国灘ニて難船ニ逢、余程難儀いたし、乍漸助来候由ニ御

座候、夫故遲着相成申候付、御問合之趣承知仕、南部江相尋候処、年符之処も無口能相談出来そふな模様ニ候得共、異人ハ余程利ニかしこひもの故、中々大体之事ニテハ受合六ヶ敷可有御座候付、若相談出来兼候ハ、別ニ策を承来候哉相尋候得共、左様之義ハ一円無之、軍艦之義ハ誠ニ当時態要用之第一ニ候ハ、御買入不相調候てハ屹と不相濟候付、六ヶ年符ニいたし、年々御産物之品を以、疏地ニおひて可相償との約束を、内々ニテ取究候ハ、異人之好む所、いつれ破言候ハ、嶋々迎も可救道も無之候付、早ク此方より先をいたし候て、爰ニ来れと呼掛候ハ、跡々処もいたし安、幕府之嫌疑ハ可相掛事なからも、随分しのき方も可有之候間、若談判不相調候ハ、右之一条を申込候様相達置候間、宜敷御勤考可被下候、又手付金一万兩ニテハ承知不致候ハ、平運丸を差遣置、是ニテ質物相成ものニテハ無之哉、其辺之処迄ハ相働候様相達置候付、宜敷御汲取可被下候、疏地ニテ産物を以軍艦之代品引結相調候ハ、不及なから私被差遣候ハ、随分弊害之なき様ニ取組可致賦ニテ、振切て相達候付、宜敷御汲取可被下候、拾七八万之現金を被差遣候てハ、迎も

補ふ道も無御座候付、是非品を以取組候手段ニ無之候てハ不相濟義ニ御座候、恐惶謹言、

大嶋吉之助

九月八日

大久保一蔵様（島津忠孝氏所藏本にて校訂、尚々書記職なし）

四三七 島津仲大目付格ニ昇進

九月十六日

一大目付格

一御役料高式百石

一加世田居地頭

一物主

島津 仲（公房）

右通御役替並地頭職被仰付、御役料高被下置候、加世田之儀、要枢之地沿海之事ニ候ハ、不容易場所柄ニテ、兼テ人心一和、武備不行届候テハ不叶事ニ付、一郷中ハ勿論、近郷迄致支配、文武ヲ引立、兵備ヲ練磨シ、御趣意十分拡充、每事行届候様心掛致精勤、伊作・坊泊居地頭へ万端引合可相勤候、当世体出格之以思召被仰付候条、此旨向

々へ可致通達候、

九月十六日

但馬

人心一和武備行届候義ハ、何ソ右郷々不可限、右様事々敷、別段不申渡候テモ、兼テ地頭ノ職分タルヘシ、勿論此節ノ居地頭ハ旧制ニ被復トノ事ニ候ヘハ、大方其人ヲ以視ル時ハ、少シ人オラ厭フノ機相見得候、尤旧制ニ被復候ハ、御身ノ德行御先君ニ不被基候上ナラテハ、御趣意貫徹之儀ハ如何可有之也、

四三八 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書

(勝安房守へ面晤賞讃)

(頭註) 元治元年
御而殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、陳ハ御当地之形勢はか行候塩梅更ニ無之、越前侯去ル六日御京着相成、直様村田巳三郎等江引合候処、非常之備ニテ御出張相成候訳ニても無之、平々之御上 京ニテハ御座候へ共、いつれ嗣將(副)之命を御受相成候事故、惣督之場を御勤可被成爲之御事ニ御座候間、是非征長之義惣督を不待御出張相成候様、戦は諸藩より可相勤候得共、征討之御処置被成下迄ニ候間、是非御振はま

り有御座度、此義ハ諸藩より押て御願申上候様可致、越藩よりハ被仰立かたき事と進言候得共、振切兼候様ニ被伺申候、畢竟御国内之混雑も有之、(采一) (再興紀事參照)断然之御策出来兼候事と奉存候、然処越藩より勝安房守殿江相談いたし、幸関東江下向之由ニ候間、將軍上洛を尽力致し呉られ候処、両藩より頼入候てハ如何可有之哉との趣有之候付、直様同意いたし、(采一) (幸輔)吉井と私下坂いたし、越藩よりも兩人被差遣、越侯之直書を以被差出候付、両藩より段々攻掛候処、幕府之内情も被打明候付承候処、誠ニ手之付様も無之形勢と罷成候事ニ御座候、畢竟幕吏之処、此度之一戦ニテ暴客恐縮いたし、もふハ身之禍を免れ候心持ニテ、太平無事之体と相成、奸威ほこり立候向と被相聞申候、左候て幕吏も余程老練いたし、何方ニ權之有るとハ知れぬやうニいたし成し、一同して持合居候姿ニ御座候、其内ニても諏訪因幡と申(中註) 高島藩主者魁首と相聞得申候、色々正義を立込候へハ、御尤と同意いたし何となしニ正論之者を退け候付、逆も尽力之道無之との訳ニ御座候、然らハ奸吏を遠け候策ハ無之哉問掛候処、一小人を退るニハ訳もなき事ながら、是を受取もの無之、つまり義論を立候者之倒る外無之

との事にて、如何とも運之付模様ハ無之事ニ御座候、乍此上も諸藩より力を尽し候義ハ有之間敷哉と、今一段攻掛候処、是以受統ものゝあれこそ行れもいたし可申候得共、薩摩よりケ様之義論有之候と、役人江持出候へハ、直様薩摩江被欺候人と申成し、落し付候様子ニ御座候、諸藩より尽力いたし候ても無益之事ニ相成との説にて、いたし方無之次第ニ御座候、幸阿部閣老上坂之処にて御座候付、為人相尋候処、余程ほめられ何軟計策を勝氏より被授候模様ニ御座候処、一昨日京着相成申候、勝氏ニも上京之賦ニ御座候間、此機会を見合候事ニ御座候処、私ニも閣老江申入置候間、得と談判いたし候様昨夜紙面を以被申越候付、是非拜謁を願、一問答ハ致し可申含ニ御座候、いつれ阿部其人ニ候ハ、諸藩より相助、幕奸之四五輩ハ、断然勅命を以打落し候策にて無之候てハ、逆も埒明申間敷事と相考申候、それ程之氣力も無之候ハ、必無策ニ踏候事ニ御座候間、決て口を閉可申義と相考居申候、勝氏江初て面会仕候処、実ニ驚人人物にて最初ハ打叩賦にて差越候処、頓と頭を下申候、とれ文ケか智略之有るやら知れぬ塩梅ニ見受申候、先英雄肌合之人ニ

て、佐久間(修理)より事の出来候義ハ一層も越候半、学問と見識ニおひてハ佐久間拔群之事ニ御座候へ共、現事ニ臨候てハ、此勝先生とひとくほれ申候、○攝海江異人相迫候時之策を相尋候処、如何ニも明策御座候、只今異人之情態ニおひても、幕吏を軽侮いたし居候間、幕吏之談判にてハ逆も難受、いつれ此節明賢之諸侯四五人も御会盟ニ相成、異艦を可打破之兵力を以、横濱并長崎之兩港を開、攝海之処ハ筋を立て談判ニ相成、屹と条約を被結候ハ、

皇国之恥ニ不相成様成立、異人ハ却て条理ニ服し、此末天下之大政も相立、国是相定候期ニ有御座との義論にて、実ニ感服之次第ニ御座候、弥左様之向ニ成立候ハ、明賢侯之御出揃迄ハ受合て、異人ハ引留置との説ニ御座候、右ニ付てハ、今よりケ様之議論を立て候てハ、決て破ニ及可申、又離間之策を用ひ候義無疑事ニ御座候間、攝海江異人相迫候節、初めて此策を唱出、急速ニ相決し候様不致候てハ、相成申間敷、一度此策を用ひ候上ハ、いつ迄も共和政治をやり通し不申候てハ、相濟申間敷候間、能々御勘考可被下候、若此策を御用無之候ハ、断然と割拠の色を顕し、国を富すの

第二不出候てハ相濟申間敷義と奉存候、乍然次第して申さハ、長征之処第一之訳ニ御座候間、折角促し立油断ハ不致候間、左様御納心可被下候、昨朝ハ肥後藩着ニて面會いたし候処、肥・薩之両藩を以長征を相願ひ、勅許を得て速ニ可打との義論有之候付、私方にてハ頓と諸藩之受も不宜候付、肥後さへ御差はまり御座候ハ、肥後ニ因て如何様共可致、其義ハ直様御同意之段申入候処、段々六ヶ敷故障言出候次第ニ御座候、是迄之肥後之情態より相考候処、余りよふ過候間、却て不安心之事ニ御座候、両藩にて引受と申義ハ逆も六ヶ敷と申出候ハ、如何程か激論を起候半、早速ニ同意之段申出候処、故障出来^(い脱力)たし、いまた本氣之もの軟不相分候、攝海異船処置之議論ハ本文勝之策同意之談ニ御座候、御国元江も肥後より御使者も参候由、如何之説にて御座候哉、征長之事共烈敷申たる哉、為御知可被下候、○御金繰之一条実ニ難涉之御時節にて、莫大之費用ハ相重候付、南部江御取結も有之候間、只今蒸氣船を以砂糖并唐菓種・煙草・鯉節様之品々御遣相成候て、初度ハ高利を欲せず、銅又ハ糸等之品を替候てハ、何様有御座候哉、今月・来月迄か糸之売出口にて、余程

直段も引下り候次第にて、一箱ニ付百両之違ひと相成候付、御国元織屋方御用も年々三百貫目ハ御買下相成由御座候間、爰許にて只今買入之手段いたし居申候、もふハ嫌疑処之事ニ無御座候間、振切て沢山買占両度とせぬやうニ大ごといたし度ものニ御座候、御内用金貳万両ハ御座候付、夫丈ケハ如何ニもして買入可申、十万両計買占度ものニ御座候へ共、手之廻候ハ、現在私面を突出シ、商法をやり度ものと相考申候、暴客之天誅を蒙るか、又ハ幕吏之刺客を蒙るか何ニしてもしれた敵ニ御座候間、此儀ハ是非相企度折角手を付置申候間、左様御納心可被下候、御用金も来年砂糖代ニ取続間ハ、何も見当無之由御座候間、のるかそるかの仕事をいたし度相舍居申候、此旨荒々大略迄如此御座候、恐々謹言、

大嶋吉之助

九月十六日

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

四三九 太守様御鞍置御馬御拝領ノ照会

九月十七日

四三九ノ一
今般

天朝ヨリ御移鞍一具、太守様被遊 御拜領候ニ付、御小納戸森岡清左衛門へ幸領被仰付、御船小蝶丸ヨリ被差越、御本丸へ今日御到来之筈候、就ハ中途幸領等之儀ハ、別段今日女房奉書御到来ニ付、先達テ申渡置候通ニテ、女房奉一緒ニ被差越、右御鞍之儀ハ二丸御門前通ヨリ御本丸へ御到来、其俣御番所へ被召置、御頂戴等之儀ハ追テ何分可申渡候付、御番人共氣ヲ付、龜抹之儀共無之様可申渡旨、当番頭へ申渡、可承向々へ可申渡候、

九月十七日

四三九ノ二
今般

天朝ヨリ御移鞍一具、太守様被遊御拜領候ニ付テハ、先般御馬御拜領之例ニ準シ、諸事致取扱候様被仰付候条、此旨可承向へ可申渡候、

九月十七日

但馬

四四〇 安田助左衛門日記抄

四四〇ノ一
子九月十九日

馬關田居地頭兼諸縣郡吉田吉松

安田助右衛門(ママ)

右当御役ニテ、右ノ通り地頭職被仰付、御役料米是迄ノ通り被下置候、当所ノ儀要極ノ地、不容易場所柄ニテ、兼テ人心一和、武備不行届候テ不相叶事候付、一郷中ハ勿論近郷迄致支配、文武ヲ引立、兵備ヲ練磨シ、御趣意十分致拡充、每事行届候様心掛致精勤、小林居地頭へ万端引合可相勤候、当世体出格ノ以 思召被仰付候、

九月

但馬

右ノ通於敷舞台御家老衆列座、但馬殿ヨリ被仰渡候、

四四〇ノ二
九月十九日

一若年寄

一御役料高三百石

伊集院(入道) 巨

右之通被仰付、御役料高被下置、席順島津出雲次ニ罷在候様、御直ニ被仰付候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

九月十九日 帶刀

元治元年 (1864)

四四一 地頭職被命人名

前書切破シテ不詳

一 総物主

名越 左源太

一 総物主

川田 将監(佐武)

一 当番頭

一 蒲生居地頭

一 伊佐居地頭

鈴木 壮七

兼帖佐・始羅郡山田

一 総物主

田中 仲二郎

一 御兵具奉行席

樺山四郎左衛門

一 末吉居地頭

兼百引

一 大目附格

一加世田居地頭

岩下 新大夫

一 総物主

島津 仲(久房)

一 坊泊居地頭
兼久志・秋目

伊集院 中二(兼直)

一大番頭格
御役料高百八拾石

一 御兵具奉行席

一 高山居地頭

兼内之浦

田原 直助

一 総物主
一 志布志居地頭
兼大崎・串良・相良(始之)

町田 少輔(久長)

右病氣

安田助左衛門(義宣)

石神萬兵衛

堀四郎左衛門

税所七郎右衛門

中山仲左衛門

迫水善左衛門

三原傳左衛門

島津織之介

仁禮舍人

山田轉

上村半兵衛

相良彌兵衛

蓑田源左衛門

右表ヨリ

御納戸奉行

山口彦五郎

御供目付

宮之原源之丞

御供目付

右御側ヨリ

表御小姓

大迫喜右衛門

御軍賦役

野村與八左衛門

橋口彦二

御作事奉行

寺師吉兵衛

右同
是迄之通

四本休次郎

御細工奉行

染川喜藤太

大山彦右衛門

御細工之内
一箇之勤

伊地知七右衛門

郡奉行

土橋九兵衛

右同

松橋彌五左衛門

吉井仁兵衛

御細工奉行

江田平太郎

郡奉行見習

河野七郎左衛門

御代官

松方正之進

御細工奉行

三木原 等

四四二 蛤御門戦争御褒賞

九月廿日

去ル五日、伝奏衆ヨリ御家老御用召ニ付、今御家老代

高橋縫殿被召出候処、於櫻之間両伝奏衆於御対面所今

般長藩等及暴挙候処、速ニ人数出張党徒ヲ追退候段、

叡慮不斜、依之移鞍一具賜之候旨、以

勅書被仰渡候 御品々之儀ハ、一橋中納言様ヨリ御渡

可相成旨被仰渡、翌六日御同所様ヨリ御引渡相成候段

御到来、昨十九日

太守様被遊 御頂戴候、依之御一門方始、島津圖書殿

並島津又六郎一列、其外諸士・与力迄御祝儀被仰付候

事、

九月二十日

〔数字志〕

〔一〕丹波

〔二〕攝津

〔三〕龍衛

〔四〕但馬

〔五〕式部

四四三 飯野澤原開墾地

九月二十日攝津殿并、イチ、壮之丞其外御役々、酒屋

并澤原転住者場所御見分トシテ御趣有之、廿二日御差

入、廿四日御立有之候事、

四四四 在崎汾陽報告及外国新聞紙

一 第九月廿一日〔廿八日〕夕刻来着セシ「タキアン」船ニテ、

此新聞紙ニ副フヘキ肝要ノ一事ヲ副タリ、但此一事ハ

満足トイフヘシ、

一 第十六日〔十六日〕午後、長門侯之使者再来シ、名判セシ条

約書ヲ持越セリ、是則方今出張ノ外国官人ノタメ、水

師提督ヨリ題セシ廉々ニ、右同侯承諾スルノ旨ナリ、

其廉々ハ則、

一下ノ關ノ砲台ハ打碎キシ俛ニシテ、新ニ造管ヲ為サ
ルヘシ、

一諸他國人諸他國人トハ外
國ヲ云フナランニ勝手ノ交ヲ免スヘシ、

一船舶ヨリ望ム要品ハ給与シ、相應其用ニ充テシムヘ
シ、但其為ノ費用ハ悉償フヘシ、

前件ハ、既ニ貌利太尼亞女王殿下ノ岡土江出ス廻文
コンシユル

ニシテ一見セリ、其文ニ曰、

商船内海内海トハ中国海
ヲ惣ヘ云フ乎ヲ通路スルハ容易ニシテ、其自

在ノ通行ヲ長州公向後儘ニ承諾セシ旨ヲ、岡土ノ權

ヲ以テ貌利太尼亞從者へ告知スヘシ、

右之趣横濱到來新聞紙中ニ相見ヘ候間、返訳之上自御覽
候、已上、

子九月十七日

品川藤十郎

下之關條約書、此節横濱より到來之由にて、品川藤十

郎返訳差出申候間、差上申候、別紙江過日差上候新聞

紙と御座候は、先日野村宗七方江差廻置候新聞紙之事

ニ御座候間、此段は御含ニ申上候、以上、

長崎在勤

子九月廿日

汾陽次郎右衛門

大久保一藏殿

(鳥津忠承氏所藏本にて校訂)

四四五 大坂城ニ於テ軍議ニ列シタル諸藩人名

御軍議之節

御城へ罷出候諸藩並ニ家老名前等

松平越前守

松平上總介

松平阿波守

福島直之進

松平美濃守

大音兵部

東郷吉作

松平相摸守

荒尾駿河

松平三河守

安藤要人

林善八

海老原極人

細川越中守

中澤廣江

小笠原一學

元治元年 (1864)

有馬中務大輔

吉田彦次郎

堀江徳次

差添

吉田慰平

道家角右衛門

松平備前守

日置數馬

松平出羽守

大橋筑後

同道

廣瀬助左衛門

松平讃岐守

堀多仲

松平讃岐守

佐治源五右衛門

久保田文助

佐治齊宮

立花飛驒守

由布安藝

松平安藝守

石井修理

矢島助兵衛

三宅万大夫

宮川登三郎

松平修理大夫

大島吉之助

松平右近將監

岡村源次郎

吉井幸輔

伊達遠江守

松根圖書

松平肥前守

中島彌大夫

岡野助左衛門

中老

中野數馬

亀井隱岐守

多胡兔波

渡邊儀右衛門

板倉周防守

金子外記

福原權藏

辻七郎左衛門

小笠原左京大夫

喜多村脩藏

奥平大膳大夫

濱田五郎右衛門

樋尾林助

有馬遠江守

有馬四郎右衛門

阿部主計頭

内藤角右衛門

大林金左衛門

松平主殿頭

松平左京

小笠原佐渡守

山田直輔

脇坂淡路守

脇坂縫殿助

松平壹岐守

佐々木要

脇坂覺兵衛

佐々木平左衛門

高木佐野右衛門

松平佐渡守

今村左大夫

三浦備後守

戸村豊

松平近江守

今村文之助

板倉攝津守

森岡喜多右衛門

岡田直之助

差添

津久井善助

本多肥後守

武間四郎右衛門

小笠原近江守

喜多村増藏

同 源次左衛門

松平主計頭

雨 森 鎌 三 郎

小笠原幸松丸

喜 多 村 増 蔵

中納言殿

尚々肥後守儀ハ御同道可有之候、天下ノ安危此秋ニ候事、

四四八 安田助左衛門日記抄人吉異変

四四六 大久保一蔵ヨリ西郷吉之助へ書翰

〔第四卷(慶応二年九月二十三日)に同文あり削除〕

四四七 大樹公外国人応接云々上奏書

只今左ノ通 御書附御廻達候間、疾御存知モ可有之候得共、入御覽申上候、

九月二十六日

〔正徳〕
藤 井 宮 内

〔政風〕
内 田 仲 之 助

一筆申進候、外国人為応接昨日豊後守罷出候処、只今罷歸候処、委細承候処、天下ノ重事実々絶言語候次第ニ至候間、即刻御下坂可被成候、書外ハ可申入他事無之事、

九月廿六日

家 茂

九月廿八日求磨人吉城下へ異変ノ聞得有之、馬關田横目差遣、且彼地へ差越居候加治木家中松葉甚助ヨリ、所喫方へノ書状相達候処、去ル廿五日夜半拾三四家内ノ者共所へ、上意ト声ヲ掛踏入、老若男女三十人計打果候由、右者共儀君命ヲ背、我意ヲ立、終ニハ大事ヲ可相企模様露顯ニヲヨヒ、打果相成候由、右形行御用人迄早々申越候事、

四四九 言路ヲ開カル(藩令)

九月晦日

存慮有之者ハ封書ヲ以、筋々へ相付致言上候様、追々申渡候得共、猶又府内下々ノ情態ハ勿論、領内民間ノ疾苦等巨細之物情ヲ上達イタシ度存候ニ付、明朔日ヨリ御樓門内へ、上書箱我等切封ニテ差置候間、百姓町人ニ至ル迄存慮趣致言上度者ハ、封ニテ姓名ヲ書記可

差出候、左候テ諸士無役之面々、右手筋ヲ以上書イタシ度者ハ、其通ニテ不苦候、此段末々迄可申渡事、

子九月晦日

右二付御家老衆添書ハ略ス、

下情ヲ察シ、民ノ疾苦ヲオモフハ、国君第一ノ勤ニシテ、一日モ廢シ忘レ玉フヘキニアラス、上書杯ニテ民ノ疾苦物情御上達候ハ物議ニシテ、別テ氣遣シ、常ニ人ヲ用ヒラスンハ、誠ノ道ニハアルヘカラス、

四五〇 松木五代ノ兩人横濱ニ放タル

頃日江戸長崎等ノ通信ニ、松木安右衛門・五代才助ノ二名ハ横濱ニ放タレ、五代ハ長崎ニ来リ、英商ガラバナルモノ、住家ニ潜匿シ居ルノ説アリ、此等ノ説ヲ聞ヒテ壯士等ハ素ヨリ、一般此二名カ怯懦ナルヲ憤リ、其罪ヲ匡サンコトヲ喋々ス、斯ク憤ル所以ハ、二名共ニ当時船奉行ノ職ヲ奉シ、掌ル処ノ氣船掠奪セラレ、加之虜トナリタルハ生ヲ貪ルノ甚シキ、臣子ノ分尽ササル其罪重シ、宜シク軍律ニ問ハサルヘカラスト、要路ニ就テ責論スル者寡ラサリシトナン、中ニ就テ五代ハ氣船購求ノ事ニ就テ、英商ガラバ等ト謀リ、許多ノ

財ヲ得タルノ説アルカ故、其事実弾糾セズンバアルベカラスト喋々ス、

編者曰、英商或ハ和蘭人ボートインナルモノ、謀リ、汽船購求ノ手数金巨額ヲ得タリト説喋々たり、素ヨリ虚実分朗ナラスト雖モ、當時車ヲ唱ヘタルトナリキ、五代元來富有ノモノニ非ラス、三年前迄ハ一寒生ナリシカ、近頃遽ニ富ヲ致シ、長崎ニハ妾宅ヲ構ヘ、或ハガラバナル者カ金庫ノ鑰鑰ハ五代ニ委セタリトモ云ヘリ、是ヲ以テ考フレハ、世説モ既言ナラサルカ如シ、若シ果シテ説ノ如ナルニ於テハ、當時内外多難、從テ經費莫大、國庫匱乏ノ時ニ方リテ、氣船ハ必用虧ヘカラサル要器ナルカ故、國庫ヲ掃テ購求セラル、ニ、私利ヲ謀ルハ、臣子ノ分ニ於テ尤覺之ヲ何トカ名ツケン、一般喋々タルモ又理ナシトセス、○因ニ云、慣習カ將タ商業ノ公法カ、物品購求ヲ依トキハ、手数金ヲ中人ニ予フ、其數二分口錢ト云フ、則チ百分ノ二、之レヲ當時ノ通法トスト云フ、○昨壬戌ノ春ヨリ購求セラル、処ノ汽船、大小五艘、此艦金凡三十万兩ニ近シ、其百分ノ二ハ則チ三万兩ノ巨額ニ及ノ算ナリ、○通ノ五艘皆五代カ手ヲ以テ、ガ
(ママ)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年十月ノ一

〔扉に、表紙と同じ文字の外に「元国事鞅掌史料」(紙数四九枚)の記載あり〕

目録

長州征伐ノ紀事

吉川監物ヨリ本藩高崎へ依頼ノ書牘

小松ヨリ大久保へ贈ル書牘

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ贈ル書牘

木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

小松ヨリ大久保へ書翰

安田助左衛門日記抄

折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ送ル書牘ノ略

御城下各砲台遠撃試験

在崎汾陽報告

町田民部褒賞

小松帶刀書翰

小倉出張園田報告

大島吉之助ヨリ総督尾州侯へ呈出ノ書

在京西郷ヨリ蘆屋在陣副総督島津主殿へ照会

喜入攝津長州征伐ニ付出陣被命

西郷吉之助ヨリ小松帶刀へ照会

江夏蘇助ヨリ海江田武次へ書翰

太守公御親書ヲ以御布令

津田山三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

四五 長州征伐ノ紀事

子十月朔日、四番組御城下守衛仁禮舎人殿談合役ニテ、

〔仲信〕

下人直助召列、当日八時分出立、陸路通行、同月十四

日筑前蘆屋へ致着、滞陣ノ内追々長州ニモ平和相成、

丑正月元日総勢解兵被仰出、同月五日蘆屋出立、同十

五日日出度致帰陣候事、

四五二 吉川監物ヨリ本藩高崎へ依頼ノ書牘

〔毛利慶親〕

過頃本家松平大膳大夫家来之者共、恐多モ於輩下粗暴之参り掛り、誠ニ以テ奉恐入候、全ク出先之者心得違ニテ、大膳大夫父子不存寄事トハ乍申、畢竟兼テ示方不行届ヨリ、斯ル時体ニ立到り候ニ付キ、素ヨリ別心無之、恐懼相謹、国内鎮静精々申付候、於拙者モ乍不及尽力申談候、然ル上ハ何卒御寛大之御処置被仰出候様、御周旋之儀奉願候間、可然被仰合可被下頼存候、猶今田鞆負可申伸候、恐惶謹言、

十月二日

吉川〔經幹〕監物

朝稻兵助様高崎五六変名

覚

用人役	香川諒山口ヨリ使	横道八郎次
用人役	近習頭兼	安達十郎左衛門
山口家老		今田鞆負
家老		吉川勇記
全		桂主馬

以上

如斯書翰及今田ヲ以テ倚頼セラレタリ、吉川監物事ハ

当分山口へ差越居候ニ付、右ノ人数為使者岩國迄参リ、〔本〕〔五六〕高崎へ面語、哀訴倚頼尤モ懇到頻願セリ、

四五三 小松ヨリ大久保へ贈ル書牘

四五二ノ一

尚々於盛島津國書久治君ノ難妹ナ、國父公御養女ニシテ、佐土原候へ嫁セラレタリ様御縁辺之義モ、当分吟味中ニ御座候間、追テ之便ニ可申上候、大島本姓ニ復セラレ候義、当人ハ何様共命次第ト申事ニテ、本姓西郷名字相名乗候様、被仰付候段被仰渡候、此段モ何分御申上置可被成候、

一筆致啓達候、

上々様御揃御機嫌克被遊御座候、恐悦御儀奉存候、二ニ貴公ニモ御堅勝被成御勤奉珍重候、然ハ下拙モ出船〔天分島〕後、佐賀關迄ハ都合克平和ニテ、二十二日昼時分ニ着イタシ、石炭等積入候テ直様出船之賦御座候処、風並不宜廿五日迄滞船、二十六日早朝ニ出船イタシ候筈ニテ、四五丁位出掛候処、器械相損シ運動不出来、無拠其日滞船修甫相加、廿七日ニ出船、廿九日昼時分浪花へ着、当所ニ御用向有之、一日滞坂ニテ、去ル二日ニ京着安堵仕候、直様当地ノ形行共細々承候処、先尾老〔高〕公モ御振ハマリニ相成、征長之事件ハ運立候模様ニ

御座候、夫ハ扱置攝海夷船之条相迫リ居、何レモ心配中ニ御座候、併今日迄ハ先ツ為何事モ無御座候、越前モ当公昭茂出京ニテ、副將之御請モ有之、頻ニ早目出軍ニ相成度旨、惣督ヘモ尽力有之、一昨日尾老公モ弥御請ニ相成、不日浪花ヘ御下リニテ軍議決定之由、昨日惣督之方ヘ諸家重役呼出御座候付、大島西郷隆盛差出候処、来ル廿日迄ニ浪花ヘ相揃、軍議可有之ト之事ニ御座候、書面ハ表通差廻候付、別段差越不申候、今少シハ早く相運候様ナモノニ決定之上ナカラモ、因循ニ流レ込リ入申候、併此節ハトチマリ出来サウナ向ニ御座候、爰許ヨリモ御国許人数、急応隊トシテ、以前ヨリ相詰居候御城下・諸郷之人数、藝州路ヨリ被差出候筈ニテ、最早手当モ出来居申候、右通之形勢ニ相成候モ、肥後・越前・此方三藩之尽力ニテ相成候事故、出立前切り入り口臨機ニ被成度、御願立之儀モ、最初萩之先鋒之命相下リ候折ニ、当所ニテ閣老之方ヘ臨機ニ仕寄候段ハ、大島杯ヨリ為申出置由、其上惣督ノ方ヘモ深く其辺ハ談判イタシ置候間、御差出ニ不相成方可然、御都合ニハ決テ不差支義ト吟味仕候、勿論此方ヨリ切り入り口辺之所、何ノ軟ノト申テハ、諸藩之所モ又因循ニ相流

レ候向ニ候間、漸々只今ハマリモ付キ居候ニ付、先ツ御差出不相成候テモ、御都合ニハ決テ不差支候間、又機會ヲ損シ候モ如何ト相考申候間、邂逅被仰付候ヨ、余リ見計取扱ニハ候得共、右之形勢故扣置申候、將亦大島・下拙等曳取之儀モ直様申談候処、大島モ直様当人罷下ニハ聊異論モ無之候得共、何分攝海外夷之事件差迫居、実以不捨置場合ニテ、彼是吟味之上今暫ク相見合、兩人ナカラ一時ニ引取出来兼候ハ、兩人ノ内一人成共早々罷下申候間、左様御心得可被成候、何分夷船渡来イタシ候ハ、朝廷之御危難差見得、不得止事之場合ニテ、直様之所丈ケ見合候都合ニ御座候、尚細事之形行ハ近々幸五郎繁原名差立申上越候、安行丸モ追々御差廻之筈、着船之上ハ翔鳳丸モ出船為致、旁申上越合ニ御座候、橋邸一橋ヘモ昨日罷出候処、矢張嫌疑幕府ノ嫌疑ヲ云フ後卷ニ詳記スヲ御受ニ相成、御込リ之由、併異船碇泊ニモ相成候ハ、大難事之場合故、身命ヲ捨御尽力可被成ト之事ニ御座候、尚細事之形勢ハ、大島ヨリ可申上候、差留之形行為可申上、急キ飛脚差立、此段申越候条、達

貴聞候儀共ハ、可然御取計可被成候、此旨如斯御座候、

已上、

十月八日

小松帶刀廉清

大久保一藏様利通

追テ公私取交ヘ乱筆御免、蓑田衛兵士ヘモ別段申
越不申候間、可然御鶴声奉願候、

四五三ノ一
小松帶刀別翰

陽明家両宮様、一橋公ヘ御伺之御使相勤、被進之御品御
書等差上候処、何方様モ別テ御恭被思召厚御礼、便宜
ヲ以申上候様被仰付候間、可被致言上候、尤陽明様御
鎧甲冑製作所ニ於テ製造、色装ノ細具ナリ、革製面高威ニ金銀ノ御紋數十個ヲ付
ケ、最モ美麗ヲ尽セリ、久シク太平ノ世ナルカ故、甲冑モ所有セラレサリシ
ニ、乱世ニナリタルカ
故御所望ニ依テナリ、御紋所ハ布テ、此御方様御紋相付居候
処、永々其訳合ヒ相立御仕合之由、御鎧・御短筒之御
礼宜敷申上候様致承知候、此旨申越候条可被致 言上
候、已上、

十月八日

小松帶刀

大久保一藏殿

追テ海江田義モ未帰京夷情探索ノ為メ、江
戸ニ出タルヲ云フ不致、夷情之程
モ相分不申、併不日ニ罷帰候半ト相待居申候、岩下方
當時在 江戸在 毛上京イタシ居候得共、当所御用向モ相仕舞、

今日帰府被仰付候、左候テ関東御用相廻、当地ヘ罷
登候様申談置候間、其辺之所モ可被致言上候、旁細
事ハ幸五郎便ニ申上候、

四五四 西郷吉之助ヨリ大久保一藏ヘ贈ル書翰

四五四ノ一

御向殿様忠義公・久
光公ヲ云フ益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉

存候、陳ハ去ル廿九日、飛脚被差立候賦ニ御座候処、

帶刀殿松廿八日御着坂相成候段相分候付、暫御見合相

成居候処、長征之義もそろ／＼御運相付模様ニ成立、

尾老候同惣督御受も相調、一昨日御達相成候義ハ表通

御問越相成候事と奉存候間、文略仕候、此以前尾州田

宮如并長谷川壯藏と申者江引合、色々と攻立候処、最

初之程ハ將軍進發之上、差図を得得可相発との向御座

候処、追々関東よりも將軍進發を不待可相發旨申来候

由にて、越藩よりも敵敷責付候処、少しハ腹も居ひ候

て、諸藩情実も相分り、天下之動静も吞込ニ相成候塩

梅ニ成立、いつれ各藩より力を添、尾藩を助けて長征

之急務を弁し可申と肥後・越前と申談し、此議ヲ差テ

急立候義ニ御座候、其内ニハ段々異議寛急之論も相起

候得共、長征急務之第一ニ相決、一向ニせり立候義ニ

御座候、就てハ萩口之懸場之一条ニ付てハ、爰許にて吟味仕候処、先便申上越候通、懸口を替候義を申立候てハ、臆病之様ニ申触し、俗説發立候義別条もなき事にて、御当地之戰爭御当地之戰爭トハ七月十九日京師ノ戰爭ヲ云フニ出来候間、少しハふてかせ候心組にて、態と幕府ニおひて見立候事軟と相考候義ニ御座候間、攻懸之挙動ニ依り如何ニも可相交との趣意にて御座候間、惣督ニも萩之義ハ地理御案内も被為在候半、遠干潟且北受難海之段承及居候間、決て難渋かる訳にてハ無御座得共、難場と知りながら敵之意中ニ陥候てハ、誠ニ拙き業ニ御座候付、御当地江罷在候人数、半分丈ハ国兵之救応として藝州地ニ懸り、陸地より差出度候間、聞置呉候様申立置候、勿論御達替ニ相成候節、直様閣老江も相通置候旨相斷置候間、帯刀様 御国許にて御論決相成居候、懸場之義御申立之一条ハ、御見合相成、藝州地江乗込候て、敵之挙動ニ依り、御懸口之義ハ、若松之御本陣江御注進申上候様可仕候間、左様御汲取可被下候、初て之戦ニ出来候処、此長攻ニおひても余程心を用ひ候場合にて、又此一戦ニ仕損候てハ、初戦初戦ハ京師ノ戦ヲ云フ之勝もむたニ相成、天下之胆を挫き候義も出来不申候ニ付、至極

念を入れ候事ニ御座候、纔の事なりとも勢を張と衰との場合も御座候付、久留米久留米ハ柳川而藩懸リ口替換願書ハ第九三卷ニ記ス々々ハ、懸口故障申立、被相替候様申出候由御座候へ共、此義ハ勢ニも相拘訳ニ御座候間、御見合相成候方御宜かるへく奉存候、自然機ニ応し懸口ハ不相変候てハ濟間敷との惣督之存慮と、被相伺申候間、仕合之事ニ御座候、大坂にて之軍議不宜、人心ニきさり候致候間、御当地にて決議相成、大坂ハ一二泊にて繰出候様、越藩より頻ニ議論相立候間、定て是丈ケハ其通り可相成と相考居候処、大坂ニ於て軍議と御達相成申候、畢竟尾藩ニおひてハ、幕府よりの責ヲ塞候迄之趣意と相見得申候、乍然ケ程やり立候故、是非長征を不仕掛候てハ、もふハ不濟勢ニ成立候間、少しは延も致せ弥相調候義ハ、別条もなき事と奉存候、大坂にて懸口等之談判ニ相成候ハ、萩と不究機変ニ依り攻掛候様申立へく候間、左様御合可被下候、○長州之動靜追々承候処、吉川至極正論を立一応ハ六ヶ敷場合も御座候処、近来ハ一同吉川之論ニ帰し、官兵江向戦を成し候向にてハ無之、国境迄改服改服トハ麻下則正服ノ通稱ナリにて出張いたし、号泣哀訴可致との存慮と相聞れ、殊ニ暴激之者ハ悉く幽閉

申付候て、三人之家老國司・益田、萩ニおひて牢込ニ相成、
嚴重之番兵ニ相成候由、徳山ニてハ色々不堅固之廉も
為有之由ニて、右等之次第と相成候付、墓々敷戦も有
之間敷、乍然其刃之処ハ御所置振ニ依る訳と相考申候、
若何も御採用無之、如何ニ降を乞候共殺尽と申訳ニ成
立候てハ、決て暗々と首を差出申間敷、又死兵と相成
戦争いたし候て、急ニ攻禿ハ六ヶ敷かるべくと、相考
居申候て、先便ニも申上越通、私ニハ藝州江早く踏入、
吉川辺之処を説立候賦ニ、申上置候処、筑前藩喜多村
某吉川江面談いたし候て上、京仕、吉川情実具ニ申述、
藤井節良杯江相談も有之候由ニて、高崎兵部五六を右人江
差添差遣候ハ、余程可宜との訳承候付、早速望ニ任
せ被差出候間、左様御含可被下候、是非長人を以、長
人を所置いたし候様為致度ものニ御座候、いつれ成兵
を以相迫候処ニて、降を免すとも、征伐之御扱ハ不相
立候てハ、不濟義ニ御座候間、夫等之処ニて纔五六万
石ニて国替五六万石ヲ削とハ不相成候てハ、国を消候迄ニ
てハ、往先、御国之御煩御國トハ全国ひヲ云フナランも出来候半軟と相
考居申候、(毛利)元就之功劳を思食有て、社稷ハ不相絶共、
ひとりめニハ逢せず候てハ相濟間敷、若戦をいたし候

ハ、論ハ無之事ニ御座候、先度も申上越候通、十人
七月十九日京師ノ戦ニ生捕ノ者ヲ云フ、之禽之ものハ兼て礼ヲ篤くいたし御養置
被下候間、打入之日ニ到り丁寧ニ申説し、放ちやる賦
ニ相決置候間、是又左様ニ御含被下、宜敷御取成奉願
候、恐惶謹言、

西郷吉之助盛隆

十月八日

大久保一蔵様通利

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四五四ノ二
前書ニ属シタル報知書左ノ如シ前八日ノ報知ニ副ヲ

水府ノ大混雑沙汰ノ限りニ御座候、有志連モ二ツニ相
分レ、俗党・激党ト相唱候由、一方ハ奸党ニテ幾度モ
合戦ニ及候由ニ御座候、然処(松平大炊頭頼徳)穴戸侯為御目代水戸表へ
被相越候得共、奸党之者共城中へ不相入、是又合戦イ
タシ、既ニ一城踏破勢ニ成立候処、田沼侯江加勢ヲ乞
ヒ、幕府ノ人数ヲ繰込候付、無拠山野辺之一城ニ陣ヲ
取、穴戸侯ハ只安然トシテ傍觀イタシ被居候由ニ御座
候、水当候ハ水戸当候奸党ヲ御用ヒ相成、幕府へ阿従イ
タシ、此大破ニ及候事ト被相聞申候、幕府ニオヒテハ、
此機会ニ乗ジ、水戸ヲ打チ崩ノ策ト相見得、両虎相争

ハセ候謀ト相聞得申候、迎モ水戸ハ今通ニテハ倒レ候外無之様子ニ御座候、筑波ノ党モ別ニ相分レ候、天狗連ノ名ガ三派ニ分候向ニ御座候、然レ共奸党ヨリハ、三党共相惡シ候姿ニ相聞得申候、実ニ數敷次第ニ成立申候、

(大西郷書翰大成にて校訂)

四五四ノ三
前報ニ屬シタル報告、

異人江当月七日七月七日江戸ニおひて談判之趣意、去ル廿四五日方、阿部閣老侯白川より

朝廷江被申立候由、右ハ長州ニテ

朝幕之命を蒙り、異船江砲発之次第ニテ、決て暴発之訊ニ無之趣異人江申述、其段を強く押張ひ候向ニテ、是非此度ハ攝海江乘廻、

帝王と条約を不成候てハ、人心之折合も不宜向ニ被相聞候間左様ニ可致、当時諸色高直之所を以相考候処、

鎖港之様子と被相察候、是非鎖之存慮ニ可有之哉、得と承度との事ニ御座候由、然らハ開港可致と速ニ返答も難致、又鎖港可致段

朝命を以被 仰出候義とも不被申、実ニ込入候次第ニ御座候段被申上候処、

関白様より御返詞之趣ハ、大樹自ら鎖港之御受ニも相成候訳柄ニ候へハ、只今開港可致との御伺も難出来次第ニ候へハ、朝廷よりも御即答相成事件ニても無之、只御咄ニいたし候事哉と被仰候処、卒度御咄申上候訳ニ御座候段申上置、夫形帰参仕候て、一橋江相詫、迎も 朝廷之御受不宜、十分之処難申上罷帰候付、幕府ニおひて都合能取計候様ニとの

朝命相下候処、尽力いたし呉候様、阿閣阿部侯より承候段、一橋より 朝廷江、又々申立候由ニ御座候処、

関白様より御返詞之訊ハ何分ニも重大之事件ニ候得ハ、速ニ御返詞可被遊訳ニも無之、いつれ長征を速ニ為運、將軍上洛之上屹と御達可有之、只今決て御達ハ無之段、押切て之御沙汰ニ御座候由、然処最早異人は談判之日より三十日之内返答可致約定ニ御座候処、七月よりハ期限も可相過候付、是非此度何と欵被 仰出度、又々相願候由、然共期限を定め候義ハ、 朝廷より之御達ニても無之、幕府ニおひて勝手ニ取究候事ニ候得は、其辺之処ニ御構被遊訳更無之との事ニ御座候由、余程幕府も心配と相見得候付、定て攝海江ハ当年中ニハ相廻可申事と奉存候、乍然幕府ニおひても吟味

有之、攝海江差廻、朝廷より異人御所置被爲付候ハ

十月八日

大鳴吉之助盛隆

、幕府ハ其節限りにて禿可申との評議も御座候て、
大心配之筋と相見得申候、右阿闍より言上之事件ハ、

大久保一蔵様利通

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

内府公近衛殿より承知仕候事ニ御座候、○岩下佐次右衛門平早打にて罷登申立候趣ハ、將軍上落之義、得と

大久保越中守旧名と相談候処、只今にてハ闍老辺より

御直披

幕役之者可遮人も無之候得共、只因循にて急速不相運

昨日加藤十兵衛より、此節なら原喜左衛門通其外より長

候付、闍老辺江相迫候様可致と申居候由、就てハ天

藩一条等聞合被仰付相動申候、右ニ付てはいづれ探索

璋院様より一口出候へハ、闍老辺にて遮る事も不出

掛と申名目、表向御書付を以不被仰付候てハ、聞合出来
不申候間、右之趣奈良原喜左衛門江申出候処、早速御

来、何篇行れ候勢ひにて候間、此御方江尽力可致との

家老衆江申上、其通可取計との事ニ候間、聞置候様申出

事ニ御座候処、御国元江伺越候てハ、急速之間ニ逢

候、就てハ胸中一物可有之事とそんし申候間、左れば

ひ兼候付、近衛様江申上、御内書御遣し相成候て、

問者之額ニ問者と書てあるく様な事にて候、尤探索ト

備後志様よりも御直書被遣候ハ、其御都合も可宜との

聞合トハ、少々字意も相替り候様にて、表立可被仰付

の存慮ニ御座候故、直様内府公江申上候処、御直書

儀ニも有之間敷、其許ニハ御内用掛りも被仰付置候間、

御渡相成、内府公より備後様江も相達相成候処を以、

是等之儀ハ御内用之的面ニハ無之哉、拙者ニは些不用

御書被進候筋ニ、内府公江も申上、其運不相成候て

意ト申達候処、左様にてハ無之、聞合ニ付てはいづれ

ハ、中将國父様思召之処も如何と御案可被遊、御疑ひ

上伸仕、其外之者共召仕不申候てハ不相叶、表向探索

之廉も可有御座儀と之訳にて、かく迄ハ相尽候付、左

掛不被仰付候てハ、下々江対し威望無之との事にて、

様御汲取可被下候、右等可申上ため飛脚差立候付、宜

例之権柄を振ひし本意ニ御座候間、決て右様文盲成名

敷御取成可被成下候、恐々謹言、

目等、御取上ケハ有之ましく存候得とも、為念申上候
間御勤者可被下候、当分之御内用掛りにてさへ大ニ権
柄をふるひ、下々江対し候てハ、なに御留守居が、な
に見聞役がト申口氣にて、御家老衆江自分より一口申
上候へハ、直ニ勤も舞あがるなど、申居候由にて、つ
まる所ハ御出入申上候御方々様、御名を汚し候ものハ
此者にて候、先日も此者儀一両輩江議論ニ及候処、拙
者狭量之様ニ申方も有之候へ共、全ク左計りにても無
之、孔明か魏延を生ケ置しハ孔明才力之事にして不可
真似、舜之四凶を誅せられしは、衆人の為ニ所置有之
候掟にて、私不平之手本ニ御座候、此者儀ニ付、色々
混雜ハ難申尽候、百間堀掛など誠ニあふなき事ニ候、
委事ハ上京之上可申承候得とも、右探索掛之儀申上置
たく、筆ニまかせ如此御座候、恐々謹言、
(清生)

木場傳内

十月八日

大久保一藏様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

四五六 十月十二日小松ヨリ大久保へ書牘

御両殿様御機嫌克被為入候半と珍重御儀奉存候、於爰

元備後^{忠鑑}君^鑑様御勇健被遊御座、珍重御儀御同慶奉存候、
貴様愈御堅勝可被成御勤奉南山候、然は当地之形勢は、
去ル八日ニ飛脚差立申上候通ニ御座候処、昨夜長征到
着日限惣督より御達ニ相成、尾張・越前ハ今日御暇之
参

内有之、十五日ニ当地発足にて浪花江下りニ相成、夫
より出軍之由、越前ハ九州表江出軍相成と之由、此御
方淀川御通船御借用之事共有之候付、外ならぬ御訳故、
御借舟被進候方可宜と申談、其御都合いたし申候、右
之形行ニ付ては、御国元御人数も、日限通ニは着到相
成候様有之度、爰元よりも先度申上越ニも相成居候通、
御国元人数之応援として、諸軍被差出賦ニ決定いたし
申候、惣裁ハ高橋^殿江被仰付被差出答御座候、人数書は
表向御問合ニいたし候間、致筆略候、西郷・下拙等曳
取老条も段々吟味もいたし、西郷ニも征長江出張、夫
より罷下形行言上可致と決議ニ相成申候、下拙ニも模
様次第ニは早々引取候心得ニ御座候、右ニ付ては前後
当分之形勢にて、吟味之趣も有之、細事幸五郎^{奈良}江
申合差下候条、篤と御聞取可被成候、爰元より出張之
人数も、模様次第ニは御国元江引取候筋ニ内々申談置

申候、旁詳細之形行申上候為ニ幸五郎差立、万端申合越候間、御聞取達

貴聞候事件は、可然御執計被成度奉頼候、尚追々形行可申上候、早々頓首、

十月十二日

小松帶刀

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四五六ノ二

再啓、時下随分御保養可被成候、此節ハ最初ヨリ惣裁之処ハ、高橋へ御内達ニモ相成居、其上此内人数被差出候節之惣裁之事モ御問合モ有之、当人へ被仰付候、此節ハ是非出軍イタシ度相楽居候処、右之次第誠ニ残念至極ニ御座候、西郷ニハ出陣ノ賦ニ下拙着イタス内ニモ相定居、其上切掛リ候上ノ処モ大事之場合ト申談、副將ト申場ニテ表向ハ差引ト被仰付、出陣被仰付申候、出軍跡之処モ色々ト説モ被行、不肖之身甚苦心之至ニ御座候、何モ細事ハ奈良原へ御伝言申上候、公私交乱筆旁可然御推覧可被下候、

四五七 安田助左衛門日記抄

四五七ノ一

子十月十三日鹿府出立、家来下人四人・家内三人召列候テ加治木泊リ、十四日栗野、十五日馬關田地頭館へ

〔宮崎県えびの市〕

着、

別冊之写、当所出張肥後藩竹崎律次郎と申者より入手仕置候、佐賀侯之御国触も同藩寺尾太門と申者、此内肥筑諸所へ致経廻写取置候由、同人より承届申候、且亦水戸侯并外夷より之届書等は、江戸・大坂滞逗肥後之藩中より内々洩越候由御座候、併虚実之処は相分不申候得共、写取置為御見合、別紙園田彦左衛門より之御用封江相添差上申候、以上、

小倉滞在

唐物締横目勤

十月十四日

土持平八

〔編者〕

御家老座

奥掛勤

田畑平之丞殿

市來正之丞殿

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

四五七ノ二

文久四年四月廿六日夜我方ニ告知

夷狄掃除之事ニ付テハ、五月十日限りニ有之段、京師ヨリ我方ニ告達アリ、則其領内海岸防禦之儀ヲ専ニスヘシ、若シ彼等襲来イタシ候様ノ儀アラハ、此儀諸大

名並旗本へ無洩通達スヘシ、

四月

右ハ水野和泉守京師ニアリシ時、通達アリタリ、

真写 六戸行馬

子十月十四日

訳

堀 壮十郎

四五八 十月十五日折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ送

ル書牘ノ略

黒田嘉右衛門旧名清綱帰府ニ付啓上仕候、其後御機嫌能御
精勤奉恐賀候、随て私共発足後、所々御使節之趣首尾能
相仕舞小倉江到着、早速要路小倉藩吏ヲ云フ江面議仕、陣営場
并ニ仕寄之遠近得失、賊徒之虚実等細々勘考之上、応機
変応接仕候次第、委細は嘉右衛門より御聞取可被下候、
左候て今般京師より之云々細々被仰聞、別て難有奉存
候、右ニ就大島よりは御国勢若松辺江宿陣、先ツ京師
より之官軍を以て、萩口之衝路を開可申との趣ニは、
奉承知候得共、元来海軍御断被為在、応機変御見切を
以、御征伐之上ハ、第一賊之虚実を計可申儀ニは候得
共、自余之官軍ニ後れ候義実ニ武門之大恥辱と奉存候

間、寸歩も賊地江相迫り、不意之驍戦肝要と嘉右衛門
諸共ニ熟談仕置候、尤地形并ニ陳宮間配且は賊地之遠
近等凶面取調之後、夜白驅下り奉供御披覽度、此地米・
薪・塩醬之儀、何時ニても御不自由之筋決て無之哉、
内々手配罷在申候、但人数御繰出之義ハ日州路可然哉、
左候得は細島津より佐賀關一泊、翌日早目二田之浦迄、
海路之運送如何ニも輕便可有御座、肥筑之行軍大河・
大坂を越シ、固より厭悪可仕事ニ奉存候、重ねて橋船
御用意之次第は、嘉右衛門より可申出奉存候、

一方今小倉滞在、賊徒之巢窟を眼前ニ睨視仕、叱咤慷慨
ニ堪兼罷在申候、抑山河隔絶之時口ニは、流石目撃も
不仕、聊山水ニても眺望之趣向相萌候得共、自然喚ハ
応候賊巢接近之地江起臥、平穩之客中肝胆破裂之懐、
已ニ昨年極冬蒸籠焼終沈没仕候、魂魄輩波間ニ擲掬可
罷在、双眼涕淚頗る悲哀之情相催し、片時も早御追討
官軍之鋒を以、夙志之復讐を遂ケ申度事ニ奉存候、右
は乍庵略御配旁迄奉申上度、如斯御座候、恐惶謹言、

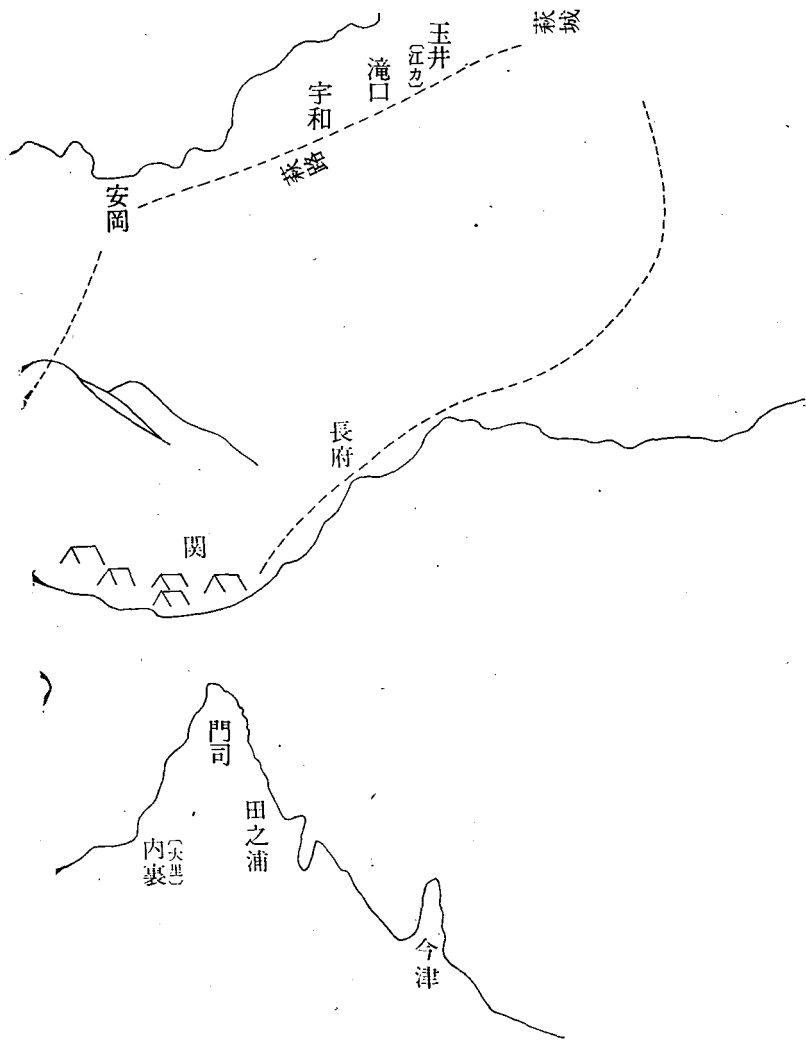
十月十五日

折田要蔵年表

大久保一蔵様

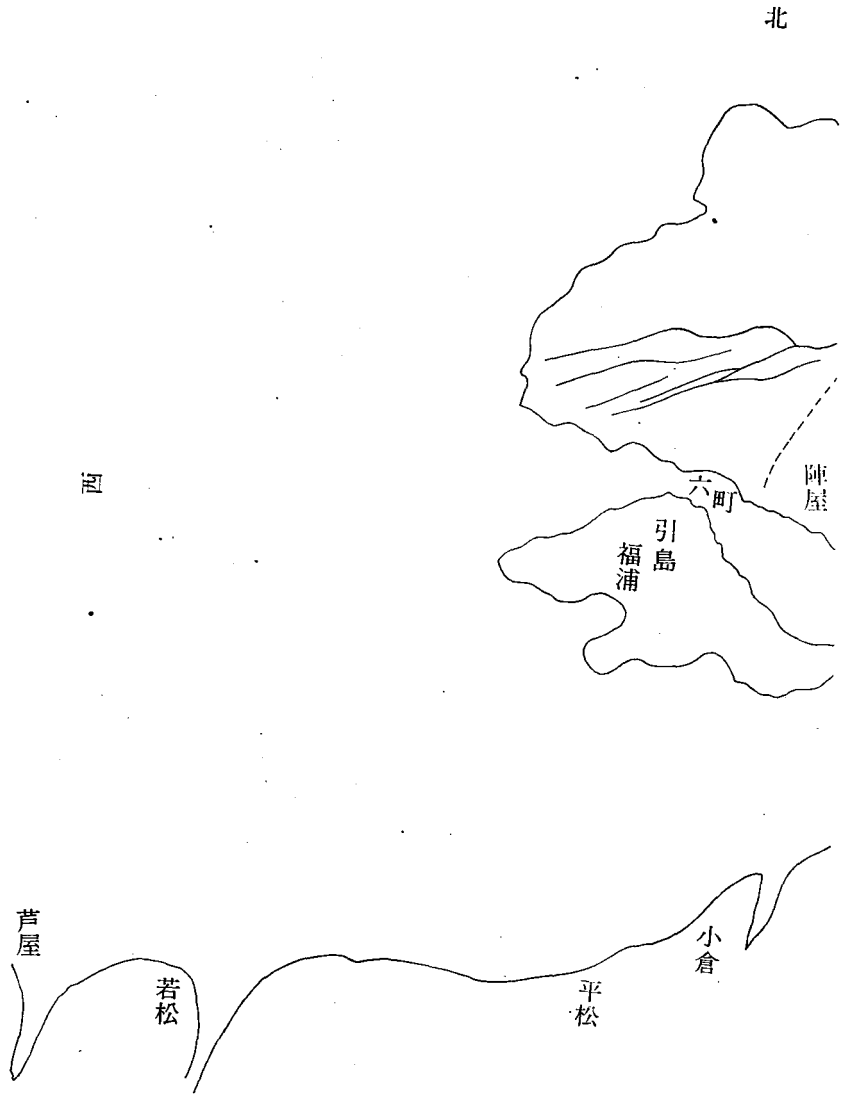
〔包紙に「地図一枚添」とあり〕

〔鳥津忠承氏所蔵本にて校訂〕



卑

元治元年 (1864)



四五九 御城下各砲台遠撃試験

十月十五日、例規ノ如ク月次御礼受ラレタリ、○本日
繰練場ニ於テ、御旗本隊西御城下警衛ノ三陣演習ヲ催
サレ、

太守公御出馬、畢ニ同所砲台遠撃試験命セラレタリ、

四六〇 在崎汾陽報告

四六〇ノ一

下之關戰爭後和議条約之始末、此節カラハより差出し、
右はコンシユル方より内分、今夕を限り借請候紙面ニ
候間、今夜中写取明早朝致返却呉候様、去八日之夜持
参堀壯十郎を以差出候付、則夜同人江為写取候上、致
和訳差上申候、尤右次第彼方ニても相秘候付、決て他
江は未相響段も、同人申聞候由ニ御座候、此段御届申
上候、以上、

長崎在勤

子
十月十九日

汾陽次郎右衛門(光通)

大久保一蔵殿

追て申上候、横濱表新聞も品川藤十郎より差出申候
間、是又差上申候、

四六〇ノ一
右書面左ニ記ス、

長州表江水師提督相越応接之折、如何之趣意にて外国
船江向砲発被致候哉、相尋候処、英國軍艦長崎へ廻来ノ時ハ同、
所奉行ト応接セシナラン乎
朝命・幕令之由申出候ニ付、其曲直を相糺さんと、江
戸表にて其儀申立候へは、一体条約取結候折、

京師之免許を不請して取結候事故、右様成行候由御答
相成候処、左様之義ニも候ハ、其義は夫ニて宜敷故、
向後右様之義無之様、取結居候条約ニ京都表にて御
調印有之候様致し度、其義相叶不申候ハ、京都江相
越、直々ニ別段之条約取結可申旨ニ御座候、

右は、今日当八日かねて横濱同役より新聞申越候間、
御含まで申進候、以上、

十月十七日

品川藤十郎
(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

四六一 町田民部褒賞

十月十七日

一御刀一腰

町田民部(久徳)

右在京之節、当七月十九日長賊犯 闕之砌、諸隊ヲ致
指揮尽粉骨遂ニ賊徒令退散、奉救

元治元年(1864)

御危難候段被聞召上、別テ御満悦ニ被思召候、仍テ為御褒賞、右之通拝領被仰付候条、猶可抽忠勤候、

右之通被仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

十月十七日

但馬

四六二 小松帯刀家内へ書翰

かへすくいとるくなされ候やうにとそんじまいらせ候、当分ハみなく出立前にて何欵と御用もなれ、何もいそき居まいらせ候、いんのくし遣し候まうけとりなされ候、何もあらく又の便りと申残まいらせ候、めてたくかしく、

文にて申入まいらせ候、まつく折からのさわりなくさゑくしくくらしのよし、いか計かり幾久しくめてたくそんじまいらせ候、拙者ニも大元氣ニ相勤居候ま、少しもくあんじなされましく候、さて当月五日六日の文も相とつき、かたしけなくそんじまいらせ候、無事の事共承り、あんしんいたしまいらせ候、何よりのぶたぎゆふ肉・玉子等給り、別てくかたしけなく、則より賞翫いたしまいらせ候、厚ふく御礼申入まいらせ候、蒸氣

船も着いたし、直様出帆いたし、京都よりは何も申遣し候間もなく候ま、細々申遣す候注文品のうちも、少々ハさし下し候ま、うけとり相成候ハんとそんじ候、跡ハ追々都合次第ニ遣しまいらせ候、こゝ元も当分無事ニて仕合ニ御座候、長州江人数さし出され候はつにて、此方よりも来月朔日ニ、高橋縫殿殿・群吉ニもさし越候はつニ御座候、拙者ニハ是非御留主相勤候様ニ重富より御沙汰ニて、跡ニ相詰候筈ニ御座候、此方よりも千人計さし出され申候、当年はよほとあたゝかにて、いまた雪なとも見へす仕合ニ御座候、その御地いかゝとそんじ候、湯治ハとちまり候ハんとそんじまいらせ候、何欵遣したくそんじ候へとも、やけ庭何もなくとんと込入候、此せつハ大いそきの飛脚にて、品遣し候事出来かね候、細々跡より遣しまいらせ候、長州のつこふ次第ニは、当年内来正月方迄ニ罷下候都合とそんじ、内々仕舞方の心得ともニ御座候、いよく相分候ハ、品々申遣しまいらせ候、折角くいとるくなされたくそんじ候、いそきあらく此よし迄申入まいらせ候、なぞ追々幾久しく申入候めてたくかしく、

十月廿日

小マツ

お近どの

帯刀

人々

無事平安
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四六三 十月二十一日小倉出張園田報告

先達て御国許出立之砌、御達之趣い細承知仕、去ル八日小倉江着仕候処、黒田嘉右衛門外一人儀久留米辺江御用有之相滞居候由、其折柄藝藩兩人此内より小倉江滞在いたし居候処、迎船参り兩人之内一人は急ニ罷帰候由承り、就ては兼て知人故同船仕候ハ、廣島着之上も彼是都合宜、其上彼方ニも列合も無之、同船いたし候ハ、却て仕合之由承候付、承知仕候趣は勿論、被相渡候御書付忝封黒田着之上は旁引合、直様相渡候様土持平八江申合残置、私儀は去ル十一日夕方乗船、同十六日爰元着船仕候処、伊藤萬次郎事去ル五日上京いたし、山内堅助山内鑿字方ノ吏ニシテ藝州貿易方担当セリは此内より御手洗江差越居、昨日爰元江参り候付、承知之趣を以引合承申候処、別紙之通都合能困方取計置候由承り、同人も今日爰元出立罷帰候間、尚委細之儀は御直ニ御聞取可被下候、左候て諸侯方 御参府一件之儀精儀參勤ノ年割并妻シタルヲ今回復旧、タルヲ今回復旧、シタルヲ云フ、小倉滞在中より承合候処、当時柄右様之儀共被仰出候ても、逆ても難被行、尤御追討御手当被

仰出置候御人数は、先御参府ニ不及段被仰出候由にて、

自然先寄是非御参府等無之候て不相濟時機ニも成立候ハ、いつれ当分通御願立にて不相成候ては、相濟間敷との含之由、肥後并小倉・藝藩より承申候、併松平兵庫守様ニは、近々御参府被成候御模様之由、然共慥成儀は相分り不申由御座候間、尚承合相替儀は追々可申上候、左候て長・防探索方等之形行は、別紙を以御届申上候間、左様御聞置可被下候、此段申上候、以上、

子

十月廿一日

藝州滞在

園田彦左衛門

大久保一藏殿

別紙

一米七百拾九石余

右去秋御交易米残にて、此節藝州本川筋三國屋土蔵江、御用達桑原儀三郎藝州貿易方用達ナリ切封にて御困相成候由、

一同式千五百石

右藝州忠海江

一同式千五百石

右備後三原江

右式行当子秋御交易米之内より御困取計候由、

(島津重豪氏所蔵本にて校訂)

茲ニ記ス処ノ御米ナル者ハ、長州征討ノ令下リ、本藩ニ於テハ遠路多数ノ兵食運搬スルニハ、頗ル不弁ナルカ故、藝藩貿易ノ為、彼ヨリ請取ルヘキ米穀ヲ、彼地ノ各所ニ蓄積シタルモノナリ、如斯三千七百石ヲ予備スルトキハ、三四千ノ兵員ヲ養フニハ多日ノ用タリ、此地出軍ノ際、規定ノ如ク三十日ノ用ヲ備ヘテ運送シ、或ハ小倉・福岡ノ間ニ黒田嘉右衛門・折田要蔵等先発シテ予備シタルモノ、殆ント三千石ニ余レリ、此等ヲ以テ多日ノ軍食欠乏ヲ告クコトナシ、又彈藥ノ如キハ数万ノ儲蓄アリ敢テ乏シキヲ憂フルコトナシ、

○諸侯参勤ノ制度、旧ニ復スルノ令ヲ布キタリト雖トモ、
当時ノ人心敢テ服スルモノナリ、(2)時勢人情ヲ弁セサルノ令ニシテ、行ハルヘキニ非ラスト一般嘲笑セシコトナリキ、

四六四 大島吉之助ヨリ総督尾州侯へ呈出ノ書

上之關之儀、諸藩攻口も無之、諸方之通船第一之繫場御座候処、近来通船ヲ塞、旅人之上陸ヲ押へ、台場等相備、萩表より守衛之人数をも差出置たる由御座候へ

ハ、徳山辺より攻掛之諸軍煩ひニも可相成哉と奉存候付、京都詰在之一手を以、海路より上之關乗取暫陣を居へ、諸船之海路を開候て馬關江相廻、国兵國兵ハ鹿児島ヨリ進軍ス云フと合し、其上萩口江乗込候手順ニ御座候間、此段形行申上置候、以上、

十月廿二日

松平修理大夫内

大島吉之助盛隆

此書面尾州惣督へ呈出セシニ、左ノ附紙ヲ以テ達セラレタリ、

長州上之關より上陸、攻寄方被相伺候趣、從是否可相達候事、
(島津重豪氏所蔵本にて校訂)

四六五 在京西郷ヨリ蘆屋在陣副惣督島津主殿へ
照会

此節長州征伐ニ付、来月十八日攻入被 仰出、付テハ其内彼地拳動相究候上、何分御注進可致候間、左様御含置可給候、御軍役奉行へモ御達置可賜候、此段申上候、以上、

十月廿三日

西郷吉之助盛隆

島津主殿殿久

四六六 喜入攝津長州征伐ニ付出陣被命

喜入攝津殿

右ハ此節長州征伐ニ付、出陣被仰付候条、総督・副総督へ諸事致談合、諸隊へ指揮行届、機先ヲ察シ軍謀ヲ誤ラス、御家名相輝候様可相勸旨被仰付候、

右通、今日 御直ニ被仰付候条、此旨向々へ可申渡候、

十月廿三日

龍衛(先)「川上」

四六七 西郷吉之助ヨリ小松帯刀へ照会

尾藩若井(成章)吉演達之趣は申上置候処、晩前書状到来い

たし、御旅館江罷出候様、老侯御逢ニ相成との事ニ御

座候故、早速参棲仕候処、初二田宮(篇體)如雲面会いたし候

ニ付、得と事情申込候処、永井主水正(尚志、大自付)ニも跡より参上

いたし候様子、暫談判も有之体にて相扣居申候処、老

侯御逢被申事ニ付罷出候処、御丁寧之御挨拶振にて、

打明て存慮御承知被成度との事ニ御座候間、吉川刃内

情之次第委敷申説、其上御策略ニ付、敵方両端二分、暴

党・正党と相成居候義、誠ニ天之賜と可申訳、譬一致之

ものニもいたせ、策を廻し両端ニ相成候様可致こそ戦

法ニ御座候処、両立之ものを一ツニ死地ニ追はめ候義

誠無策之ものと可申、実ニ拙き次第ニ御座候、左候て謝

罪之筋を立帰順之者、悉く賊人といいたし成し候義、御征

伐之本意とハ相考不申、帰順いたし候様御扱被成候こ

そ、御征伐之本旨と奉存候段、理を尽し申説候処、成

瀬隼人正(正肥、犬山藩主)も御前江被召呼候ての御質問ニ御座候、且偏

ニ御頼思食候間、一張尽力致具候様、分て御頼被成と

の事ニ御座候、右ニ付救応之人数藝地江暫足を止、其

上機會ニ乘し岩國江乘込候見込之処申置候処、老侯よ

り之御達ニ、諸藩悉攻口之難渋を申立、繰替之事計申

立居候て、総督府ハ是ニ御込之様子、戰略之事ハ先ツ

次ニいたし、攻口之事計ニ涉り居候向ニ御座候、夫故

只今攻口之義御達相成候てハ、諸藩之氣受ニも相拘、

一同動立事ニ御座候、勿論御達なくて、只勝手ニ岩國

より人数を繰上候てハ、諸方も一同崩立、自分々々之

勝手ニ攻懸候ものニ可相成候間、総督藝地江着相成候

て、そこで俄ニ総督之見込にて、萩之攻口を繰替、岩

國と達替相成候てハ、如何有之候哉との趣ニ御座候間、

何そ差支之訳ハ無之、全体救応隊之義藝地江踏入陸軍

を押候賦にて、藝州江ハ陣取もいたし置候間、是迄人

数を繰込置候て、御下知ニ従ひて、岩國江乘入候様ニ
相心得、可罷居と申置候処、左様なれハ此義ハ至極秘
し置候様承候付、委細承知仕候旨相答置申候、然処老
侯様より御脇差拜領被仰付、一向尽力いたし呉候様と
の事ニ御座候、尾州ニても胸一杯と相成、諸藩之処攻
口等難渋いたし、弱め計相見得候故、もふハ薩州を取
込不申候てハ、尾の取れ候事ニハ無之との見込ニ相成
候半軟と相考居申候、夫故近來せび涯相成候処、尾州
之会釈も格別相変、依頼と計申居候位ニ御座候、右等
之都相成申候間、今日ハ早速藝州地江差向出帆可仕
候間、左様思食可被下候、御当地より之御人数ハ、矢
張藝地江差向候様御下知被成下度奉願候、此旨荒々形
行迄申上候、恐惶謹言、

西郷吉之助

十月廿五日

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

四六八 江夏蘇助ヨリ海江田武次へ書翰

尚々乱筆御任免被下候、イマタ十五日ヨリ一夜モ八
ツ共聞カン夜ハ無御座候、本文ノ儀ニ付、乍恐小松
家・大久保様ニハ、御下国不相成方可然ト吟味仕事

ニ御座候、

御出立後御左右不承候得共、無御滞御京着、尚御壮健
可被成御座、目出度御儀奉存候、爰許御宿許皆様御無
事被為居候間、御放念可被下候、扱奈良原君・森岡君
ナドノ事件ハ疾ク御聞及モ為有之筈、実ニ残念ノ次第、
切齒ニ堪兼申候、就テハ君側ノ辺ノ所モ余程相起リ良岸
君ノ御尽力実ニ成、其外下荒田方ナド段々尽力有之候処、
入申候御推察昨日断然ト御上ヨリ御書取ヲ以再糺イタシ候趣被仰
出、早速昨日八ツ時分ヨリ下町下会所へ、御三役初其
外掛御役々等御下り相成、今日廿八日只今迄モ不相濟、
乍然御案内ノ通、両士進モ無実ニハ疑ハ無御座候、分
明ニ相分り可申候、左候得バ桂大夫初其外ノ所モ一変
可有之ニ付、跡々御所置モ色々混雜モ到来可致候間、
当世態天下急究ノ折柄、実ニ不容易事件御座候間、岩
下様御下国相成候趣御尽力被成下度、偏ニ奉希上候、
幸五郎君ヨリ別段細事可被申聞候得共、荒増申上候、
先ハ此段任幸便一筆如此御座候、尚追々可申上候、恐
惶謹言、

十月廿八日八ツ過認

江夏蘇助

海江田武次様

参人々御中

追啓、西郷宗公ニモ、御同宿ノ人へ乍不成合宜被仰
上置可被下候、御地ハ如何ノ事御座候哉、異船モ近
帆ノ由、征伐ハ如何ノ御模様御座候哉、相替儀モ御
座候ハ、御洩シ被下度御願申上候、

四六九 十月二十九日 太守公御親書ヲ以御布令

今般長州征伐之命ヲ蒙リ、為先陣出軍申付候、就テハ
諸軍可励勤忠候、全体犯 闕之大逆天地不可容之重罪、
前代不聞所之所業難差置賊敵ニ候間、不墜皇威各尽死
力、国家之武名相輝蒙命之任相立候様頼存候事、

子十月廿九日

四七〇 津田山三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

玉翰飛来辱拜見仕候、過日御通行之節、御早々ニテ遺
憾之至、御帰路別テ御急ノ由ニテ、不得拝接如何ニモ
残心罷在候処、此節尚又御通行大慶存候、明朝ハ小生
ヨリ御旅宿へ可奉窺候間、左様御承知被下度、拙屋へ
御枉駕被下候儀ハ、彼是御手数モ相懸リ申候間、何様

早天御旅亭へ参趣可仕卜存候、先拝答迄如斯御座候、
以上、

十月廿九日

黒田嘉右衛門様

拝答

津田山三郎（信弘、熊本藩古）